五、義務教育以外の教育

1、幼稚園

一九四一年（昭和十六年）の国民学校令が公布される頃から、村内の各字に幼稚園が設置されるようになり、その頃の軍国主義的時勢が反映した幼稚園教育が行われた。一九四六年（昭和二十一年）になって、東初等学校に幼稚園が併設された。園児たちは、児童生徒と同様、木陰、広場や浜辺で活動した。当時は戦後の復興に精励する父母に代わって幼稚園は子守の役目を果たす傾向が強かった。一九七六年（昭和五十一年）に、やっと東小中学校敷地に園舎が落成した。また、字に設置されていた幼児園では三歳～四歳の子供たちを施設設備の整わない中で保育した。

2、青年実業高校

一九四八年（昭和二十三年）に戦前の青年学校の後を受けて、沖縄の各地に青年実業高校が設置された。本村においても東実業高等学校がヌンガニクに設置され、初代校長に金城珍徳が就任した。実業高校は職業教育を目指した教育課程が編成されたが、わずか一年で廃校になった。廃校にともない教師は村内の初等学校、中学校へ配置替えされた。

3、辺土名高等学校の設立

一九四五年（昭和二十年）十二月六日東村、大宜味村、国頭村住民の悲願が叶い、饒波に辺土名高等学校が設立された。田井等高等学校（名護高等学校）の分校であったので、二十一年三月分校主事（教頭）として池原貞雄が任命された。

なお、創立から昭和二十三年四月一日の学制改革「六・三・三」制の実施までの三年間は四年制であった。辺土名高等学校の設立で高等学校への進学をはじめ、上級学校への進学率が急速に高まった。また、創立からしばらくの間は「ハイスクール」と称され、ハイスクール生は児童生徒の憧れの的であった。

六、社会教育と各種組織の活動

1、青年会活動と成人教育

(1)青年会活動

いつの時代でも若者の果たす役割は偉大である。衣食住に事欠く最中でも心を一つにして戦争で荒廃した故郷の復興のために、初代青年会長池原貞雄の指揮の下に青年たちは立ち上がった。日常生活の安定を目指して青年会を先頭に、全区民が村づくりに心血を注いだ。区民の総力を結集

新制中学校第一期卒業生の川田青年会への入会記念（1948年）

した強力な団結「イーマール」の相互扶助の精神でいち早く家屋造りから始められた。そのなかでの青年会の果たした役割は計り知れないほど大であった。

次に青年会の代表的な取り組みを挙げる。

①スポーツや文化活動　―むらづくりの基盤―

ユイマールに追われる日々でもスポーツを愛好し心身を鍛えることや舞踊三線などを演じるなどの文化活動を行い戦争で疲れた心を癒すことも絶やさなかった。村のリーダー達は心身を鍛えるスポーツの振興や文化活動の取り組みで、灰燼（かいじん）の村の復興を図った。そのことは嘉陽部落との部落対抗陸上競技大会の実施や昭和二十一年に開催された「ヌチヌユーエー」の実施などで伺い知ることができる。先輩各位の指導助言の下（もと）で連帯感の一際強い川田気質で早い段階で生活が落ち着き、いち早く文化生活が営まれるようになった。また、青年達は団旗の下に集い、川田青年会歌を歌い川田青年を大いに謳歌（おうか）した。

②青年会館建設　―復興の殿堂―

終戦により海外、本土などから故郷への帰還者が増えて来た。戦地帰りの若者たちは青年会を組織して郷土の再建、復興を目指して活発な活動を展開した。焼土と化した屋敷の後片付け、整地、埋め立て作業、荒廃した農地の整備作業などに連日汗を流した。馬、牛などの役畜は戦争で殆ど失い、田畑の整備には鍬を振るい、全て人力に頼った。このような活動を続けるには拠点が必要とのことで独自の専

用の青年会館建設に取り組んだ。養蚕場（旧公民館）の敷地を借り受け、資材はやんぱる材を利用した。ヤマクを切り出すためにはその道ベテランの大宜見朝三郎、儀間光徳、城間栄先輩らの協力を得た。アカガーラ。大工賃、板材、などの費用は青年会の共同作業などで得た金で当てた。このことについて一九五一年三月十二日付沖縄タイムスは「自力で建てる成人学校　奥間、川田の青年会が」と次のように報じている。青年会の自力により、成人学校且公民館的性格を帯びた瓦ぶきの堂々たる建物を建築、政府成人課が将に沖縄一の折紙付けている模範二部落がある。（中略）その二東村川田成人学校で建坪約二十坪、資金は共同で土木工事に従事、その半額を貯金して建築費用にあて机、腰掛を完備させしめていると同時に寒村にありながら青年会で電燈事業を経営、全部落に配でん、同成人学校にも配線、明るい電燈のもとで日夜修養にいそしんでいる。また一九五一年六月十六日付うるま新報は「農村ありのまま―東村の巻」で次のように報じている。（前略）この村の青年団の活動は目覚ましい。川田では電気経営の資金をつくるため、男女団員一致団結、山かせぎの共同作業や、換金作物の西瓜（二百個）の手入れ、見張りに日夜交代で懸命。など大きなニュースとして全島へ紹介している。

団結力の素晴らしさ、思いやりの貴さ、共に生きる喜びなど、その精神力は先達から受け継いだ尊い川田魂（川田根性）が基盤であった。青年会館は川田青年会の団結の館であり、心のより所、誇りのシンボルであった。青年団のものだけでなく、字のすべての行事を実施する場でもあった。

③電気事業の変遷　―文化生活への歩み―

戦後、ランプ生活を続けていた頃、川田青年会は農産物生産活動に積極的に取り組んでいた。フガツタ下流の広い砂地（カニク）を利用してスイカ作りをしていた。収穫期になると盗難事件が相ついで発生したため、その防止策としてスイカ園に照明施設を設置した。米軍払い下げのエンジン、発電機を利用してサーチライトを点灯して監視を続け、その余剰電力を一部の家庭に供給して点灯したのが電気事業の始まりである。その後、平良茂、久高浩幸両人が個人経営の電気事業を始め、夕方から十一時までの時限点灯を続けていた。しかし、東村農業協同組合が琉球政府（県）の農山漁村電気導入促進法の第一号の適用を受け一九六一年十月二十五日から川田、平良地域に点灯（日没から午後十一時の時間）が始めたことで平良茂等の施設は農協が買収した。さらに一九六四年には全村電化計画の方針に伴い農協の電気事業は村役場へ移譲した。同年十二月三十一日から村役場が慶佐次区在の米軍施設のローラン基地から電力を譲り受け川田、平良地域の夜間点灯が続けられた。一九六九年十一月九日から沖縄電力による村全域点灯が実施された。

④ピードーイ（火事だよー）　―災害対策―

川田区では戦前から戦後の林業を営んでいた頃まで「ピードーイ」と言う行事を毎年実施していた。防火意識の高揚を図る古来の年中行事であった。主催は青年会の年中行事の一環として毎年旧暦一月のハチウマニー（初うまの日）の夜中におこなわれた。この日には青年会がアサギマー（広場）に積み上げた薪、草等に火をつける。火が燃え盛る頃、東西に分かれた青年会員がバケツ、ビンダレー（盥）などの金属片を叩きながら西方の青年は「アガイピードーイ」（東方で火事が発生した）と東方の青年は「イリピードーイ」（西方で火事が発生した）と叫び区民を起こす。実情を知らない外来者はバケツに水を汲み現場へ駆けつける人も多くみられた。

(2)成人教育

戦後の社会教育の一環である成人学級は青年学級、母親学級、婦人学級、家庭教育学級等で一般成人の文化的教養の向上と、職業及び産業に関する知識技能の学習をした。また、家庭教育学級では、家庭における基本的生活習慣の定着や家庭の役割、子どもの発達段階と性格形成、親の教育上の責任及びしつけの問題等の学習をした。

1950年（昭和25年）　台風の跡片づけに集まった川田青年会

2、婦人会活動と婦人教育

(1)婦人会活動

村おこしの基盤は婦人の力に負うことが大であることは言うまでもない。婦人を激励し勇気づけ発奮させる教育を推進してきたのが、戦後の東中学校初代校長金城珍徳であった。

①婦人会組織の結成　―生活向上のスタート―

大戦後の荒廃した故郷に婦人の地位の向上と福祉の増進を図り、家庭生活及び社会生活の水準を高めることなどをめざし、昭和二十三年の早い時期に、いち早く川田区の婦人会を結成させた。それは画期的なことで北部連合婦人会や沖縄県婦人会が未結成の早い時期であった。初代会長に東初等学校教諭の仲村恒があたった。

なお、金城珍徳の指導の下に東村婦人会の結成とともに初代会長に仲村恒が就任したので昭和二十四年には川田区の二代目の婦人会長に真栄城スミが就いた。金城珍徳や仲村恒等は婦人会の果たす役割の重要性を説くとともに困窮の中での衣食住の指導及び連帯して暮らす助け合いの精神等を助言した。衣食住に事欠く毎日で婦人会活動も幾多の困難に出くわした。

②新生活運動の推進　―豊かな生活づくり―

課題の山積する厳しさを乗り越え安定した生活を目指して、新生活運動や家計簿の記載などで生活の合理化に取り

カーサジューシーづくり（1996年）

婦人美化活動（1978年）

県社会教育大会参加（1964年）

海邦国体に向けての花づくり

川田区婦人会復帰観光記念（1972年）

川田区婦人会視察研修記念（1989年）

組んできた。他方では、ボランティア活動、環境美化、レクリエーション活動を推進するなど村興しの全ての分野にまたがって活動を展開した。また、飽食の現在では想像もできないほど物の無い時代にすこやかで健康な赤ちゃんを育てるために赤ちゃんコンクールも実施した。とりわけ、会則に「生活改善部」を位置付け生活の合理化を強力に推進した。その初代部長は金城美智子（金城珍徳の妻）で昼夜問わず尽力した。実践事例を挙げると主婦労力軽減のための改良かまどの導入、新正月一本化運動、合同祝賀会の推進、冠婚葬祭の簡素化や諸行事の時間厳守の推進等であった。

●生活改善普及員の記録―宮里　信子

一九五三年

宮里悦先生の普及員の時に、川田と平良に生活改善グループが結成された。その当時は生活改善グループは何をするかも知らず、先生の命ずるままに夫婦グループを結成しました（男十名、女十八名）。料理講習会で作ったご馳走を夫たちに試食してもらい、三味線でレクリエーションをして大変喜ばれた。

一九五四年　七月十日

あらゆる封建性を家庭から社会から追い出すために、家庭管理の計画化で農村の年中行事や冠婚葬祭に力を入れた。毎日の生活は苦しいのに、結婚式、生年祝になると、家庭では大きな借金をするようになっていた。それを改善グループが取り上げ結婚式は酒一合、祝儀やご馳走時間等も一定し簡素化した。その実績を中央発表会で宮城幸さんが発表し組織的な取り組みが評価された。川田部落では現在も生年祝いは合同で実施している。

一九五七年　八月一日

私は、東村生活改善普及員に任命された。当時は各村から二人ずつの推薦があって、那覇の農業試験場で試験と面接があって、各村一人ずつ配置された。

北部地区普及員では、かまど改善が取り上げられた。当時は、三つ石および土かまどであった。衛生的にもまずく学校の生徒はトラコーマが多かった。

主婦は毎日山へ行き薪取りが仕事でその労力と時間の消費は大変であった。

農業改良普及員の宮城昇さんと打合せ、先ず村に改良カマド（レンガ）を一つ見本を作って、見てもらうとのことで比嘉源次郎先生を招いて農改普及員の家に見本が出来た。その講習会には農業改良普及員、生活改善普及員が加わった。百聞一見にしかずでグループ員は次々と作るようになり、薪が半分で済み、山にも一日おきで行くようになった。余熱利用の効果が現われ時間が半減された。衛生的で子供達のトラコーマが無くなったと話し合う場面もあり、余暇は生産に励むようになった。慶佐次　宮城善忠、川田　池原直吉、技術習得。

一九五七年　十一月二日

考える農村女性皆の力で生活改善

経済局農務課生活改善係による普及研修会が各地区主事を中心に村単位で行われた。知識を得る機会のすくない農村の婦人たちは、このグループの集りがただ一つの勉強の場で、乳児を背に幼児を傍において熱心に学んだ。

当山ヨシ主事、河野ノブ普及員が来られて「作業衣着用」と「食事と栄養」について講演指導を受けた。作業衣着用について、当山先生は恩納村では、三着ずつ作り、生地代は百五十円で出来ると、かすりで見本を持って、着用させて作るようになった。作業衣着用については、金城課長にもやかましくいわれたことがある。私の方ではパイン畠のため、かすりでは生地がうすいのでと色々むずかしくいわれ、衣の係の兼本先生をパイン畠に案内して実際に見てもらい、生地は厚いものを考えてもらい、手甲ずきんも色々考案され現在は日常化するようになった。仕立てはグループ員でミシンを持っている人に依頼したのが多かった。

充分な睡眠のとれる寝具の確保（共同購入）

敗戦後のことで一つ一つ改善して、その家庭にも寝具が不足で二、三人で一枚のふとんを使っているので、名護の丸長商店を北部普及員（生改）が相談して月賦制で生地と綿を購入し技術指導して、充分な睡眠のとれる寝具を確保された。カバー、カヤも揃えるようになり、安眠して翌日も生産に励んだ。一日二十組も講習で出来上がった時にはさすがに食事をとる時間もない位であった。皆が喜んで肩や頭に乗せて行く姿を見ると疲れもとんで行く思いであった。その当時の社会教育主事の嶺井先生が普及員は縁の下の力持ち、こんな田舎の山の中にも都会並に寝具が整えられたと、ほめられたこともあった。

環境が衛生的に考えられるようになる

衛生面では三段式便所を進めた。その当時は十二指腸虫保有者が多いので村役場としても衛生係がやかましかったが、何んといっても、金のかかることでグループ員は改善模合を起し、その模合は必ず、三段式の便所を作ることを固く決議された。もし出来ないと次の人にゆずるとの条件で実施した。

●川田部落における諸行事の改善について

私は生年祝以外の私達の部落で改善された主な年中行事について申し上げます。

私達の部落で改善された主な行事は、一、お正月　一、彼岸　一、六月の海神祭　一、お盆　一、八月の豊年踊りの五つでございますが、その他に平生家庭で行われる出産祝、祭祀（ウスコー）、結婚式等について申し上げたいと思います。

初めにまずお正月行事について申し上げます。お正月には従来ウシーマールーといって青年同志又は気の合った者同志が組をつくり各家庭を順々に廻って、お酒をのみお祝をしていたものでそのため、各家庭ではどこの家でも四、

五升のお酒を用意し主婦は回礼客を接待するのに大変でしたが、一九五四年頃からそれについての批判が起り、五五年には正月用酒の規制が出来て、五合以上酒を買う事ができなくなり五七年からは、このウシーマールーは完全に廃止されました。

次に贈答品についてでございますが、正月には親類や先輩に贈りものをするならわしになっていました。五一年までは、大分虚礼がはびこり正月経費の凡そ二〇％が贈答品として消費されていましたが、五二年に婦人の決起によって次のように自粛体制がととのえられたのでございます。

一、贈答品は祖父母、伯父、伯母、その他特別におせわになっている方々にとどめる。

一、おくり物はできるだけ日用品やし好品にする。

をきめました。しかしながらその実行はなかなか困難でございました。一年次は凡そ六〇％の実行率でございましたが、年がたつに従ってだんだん華美になる傾向が現れて参りましたので、その都度都度話し合いをもって自粛をよびかけると共に、共同店にも贈答用の品物を仕入れてもらったため五七年からは大分よくなり、最近では贈答品の交換などの幣風が一掃され、五一年の自粛体制がほぼ定着したのでございます。

次は回礼について申し上げます。正月には回礼がつきものですが、この回礼も五二年頃からその廃止を部落常会で決めてきましたが、なかなかその慣習を改めることが出来ませんでしたが、五六年からは元旦の日に氏神様に集って、そこで年始のあいさつを交わし努めて回礼は廃止することを常会で決めましたら、だんだんよくなって参りましたが、完全に廃止することはできませんでした。この回礼を廃止する理由は、

一、回礼客があまりに多すぎる。

一、主人は回礼にでて一日中家をあける。

一、主婦は回礼客の接待のために折角お正月のために作ったはれ着をきるひまもなく、平素と変わりなく台所でいそがしくせねばならない。

一、あっちこっちに酒のみの集団が出来てけんか等が多い。

以上の理由から、家庭本位の静かなお正月は到底望めませんでしたので、一九五八年からは新生活運動で、

一、回礼はつとめて早朝にする。

一、回礼は祖父母や、伯父、伯母、特にお世話になっている方々に止める。

以上の実践を三団体に強くよびかけ各団体で責任をとるようにして参りましたために一段と自粛して静かな家庭本位のお正月をむかえることができる様になりました。

次は春秋の彼岸について申し上げます。こちらでは従来彼岸は家庭本位で、仕事を休み、春はたいてい田植の終りや学校の卒業式等と同じ時期になりますのでクシユックイや生徒の進級祝等と兼ねて行っています。秋はたいてい中秋の十五夜の月見と一緒に行っています。

次は六月の海神祭について申し上げます。この行事は一種の海神祭で、一九四九年まではノロや根神を中心とする平良・宮城・川田の三区にまたがる大きな行事で、その日は前日より仕事を休みノロを中心とした行事に参加したものです。この行事をまかなう区の費用は相当額に上がったものでした。しかもその日はノロや根神を絶対権威とみる日でもあって、若いものや児童生徒に与える影響もあまりよくないと云うので、四九年にそれを改める声が指導者の中から出て、隣区と打ち合わせ、行事に付随しているハリュウ船と、相撲だけをとり上げ体育レクリエーションの日とすることに決まりました。その行事だけを大きくとり上げたため、最近では神事に関する行事については全く一般の人達の関心がなくなり、一部の関係者だけがとり行い、一般の人達は体育レクリエーションの日として楽しんでおります。最初の頃は関係者との間にいくらかの摩擦はありましたが、指導者や部落の中堅の人達の説得でみんなよく理解し、時代の進展を理解してもらって現在はうまくいっています。

次に旧七月お盆について申し上げます。旧十三日祖先の霊をむかえる日になっておりますが、特別な行事はなく、お夕はんを供えるだけでございます。十五日は、以前は山野のいろいろな果実をお供えして居りましたため、その品をそろえるのに手数がかかり経費もいりましたのが、婦人会の申し合わせによって、今日ではあり合わせの自家製品（パインやバナナ）と、ごちそうを供えるだけにとどめております。ところに依っては輸入品のリンゴやミカンまでもそろえて、仏壇に供える所もあると聞きますが、それに比べますと一段と簡素になっていると思います。

次にウークイの時間でございますが、午後九時までには部落中完全に終わっています。ウークイの後で青年のエイサーがありますが、二年前までは各家庭を一軒一軒まわるために夜中の二時頃までもやっていましたが、その後、あらためて組を三つに分けその上隣近所四、五軒一緒にしてやるようにしましたので十一時頃までには終っています。

次は八月の豊年踊りについて申し上げます。従来、この区では豊年踊りは多額の金とひまを費やして大変盛大なものでございました。

一九四七年の記録によりますと、練習のために各戸から金二十円を拠出し、各団体千円ずつだして、計五千三百円を練習雑費にあて、練習にあたる人達は四十二日間毎晩十二時まで練習をつづけております。このように多額の金と労力を費やし、踊りは八月十日・十三日・十五日とつづけておりましたが、丁度復興期でございましたので世論によって四九年には練習を十日に縮めて、踊りも十日と十五日（十五夜）の二回だけを行い、五〇年からは劇団を招へいして十五日だけ行っています。四九年頃改めた当初は、文化財に対する年寄の愛着があって反対もありましたが、経済的理由と復興に懸命であったのと若い人達の啓もうに

よって改善し、現在ではその行事のための多額の出費はなく、簡素に行っております。

区の年中行事については以上でございますがこのような行事改善する事により皆が物事を合理的に考えるようになり、無理な出費はなくなり、皆が深く自分達の生活を考えるようになっております。

次は平素家庭で行われる行事について申し上げます。

出産祝について

以前はお産があると親類をとわず友人等が集り盛大にお祝いをしたものですが、これは主婦や出生児にいろいろ悪い影響を与えるばかりではなく、主人を始め家族が毎晩の来客の接待で疲れ、そのため充分働くこともできず、経済的にも相当の出費で無理をしていましたので、一九四九年に婦人会でその問題をとり上げ話し合いにより、

一、男の方はお産のお見舞は遠慮してもらう。

一、婦人の方でもお見舞は夜十時までにして夜トギを廃する。

一、満産祝は一品とする。

等を決め区の常会にはかり自粛を求めました所、皆の賛同を得てそれを実行致しましたが、満産祝はやはり従来通りでしたので五〇年には又、

一、満産祝は親類だけでやる。

一、お祝儀は十円とする。

を決めて現在に及んでおります。その間お祝儀の額に変化がありましたが、皆が自粛してよく守っています。近頃では満産祝は家族だけでやり、満産祝よりは、家族の各人の誕生日を祝う風潮になっております。

次に祭祀について申し上げます。祭祀は以前はお餅と山海の品々をお供えするならわしになっていました。戦後はどこの家庭でも祭祀が多くそれに要する費用は大変なものでございました。食糧にさえ困る状態でございましたので一九四八年には婦人会で、

一、お餅は仏前に供えるだけ作り、焼香客には配らない。

一、お供えのごちそうは三品として、家へは持ち帰らない。

一、香典料は五円とする。

等を決めました。その中で一番問題は、接待のため出されたごちそうを各人が家へ持ち帰ることによって、その品について各人が批評し合い、とかく守りにくいものでしたが、これの持ち帰りを禁じたためよく守られております。私達の部落では、以前から祭祀には、お酒はあまり出しませんのでその点は別に問題にしておりません。以上が改善された平素の行事のあらましでございます。

今後、是非改善せねばならぬものに結婚式とアブシバレー等がございます。結婚式の改善には、いくつか問題がありますが、その主な点をあげますと、

一、結婚は式をあげて行うのが少ない。

一、結婚は一世一代だから何とか盛大にしたい気がある。

一、今まで他人の盛大な結婚式にあやかっているから、そ

の義理でなかなか改善にふみ切れない。
等でなかなか改善できないでおります。従来結婚式には、少なくて一万円、普通二万円位かけていますので何とかこれを改善して、経済的に無理なく、結婚後その負担にあえぐ事なく生活が営めるよう改善して行きたいと思っております。
これを機会に婦人会を中心に青年会とも話し合って、是非改善して行きたいと思っております。
私達はこのように改善してきましたが、これはあくまで改善であって、なくする事ではなく、合理的にそして真の良さを失わないよう、今後もつづけていきたいと思います。

生年祝について

私達の合同祝は、一九五二年から始めて、今年まで八年を経て来ましたが、私達が、この生年祝を合同祝にまでもって来たその動機と経過について述べて見たいと思います。
一九四六年、戦後初めて正月を、私たちは、戦争を生き抜いて来た喜びと一方、多数の戦争犠牲を出した悲しみの心のまじった複雑な気持ちの中で迎えました。丁度其の頃は、酒は自家生産をやっていた時代で、どこの家でも酒を作っており、戦争後の心の痛手を酒にまぎらわして暮していた時代ですので、その年の生年祝は部落中、老いも若きも酒だけは存分に飲んで祝いました。
四七年には、相変わらず酒は自家生産を致しておりましたが、酒の価格だけは、村一円に一升五十円という公定値を定めましたが、お祝いをする家では、甘露を主原料にして酒を作るため、お祝いに要する経費は、あまりかかりませんでしたが、貨幣制度が布かれた当初で、お金の流通もよくなく、公務員の月給が、二百円前後の時代ですので部落で、一応祝儀料二円ということだけを決めて、各自盛大にお祝いを致しました。その頃から、林産物による稼ぎが出来るようになり、四八年から四九年にかけては、沖縄の復興時代にマッチして大変景気がよくなり、それにつれて、四八年の生年祝も、部落で祝儀料五円と決めた以外は従来通りで、大変華美になって来ました。然し四九年には、そろそろ人心も落着き、それに酒の密造も厳禁され、お祝いの当事者にとって、相当経済的に負担がかかるようになり、自粛の声が出て、部落の常会で、
イ、お祝は、四十九歳以上だけやる。
ロ、お客の案内はやめて、親兄弟だけでやる。
ハ、お祝儀は、拾円以下とする。
等を決めて、各家庭で実施する事になりました。然し、終戦のころの惰性で、表面は、守られた様でしたが、十三歳から三十七歳までの祝も、殆どやっておりますし、お客も案内しないということになると、当事者は自分を皆で祝ってもらえないという不満と、よその人は義理・人情という面から、どうしてもお祝に行かねばならないということと、お祝儀も都市の人の影響でお祝いをつつむこと等でこのとり決めは、なしくずしになってしまいました。又、

御馳走を規制しなかったため、皿のものが大変華美に流れた。お祝をいくらか規制しなければいけないという事は、皆感じてはいるけれども従来の慣習から抜けきらず、ずるずると従来の慣習に引張られてしまったのです。又、時間の規制をしないため、おそくから、酔って当事者の家におしかけて、皆の取り決めが充分行われなかったので、五〇年には、前年を反省して、次のように決めて行いました。

イ、酒は、コップ一杯限りとする。

ロ、祝儀は十円以内とする。売店から紙の札（十円）を発行してこれを売店で交換する。

ハ、四十九歳以上だけお祝する。三十七歳以下は、家族、親兄弟だけでやる。

ニ、お客の招待は、六親等内の親族だけでやる。

ホ、時刻は十時半にホラで予告、十一時には終る。

これは、不満の声もあまり聞かれず、比較的よく守られましたので五一年も、前年通りということで、五一年も五〇年と同様にして行われました。

然し、五一年には、林産物による景気が後退したうえ、天災による農作物の被害が大、そのため、経済的に大変行詰りを来たし、この様に規制したお祝でも、当事者にとって大変負担が重くなって来ました。その上親族の中に老人の当事者がいると、祝儀以外に着物やその他、相当の贈物をする習慣が何時のまにか出来て、一般の人々の負担も相当重くなって来ました。この様な経済的な負担をバックにして一方では関係当者の助言によって、新正を行うこと、戦後このころやってきたお祝の気風を刷新したいという風潮が生まれ、村一円に、村としてこの問題を取り上げ、各部落一月五日に合同祝を行うことを決めました。それで、当時の区長は、その件を五一年十二月二日の評議員会にはかり、四日の部落常会で各戸に伝えると共に、各団体を通じて啓蒙にのり出しました。特に当年の人達には、各班長を通じて合同祝についての説明と説得をして、その間、一部の人々には賛同を得る様にしました。

一、お祝を外ですることは、御先祖様に申し訳ないという不安がありましたが、一人の老人が強く賛同の意を表したことと、御先祖へは、お祝の日の午前に、その旨報告をするという事で、全員が合同祝へ賛同致しました。それで、十二月十六日の常会では、合同祝が決定され、具体的な計画まで進み一月五日に合同祝を行うことになりました。第一回の合同祝の要項を申し上げますと、

1、日時　一月五日午後一時～七時

2、場所　学校

3、会費　一般（各戸）二十円

4、酒こう　イ、一般酒適量持参

ロ、当事者、四十九歳以上　二升、

二十五～三十七、一升

5、余興、青年会、成人会、婦人会、児童生徒、持寄

（各団体長でプログラム作成）

6、会順　イ、開会　ロ、区長挨拶　ハ、当人紹介
二、祝辞　ホ、代表者謝辞
へ、記念品贈呈　ト、余興

事前に各団体を通じての啓蒙により特に老人達の理解を深めた事と、区民の協力とで予想以上に盛会になり、ことに当年者の老人達は、最初の不安に比べて部落の人たちが、一同に会して祝ってくれたと、特に、記念品と写真によって、お祝が意義づけられ、心から喜びを表してくれました。

今までのお祝では、漫然と散在し、そのため殆ど普通の一年中の家計に大きな影響を与えていたのが、記念品や、写真などによって、お祝が記念されると共に、それぞれの当年者の家では、お祝に用意していたお金で、何かの記念になる何らかの形を残しておりますし、その金で瓦葺の畜舎を建築した人もおりますし、家の改善をした人もおります。

合同祝をする事によって、気軽にお祝が出来、お金のある人は、その分だけ何か記念が残せるし、お金の無い人でも無理することなく皆と同じように、お祝がしてもらえ、部落中の人が、分けへだてなく、お祝に参加することが出来るということで、皆から大変喜ばれ、合同祝は、成功致しました。

それから今年まで、八年、合同祝をする事が当然となり、常会でも合同祝という前提のもとにその内容だけを決めている次第ですが、その間、五五年からは、時間を午後一時からのものを、三時に変えた位で、現在までに及んでおります。

一九五九年五月二十六日　新生活発表会

〈川田生活改善グループ〉

結成年月日　一九五三年三月二十五日
人　員　男十名　女二十名
六〇年会長　吉本　幸
一九六〇年十月十日登録
グループスローガン
一、台所施設で私達の生活を合理化させましょう。
二、全家庭で栄養みそを作りましょう。
三、働き良い作業着を作りましょう。
プロジェクト
一、家計簿の記録
二、栄養味噌の自給と家庭菜園の経営
三、養鶏による作業衣の着用

〈川田生活改善グループ〉

登録年月日　一九六三年九月二十日
女二十三名
会　長　比嘉　トミ
書　記　奥本　徳子
プロジェクト係　宮平　タケ
レクリエーション　金城　文
一九六三年十月一日登録

スローガン

一、台所施設で私達の生活を合理化させましょう。

二、環境衛生で明るい家庭と村を作りましょう。

三、家計簿で明るい豊かな家庭を作りましょう。

プロジェクト

一、養鶏で日常食の合理化と貯蓄を致しましょう。

（他のグループは、六〇年と同じになっている。）

③その他の活動　―婦人会の誇り―

これまで川田婦人会の活躍は目覚ましく、県婦連主催事業の美化コンクール、芸能大会、主張大会での入賞または表彰されるなど多大な実績を挙げてきた。現今でも婦人会は諸々の分野で多忙を極め物心両面の負担過重にもかかわらず区のすべての行事の重要な役割を担い、心豊かで住みよい社会づくりに多大に貢献している。

近年、文化活動の停滞を懸念する声が聞こえる中で、これまでになかった、自らの意志で集う画期的な組織「一・五会」（いちご会）が結成され充実した活動を展開している。結成の所期の目的は毎月十五（いちご）日に集い自由奔放に語り懇親を深め、自らの豊かな生きがいや感性を高めることであった。構成員は五十六歳から六十四歳（婦人会員を終了し老人会員の一年前）までの趣旨に賛同する女性達である。結成は二〇〇〇年（平成十二年）の七月、希望者九人で発足した。平成十三年からは談話をすることはもとより、芸能を身につける活動へと発展してきた。集いも月一回では不十分で毎週水曜日に活動日を増やしている。幸い会員の呉屋宮子が琉舞の師匠免許所持者で、演技指導の講師を務めている。習得した演目の一例を挙げると、かぎやで風、四つ竹、川田ヤン松、パイン娘等である。また、これまでの公演は平成十三年に特別養護老人施設「やんばるの家」で慰問公演をはじめ、東村つつじ祭り、東校の「てぃーだ学校」、川田区の豊年祭である。それに二〇〇三年（平成十五年）十一月に挙行された東村制八十周年記念祝賀会の舞台で四つ竹を披露した。これからもボランティア活動として種々の団体からの要請に応えていきたいと意欲的である。

なお、これまでの活動の実績から区民は「一・五会」の今後の活躍を大いに期待している。

(2) 婦人教育

婦人教育としては婦人自らの地位の向上を図る研修、望ましい家庭教育の在り方、青少年健全育成の取り組み、組織強化の研修、レクリエーション講習会などである。

3、青少年教育

各地域では青少年問題の指導組織を強化し、青少年の育成活動を推進するとともに家族間の望ましい人間関係をよくしていくために、話し合いや家庭の日を奨励した。健全な青少年団体や地域子ども会の育成を図り、教育隣組の組織を充実させ、子どもの幸福を守るための連帯感を高め社

神山敏雄巡査と父母会長の吉本勲

中村保指導者とやまびこ道場の門下生

保母の玉村悦子と園児たち

練習風景

玉城国昭の英語教室

昇級試合

会環境の浄化を図り、青少年の非行や事故防止に努めた。

(1)やまびこ道場の開設

一九七四（昭和四十九）年五月十八日川田公民館内に柔道場を設置し、「やまびこ道場」と命名した。それは、青少年のはつらつとした元気いっぱいの声が部落内の隅々にこだまし、健康で明るい村づくりの担い手になることを期待した名称であった。

一九七二年頃から福地ダム建設工事が急ピッチで進められ、村外の工事関係者や工事車両の往来が激しく、そのことと関連すると思われる傷害沙汰、盗難事件やその他諸々のトラブルが発生した。そのため川田区民をはじめ村内の全住民が不安の日々を送っていた。特に児童生徒の日常生活や学習環境に悪影響を及ぼし、子どもたちから笑顔が消え、純情さ素直さが失われ、問題行動が多発し、青少年の健全育成が急務になってきた。

ちょうどその頃、平良駐在所に赴任してきた神山敏雄巡査は状況を知り深く心を痛め、早速関係者と調整し青少年健全育成の一環として心身鍛練のため柔道場の設置を呼びかけた。区長、ＰＴＡ会長、役場、その外川田上原の日本青少年スポーツセンターなどから物心両面の支援のもとに川田公民館内に柔道場を開設する事ができた。指導者は神山巡査、役場職員の中村保、それに宮城区の与那嶺末一らであった。また、技術指導では辺野古の紫雲道場主浦崎康武五段の暖かいご協力もいただいた。

施設は川田区（区長比嘉博昭）から川田ＰＴＡ（会長喜屋武盛元）に引き継がれたが、運営は「やまびこ道場」父母の会（会長吉本勲）が担うことになった。

川田区の男子児童生徒のほとんど全員が毎日「やまびこ道場」に通っていた。また、毎月の進級試合には多くの父母が応援に参加し、子どもたちを激励した。試合終了後は父母の手作りの料理を囲んで懇親を深め親子の絆を強めた。おかげで子どもたちの情緒は落ち着き、次第に問題行動も減少した。父母をはじめ地域住民は柔道の成果に大いに喜び、指導者の神山敏雄巡査、中村保、与那嶺末一の三氏らに深く感謝した。

対外試合の一面では、瑞慶覧の米軍施設内にある体育館で米人の児童生徒との琉米親善試合や嘉手納町の青少年との練習試合等、他市町村との交流試合も数多く実施した。柔道の話がスポーツ全体の話題や青少年健全育成のうねりとなり、川田以外の字にも波及していった。

他方、学習指導面では、村役場職員の中村保、吉本健夫の二人が職場の多忙にもかかわらず、学力向上と学習意欲を高める目的で中学生を公民館に集めて、週二回午後八時から九時まで英語と数学の学習会を開き、父母や区民から喜ばれた。

(2)育成会館建設とその利用

一九七五（昭和五十）年、川田区（区長比嘉博昭）は青少年の健全育成は教育環境の整備からと、区民あげてその

整備に取り組んだ。青少年の健全育成の一環として、公民館内で児童生徒が柔道の練習に励んできた。しかしながら、公民館は区民の各種の集会行事の場でもあり、柔道の練習に支障をきたしているとして、ＰＴＡや婦人会の強い要望をはじめ、区民総意で児童生徒専用の少年会館を新築することを決定した。建坪二九〇平方メートルに柔道場、幼児園、更衣室、湯沸かし場、また、全体が学習会が開催できるように工夫して設計され、一九七六年二月に完成し、その役割は柔道をふくむ総合的な青少年健全育成を図る場として、館の名称を「川田育成会館」とした。青少年問題が社会問題としてクローズアップされていた折り、区独自で児童生徒専用の会館に取り組んでいることに対し村内外の関係者から大きな関心が寄せられた。

「やまびこ道場」も育成会館に移り、区民の各種行事と競合しないで練習に取り組むことができ、以前より一層充実した活動ができた。そこでの指導者は、神山敏雄巡査、中村保、与那嶺末一、金城成男らが主であった。また区営の幼児園も育成会館に移った。

学習活動としての育成会館の利用は多方面に渡り、児童生徒の健全育成のみならず、全区民の総合的な学習が図られた。その例を挙げると、川田区出身の元琉球大学学長で偉大な理学博士池原貞男による父母及び児童生徒対象の講演、氏の教え子の琉球大学の学生による児童生徒への学習指導、比嘉宗幸教諭の中学三年生対象の高校入試対策の補習等、また、子どもたちの学習環境やスポーツ活動の環境の変化で、柔道の練習が継続困難になった後、名護市所在の「育英塾」を誘致して村内児童生徒希望者を対象に学習活動を展開した。その外、玉城国昭が村内の児童生徒に英語の講座を開いた。また、社会教育面では名護から講師を招聘して、三線教室や玉城国昭を講師に社交ダンス教室を成人対象に開設した。以上述べてきたように、「川田育成会館」は総合的な学習を展開する館として利用されてきた。それら全て運営の世話人は、スポーツを通しての人材育成をモットーにしている「やまびこ道場」父母の会（会長吉本勲）が当たった。

4、ＰＴＡ活動

終戦後、学校が設置されるとほぼ同時にＰＴＡが組織された。結成当初は戦災によって皆無の状態となった校舎や教育設備の復興が急務とされ、ＰＴＡ会員、父母は総力を挙げて校舎建築の資材を集めたり、学校施設整備に当たった。とりわけ、初代会長平良平助、二代会長宮里那三郎、三代会長吉本好助、四代会長金城政信等の頃は校地校舎が劣悪で、物質的教育環境の整備に尽力した。したがって、当初のＰＴＡは正に学校後援会の役割を果たしていた。そのため、ＰＴＡの目的を達成する事業は極めて少なかった。しかしながら、財政的に豊かになった今日ではＰＴＡ活動は本来の目的をめざした事業が展開できるようになっ

た。特に、子ども達の福祉向上や青少年健全育成に尽くした功績は絶大であった。

5、社会体育・レクリエーション活動

戦後の荒廃した民心をひき立てるためにはスポーツやレクリエーション活動の復興が要請された。取り分けレクリエーション活動は青年会や婦人会が中心であった。

6、教育隣組・子ども会活動

教育隣組は、青少年の健全育成と学力向上等の問題解決を目指した活動を実践し、地域父母住民に支えられた子育ての共同組織として各地域に定着した。地域ぐるみの活動内容として、団体登校の指導、夏休みの生活指導、夜間指導、家庭学習の奨励強化、教育懇談会、レクリエーションなどである。

教育隣組は一九七二年（昭和四十七年）の祖国復帰後は次第に地域子ども会組織に移行していった。

7、四Hクラブ

農業普及事業における青少年教育を目的とする組織として四Hクラブ活動があった。会員は、四H（頭、心、手、そして健康）の機能を科学的に鍛練（たんれん）することによって自らを磨き、互いに力を合わせて、よりよい社会の建設に役立つ人間形成を図ることを目的とした。四Hクラブの支柱（しちゅう）は農業及び生活に関するプロジェクト活動で「実践することによって学ぶ」学習法が特徴である。

終わりに社会教育の普及や指導について、終戦間もない時期の社会教育の指導は主に学校現場の教職員が担っていた。やがて教育関係の法律が整い全般的指導助言は社会教育主事を中心に進められた。昭和三十三年から昭和四十七年頃の、社会教育施設設備のない上、交通不便の中で地域の社会生活の豊かさや郷土の繁栄のために社会教育の充実を推進した社会教育主事は金城昂、比嘉宗幸、平良晨勇等であった。

いちご会活動スナップ

第二節　文化

一、川田の主な年中行事一覧

一　月　①　元旦初詣
　　②　元旦　新春走れ歩けＧＧ大会
　　③　三日　生年合同祝賀会
　　④　旧暦元旦タマガハラ祭
三　月　①　春分の日、彼岸
四　月　①　清明入りの第一日曜日
　　②　旧暦四月中旬の土曜日アブシバレー（畦払い・悪虫払い）
　　③　学事奨励会
五　月　①　旧暦五月十五日ウマチー
六　月　①　旧暦六月三日アキウマチー
　　②　旧暦六月二十六日、ハーリー（海神祭）
七　月　①　旧暦七月七日（旧七夕・タナバタ）
　　②　旧暦七月十三日（旧盆ウンケー）
　　③　旧暦七月十五日（旧盆ウークイ）
八　月　①　旧暦八月八日トーハキ（トーカチ、米寿祝い）
　　②　旧暦八月九日綱引き
　　③　旧暦八月十日豊年祭（ヂイシキ・シヨウニチ）
九　月　①　旧暦九月七日ハジマヤー（九十七歳の生年祝い）
　　②　旧暦九月九日チクサギ
　　③　秋分の日、彼岸
十一月　①　第二土曜日区民運動会
十二月

二、沖縄の主な年中行事（旧暦）

【毎月】

・チータチ・ジューグニチ（一日、十五日）

日々の感謝と家族の健康を願う。火の神と神棚、仏壇には生花に取り替え、塩、水、ウブクを三つ供え、仏壇は酒、水、お茶、ウブク三つを供える。線香はおのおの十二本と三本供える。

【一月】

・旧正月（一日）

火の神、仏壇へ日々の感謝をあげて家族の健康を願う。火の神に線香十二本と三本、塩、水、花、ウブク三つ、豚のチム、赤・黄・白紙、木炭をコンブで巻いたもの、ミカン。仏壇は水、酒、お茶を供える。

・トゥシビ（二日～十三日）

生年祝い。十三才、二十五才、三十七才、四十九才、六十一才、七十三才、八十五才の人が生まれ年の干支の

日に祝う。九十七才はカジマヤーといい、九月七日に祝う。火の神に線香十二本と三本、仏壇に線香十二本と三本。十二支の順に家族一人一人の健康を祈願する。

・ジュールクニチー（十六日）

後生（ごしょう）の正月といわれている。先祖供養。本島ではミーサのある家だけが墓参する。火の神に線香十二本と三本、仏壇に線香十二本と三本。

【二月】

・春分の日、彼岸

先祖供養。仏壇を掃除し、仏壇で重箱、もち等を供えて線香は十二本と三本、ウチカビ十五枚を二組、酒、お茶、水。火の神には線香十二本と三本をあげて家庭の繁栄や家族の健康を祈願する。

・屋敷のお願

屋敷の四隅、トイレ、門等を拝み、家内安全を祈願する。米一合、もち九個、洗いミハナ一合、酒。線香は十二本と三本ずつとし、火の神は十二本と三本をあげる。また、ウチカビは二十一枚ずつあげて、別にした線香十七本はもやさない（下げる）。十七本は結びのこと。

【三月】

・ひな祭り、浜下り（三日）

火の神に重箱とヨモギモチを供え、十二本と三本の線香をたてて、娘の健康と家族の健康、そして家の繁栄を祈願する。

・清明祭

その日は重箱料理、モチ、酒、水、お茶を先祖の墓前へ供え、家族の健康と繁栄を祈願する。仏壇に線香十二本と三本、お茶を供え墓へ案内する。

【五月】

・ウマチー（十五日）

稲穂祭、稲大祭。先祖の神拝み。仏壇に線香十二本と三本、火の神は十二本と三本。旧五月十五日か六月十五日のいずれの日程で拝に行く。

【七月】

・タナバタ（七日）

先祖供養。お墓の清掃をし、御迎えの拝みをする。墓での線香十二本と三本。仏壇に線香十二本と三本と夕飯。

・ウンケー（十三日）

先祖供養。仏壇をきれいに掃除し、果物等を供え、線香を十二本と三本。お茶、水、酒、夕飯を供え、お迎え団子七個を二つ。いろいろお飾りして子や孫たちが揃ってお盆をしておりますので、年ごとに健康にして下さい、立身させて下さい、と願う。

・ナカヌヒー（十四日）

朝、昼、晩と食事を供える。お茶、水、酒、線香十二本と三本。

・ウークイ（十五日）

家族や一族が集まって、重箱、モチを供える。線香十

二本と三本、酒、水、お茶を供え、日頃の感謝をし健康を祈る。そして仏壇の前でウチカビ十五枚を二組焼き、供えた線香は途中でウサンデーして、その線香を門前にもって行き、また来年も来て下さいと言って御先祖をお送りする。

【八月】

・秋分の日、彼岸

二月の彼岸と同じ方法で行う。

・トウカチ（八日）

八十八才の生年祝い。米寿の祝い。

・ヨーカビー（八日）

爆竹などを鳴らし魔物を払う神事。

・十五夜（十五日）

家族の健康と繁栄を願ってフチャギムチを床の神と、火の神、仏壇に供える。夕飯、お茶、水、酒、線香は十二本と三本。火の神も同じ。

・屋敷のお願（十日まで）

夕飯を供え、屋敷の角々にサンをたてる。あとは二月と同じ。（シバサシ、ウイミ）

【九月】

・カジマヤー（七日）

九十七才の生年祝い。

【十一月】

・トゥンジー、ジュウシー

冬至の日に、ジュウシーをお供えし、家族の健康を祈願する。床の神、火の神、仏壇とし、線香は十二本と三本、酒、水、お茶を供える。

【十二月】

・ムーチー（八日）

鬼餅。餅を神仏に供え、家族の健康を祝う。床の神、火の神、仏壇に酒、水、お茶、線香は十二本と三本を供える。

・ウガンブトチ（二十四日）

火の神が昇天する日とされているので、幸いな事は感謝し、不幸な出来事や災いに関しては解消するよう願う。普段やってはいけないが、この日は香炉を取り替えたり動かしてもよい。火の神のまわりの煤払いをし、香炉の灰をきれいにする。お膳にウチヤヌクと米二合とコップに酒とお茶、水を入れ、十二本と三本の線香をし、来年の願いと一年間の感謝をする。

・屋敷のお願

二月のお願と同じ

（具志堅興念氏提供）

【タマガハラ祭】

根謝銘屋の拝所

勝乃宮へのお供え

根神屋での供物配列

マガタマ（左の小珠。右の大珠は模造品）

区（門中）からの供物

根謝銘屋からの供物

【1975年～1979年　豊年祭】

組踊「矢蔵の比屋」

加那よー天川

下り口説

踊り子

ミチズネー

地　謡（ジウタイ）

棒　術

【2003年　豊年祭】

四つ竹

貫　花

七福神

七福神

鶴　亀

下り口説

【2003年　豊年祭（矢蔵の比屋）】

【行　事】

ウガンバーリー

神送り（ハーリー）

豚の解体

ニビキ（結婚式）

シーミー

学校風景

東小学校創立祝賀会

【遊　び】

三、行事内容の概要

行事の内容は伝統的なもの、或いは時代の推移によって生活様式が変わりそれに対応するもので、新しく取り入れられたものなどが混在している。いずれにしても、区民の団結心や協力心それに連帯感を培うなど、心を一つにする営みが行事である。また、故きを温ねて、新しきを知ることで、自らのルーツや先達の築いた文化遺産を理解するとともに、未来への展望につなげていく意義は非常に大きいものがある。行事の実施に当たっては、婦人会をはじめ、各種団体が積極的に役割を果たしている。

1、初詣

元旦の早朝「勝乃宮」の参拝を行いその入り口近くにあるウフアナガ（大井戸）から「若水」を汲み、家族の健康と若返りを願い、それで額に三度ずつなでたり、茶を入れ仏壇にそなえた後、手足や顔を洗うことから新しい年を迎える。

2、新春走れ歩けＧＧ大会

一月一日、新しい年の区主催最初の行事で、健康増進の趣旨で幼児から高齢者の全区民参加対象で、自らの体力に応じた目標を設定して、歩いてよし、走ってよしのマイペースのレースで行われた。しかし、現在ではグランドゴ

第47回合同祝賀会（1999年）

13歳祝（1995年）

第49回合同祝賀会（2001年）

第46回合同祝賀会（1998年）

ルフなど区民のニーズに応えて内容を決めている。

3、生年合同祝賀会

十二支の生まれ年に無病息災などを祈願して祝う「生年祝い」を区主催で合同で祝福する行事である。終戦の翌年、昭和二十一年に「ヌチヌユーエー」（命の祝い）として開催されてから、平成十六年で第五十二回を迎えた。この合同祝賀会も平成三年から平成九年の七年間は合同祝いに対する区民のアンケートの結果や諸事情で一時中断していたが、復活の切望の声が高まり平成十年から再び開催することとなった。当初の頃は生活や行事の簡素化などを考慮していたが、最近では従来の趣旨の他、「生まれ年」の該当者を全区民で祝福するようになってきた。酒肴（しゅこう）も参加会費と公費で賄（まかな）っている。また、舞台演技や余興もプロに依頼するなど区民の負担過重にならないよう配慮している。

4、タマガハラ祭

旧暦元旦に開催される川田区独特の神事（カミゴト）で東村の他の部落では見られない。川田区と根謝銘屋の共催で開催されている。昔は全区民が集まって川田村をつくった祖先を供養するとともに、根謝銘屋をはじめ、川田区の繁栄を祈願する祝宴を開いたようであるが、現今では門中代表や部落役員の参加で開催されている。

川田村の祖先が今帰仁城主の次男恩徳金の血筋を継ぐ子

タマガハラ祭　カリー

タマガハラ祭　根謝銘屋の拝所での祈願

タマガハラ祭　祝宴

タマガハラ祭　根神屋での祈願

孫の証として「刀・鏡・マガタマ」を御神体として川田部落の本家本元の根謝銘屋が管理保管していたが、今次大戦で刀と鏡が行方不明になってマガタマのみが現存している。これらの物品は根謝銘屋の祖先が今帰仁城主の血族であることが知られたときには討伐されることを恐れて、公開、公言は厳禁され極一部の関係者以外見ることができなかった。しかし、今日では現存している「マガタマ」は旧暦元旦に限って公開している。現在でも川田区民は、部落の始祖は今帰仁城主の次男の末裔であると固く信じている。

拝所に供える酒肴の重箱の内容は山の幸・海の幸の七品目（三枚肉、テンプラ、豆腐、ゴボウ、魚、カマボコ、昆布など）、また、上記の他に十五個の餅重箱、吸い物二膳、和え物、果物一盛、それに米、塩、酒を供える。なお、参加者一門への配膳の準備数は四十膳位（四十人分）が普通である。

5、彼　岸

春分の日、秋分の日の年二回彼岸の行事を行う。仏壇を掃除し重箱や餅を供え、主として祖先供養とともに、家族の健康・安全、家庭の安泰を祈願する。

6、シーミー（清明祭）

先祖供養と加護を祈願する祭りで、重箱、餅、果物や酒を墓前に供え祖先を供養するとともに、家族親族の無病息災

シーミー　門中代表

シーミー　ウンダチ「思徳金の墓」

シーミー　全員での拝礼

や繁栄を祈願する。なお、最近では清明祭を通して親戚一族の交流を楽しむ場として催されている。川田の清明祭は部落民のみならず、根謝銘屋始祖の血筋を継いでいるとされる関係者の代表が那覇、名護、国頭等の村外からの参加の下、川田の本家根謝銘屋を中核に開催される正に神御清明祭である。午前の拝所巡りの後、午後二時頃から全員参加の儀式および酒宴が川田区と根謝銘屋の共催で開催される。この全体会の終了後各門中が墓前で清明を行う。参拝者に振る舞われる酒肴は先祖の四基の共同墓に供えた各門中が供出した重箱を利用したものが主である。

拝所巡りは川田先祖が祭られている由緒あるウンダチの墓、一部の門中はウパイメーシードクルも巡拝する。また、隔年置きには大宜味村の川田根謝銘屋と兄弟関係のある田港根謝銘屋（松本）、聖地・古墳、祝女墓等を巡拝する。順路は先ず、田港の根謝銘屋（東松本）、次に根謝銘屋の元屋敷及びその拝所、その後に田港お獄と称される田港区の背後にある山頂の中北山恩徳金一族の墓を拝む。その墓までの道程は住宅地から約四百メートルの山頂にあり、途中は石ころが多いうえ、狭く曲がりくねった険しい道である。おわりに田港祝女の墓を拝む。

五カ年毎の今帰仁上りでは、先祖ゆかりの城跡、御獄、井泉等（今帰仁～本部～名護方面のおよそ二十一カ所）、また、十カ年毎の東御廻り（山田城、浦添ようどれ、斎場御獄、受水走水、弁ガ獄などの中南部方面のおよそ十六カ所）で先祖の霊力に感謝するとともに、息災、繁栄、豊穣などを祈願する。これらの御廻りは以前は祝女の案内が主であったが、最近では区代表、根謝銘屋代表と各門中代表が参加して行われている。（今帰仁上り、東御廻りについて詳しくは別項で述べる）

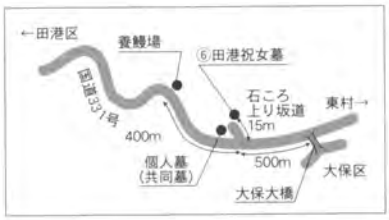
田港、今帰仁、中南部廻りの際にも当然、料理重箱、餅重箱、果物、酒、お茶、米、塩、お花、仮銭（紙銭）、線香の他お賽銭なども準備して行く。一つの重箱（料理重箱）には揚豆腐、ゴボウ、魚テンプラ、昆布、赤カマボコ、豚肉、カステラ、コンニャク、大根など奇数で詰める。別の重箱（餅重箱）には餅を十五個詰めて供える。

シーミー

①田港根謝銘屋（東松本）

田港拝所順路

①田港根謝銘屋
（東松本）
②根神屋
③根謝銘屋元屋敷
④お透し所
（山頂に行けないとき）
⑤思徳金一族の墓
⑥田港祝女墓



②根神屋

③根謝銘屋元家敷

④お透し所

⑤思徳金一族の墓

⑥田港祝女墓

7、アブシバレー（畦払い・悪虫払い）

畦（あぜ）の草を刈り取り、田畑の害虫や作物のいろいろな災いを海に流し、遠くへ追い払う行事である。一昔前までは害虫（イナゴ、バッタやネズミ）を麦わらやクワズイモの柄で小舟をつくりそれに乗せて海に流した。この害虫はウフアガリの島に行くよう祈願されたと言われている。また、子供たちは浜にマーニ（くろつぐ）で、遊び小屋を作りその内で終日友人同志懇親を深め楽しく過ごした。また、一旦浜に下りると各家庭には戻っていけないとされた。なお、理由は明確ではないが区民の一人が午後から人々が浜から上がる夕刻まで高平良のガマ（洞窟）にこもることがあった。近年は自弁当で各班毎に集まり午後五時頃から九時頃まで酒を酌み交わし、懇談や余興で懇親を深めている状況である。また、親族一門に子どもが誕生したとき、「初浜下り」にはアミチブガーを拝むとともに、当班に酒肴（しゅこう）を提供して仲間入りを紹介し、このめでたい新会員を皆で祝福している。なお、区長は各班を順次廻りあいさつをする。この機会に農業関係の情報を農協からの資料として提供もされている。また、「ムンタゲー」と言ってその翌日は仕事を休む慣習がある。

アブシバレー

アブシバレー

8、学事奨励会

昔からの諺の一つで「一年の計は穀物をつくること、十年の計は木を植えること、百年の計は教育にある」とよく言われてきた。人類社会の基盤が教育であることを端的に表現している。現代社会においても、国づくりは人づくりからと教育の重要性は変わらない。

私たち川田区でも大戦以前から向学心に燃える若人を村をあげて育英してきた実績がある。その機会に恵まれた人々が戦後の復興に尽力した。今日では畦払い行事に先駆けて、人材育成を図る目的で幼児児童生徒に軽スポーツ等をさせた後、ＰＴＡ会員、部落役員並びに総務委員の運営で学事奨励会を行っている。学事奨励会の趣旨について区長が話し、次に東校の学事報告が担当教師から報告される。また、来賓激励のあいさつなども行われ、最後に区長から幼児児童生徒及び学生に奨励金品が各自に贈られる。

この学事奨励会は毎年畦払い行事と組み合わせて実施されている。

9、ウマチー

旧暦五月十五日に神人が御嶽や拝所の神に果物、酒、米等を供え、線香を焚いて豊作を祈願し感謝する行事である。

10、アキウマチー

旧暦六月二日に、五月ウマチーとほぼ同様なことで、稲の収穫祭で御嶽や拝所に重箱などを供え神に豊作を感謝し、部落や門中の繁栄を祈願する行事である。

11、ハーリー（海神祭）

他村ではウンガミ（ウンジャミ）とも言っている。ウンガミ（ウンジャミ）は海神のこととされていることから、海のかなたにあると信じられている世界「ウファガリジマ」と称する神郷より神を招き、稲を主とする農作物の豊作を感謝し毎年の豊穣を請い願う、収穫の感謝と豊年、並びに航海安全と豊漁の祈願の行事である。

なお、一連の行事は二十三日はカミウンケー（神お迎え）から始められる。その日は神の航海安全と航路の妨害を避けるため漁師達は漁に出てはいけないとされている。翌二十四日はサンニチウタカビ（三日お崇べ）と言い、神事の開始を来訪神に告げる日とされている。二十五日は前夜祭で二十六日が本祭である。

川田、平良、宮城の祝女や神人が平良の神アサギで海上遥かかなたの神郷「ウファガリジマ」の神を迎える拝みをする。その後祝女や神人は川田の根謝銘屋へ移る。一昔前までは平良から川田までの移動の際は船に祝女や神人を乗せ川田、平良、宮城でウガンバーリーの競漕が行われて

【2002年旧6月26日行事　海神祭】

神人による神送り

神人による根謝銘屋での祈願

カーサジューシーづくり

優勝チーム

ウガンハーリー

いたが、近年になっては天候の都合もあって乗用車での移動が多くなってきた。このウガンバーリーがハーリーの始まりである。根謝銘屋では祭場（由緒ある箇所）に重箱など供え豊作、豊漁、豊猟に感謝するとともに、祝女や神人が長時間おもろ（神歌）を唱和し、次年以降のユガフ（豊かな幸）を祈願する。

字の神あさぎの広場に移り、祝女や神人、区民とウファガリジマから迎えた神々とのカミアシビ（神遊び）が行われ、その交流をすませた後神々を再び神郷「ウファガリジマ」へ海辺で送る神送りの儀式が行われる。今日ではハーリーの競漕競技が前面に強調され海神祭はハーリー競漕する行事のように受け止められがちである。しかし、ハーリーはあくまでも海神祭の余興にすぎない。

ハーリー競漕も以前とは異なり川田区の各種団体や関係職場の出場が主である。ハーリー競漕後は幼児児童生徒及び一般成人の相撲大会を夕刻遅くまで盛大に行われる。ハーリー行事の楽しみの一つに、伝統の味のあるカーサジュウシーが全区民及び来賓に振る舞われることである。川田婦人会のつくる古典的な独特な味付けで、風味のよいカーサの香りのこのカーサジュウシーが海神祭を一層引き立てている。

なお、二十三日には、ソーメン二皿、米、塩、酒を、ハーリー当日は神酒の他はタマガハラ祭と同じで山の幸、海の幸の七品目を拝所に供える。

12、タナバタ（七夕）

祖先供養の行事で、墓の掃除をし、お茶、花を供え線香を焚いて先祖の案内を呼びかける。本土に見られる牽牛（けんぎゅう）、織り姫（おり）伝説にちなんだ星祭りの風習はない。しかし、沖縄でも保育園や幼稚園では新暦七月七日には願い事を書いた短冊や折り紙の月星を笹竹に飾っている。

13、旧盆ウンケー

祖先供養の行事で、旧暦七月十三日に祖先の精霊をお迎えする。位牌（いはい）を清め、香炉（こうろ）をきれいにして、仏壇に花を生け提灯などで飾る。仏壇にウンケージューシーを供えて精霊を迎える。川田では旧七月十五日区代表、門中代表、それに青年会代表が上墓から精霊を迎え、その帰り、歌を歌い三人の青年が太鼓を打ち鳴らしながらニジャンヤーの前を通り、クニブヤーを訪れ、最後に現校門近くで青年団のエイサーを一曲披露して霊魂迎えの行事を行う。

〈歌〉七月ニンブチャー

1　マルナニミグラバ　酒タポーレー
　一合グヮー、ウタビミセーラー
　二合グヮー、ウタビミセーラー
　カミテイミグヤビラ
　カフエン　サフエン　サーサフエン

ピーラルラー　ラーラルラー

2　七月ニンブチャー　サキタボーレー
ヤーヌニーミダラバ、ユーンタボーレー
ピーラルラー　ラーラルラーラー
ニンゴロヤ　ニンゴロヤ　一升二合

3　クマヌハンシーメーヤー　ウジムヌユタサヤ
カナガナト　クマウテイ
ヌムンリシーパ　アチサヌヌマラン
サフエン　サフエン　サーサフエン
ピーラルラー　ラーラルラーラー

14、旧盆ウークイ

精霊送りの行事で、旧暦七月十五日の夜更けに行われる。仏壇に焼香した後、紙銭が焼かれ供え物の一部や焼香の燃え残りなどを容器に入れ戸外に出し、線香を焚いて祖霊を送り出し盆行事を終える。

青年会ではウークイの午前中に「プン」（仏壇のある家庭から供え物の一部）を徴収し、区長、青年会代表が無縁仏を祭っている墓にそれを供え、仏を供養する。ウークイの夕刻には青年会を中心に躍動的なエイサー（盆踊り）が演じられる。このエイサーは、先祖に見せる踊りであるからエイサーが済んでからウークイするのが本来の慣習であったが、現今ではエイサー踊りと関係なく祖霊送りをしている。

なお、十三日のウンケーからウークイの十五日までの期間に各人は親戚を訪ね、仏壇に供え物をして線香をあげる。沖縄の習慣として祖先崇拝が根強いことからどこの地域でもこの盆行事を重く受け止めている。

15、トーハキ（トーカチ、米寿祝い）

旧暦八月八日に米寿祝いをする。それがトーハキである。数え年八十八歳の長寿者祝をいう。トーハキという言葉は、祝いに来た客に「斗かき」のかたちをした竹筒を土産に配ったことから出たと言われている。斗かきとは升に盛った米を平らにするための丸い棒で升かきとも言われている。また、「米の祝い」とも呼ぶが、それは八十八を米の字に結び付けたものである。

16、綱引き

旧暦八月九日に神人の拝みの後綱引きを行っている。以前ほど盛大ではないが伝統的に継続して実施してきた行事の一つである。五穀豊穣に感謝するとともに、豊年を祈願し、勝敗は神意の現れとされその結果で吉凶を占ってきた。綱引きは遥かな神郷から豊かな幸を引き寄せる行事として続いている。近年綱を実際引いているのは、児童生徒たちである。

17、豊年祭（ショウニチ、ヂイシキ）

五穀豊穣に感謝するとともに、豊年を祈願する神事を行う旧暦八月行事は八日のシクミに始まり十日にショウニチを迎え、十五日の別リ遊びで終了する。三年に一度は「八月踊り」の盛大な豊年祭を開催している。演目の一例として国頭サバクイ、川田小唄、獅子舞、棒術、若衆踊り、二才踊り、七福神、組踊りなどである。特に、「矢蔵の比屋」、「伊佐浜の恨み」は忠孝思想が観客に感動を与え、ストーリーが圧巻であり川田区自慢の組踊りである。当たり年でない二年間はヂイシキとしてショウニチに代えて簡素に豊年祭を行う。当たり年と同様に、神人と区の役員などが参加して氏神である御嶽に字の繁栄と作物の豊穣を祈願する。また、全区民が公民館に集い豊年を祈願するとともに懇親を深める行事でもある。舞台ではカリーとして「かぎやで風節」その外、数演目が演じられる。

【プログラムの例】
平成十五年度　豊年祭プログラム

演目	出演者
1 かぎやで風	金城ひとみ、奥本美紀
2 上り口説	比嘉昌太、吉本祐
3 前の浜	神谷牧夫
4 貫浜	奥本美紀、金城ひとみ、宮平愛梨、金城夏希
5 鳩間節	呉屋宮子
6 浜千鳥	吉本幸江、城間達子、奥本由紀
7 四ツ竹	呉屋宮子、玉村悦子、金城正枝、神谷弘子、吉本敬子、中村文子、池原ユキ（いちご会メンバー）
☆区長あいさつ	池原善尚
8 七福神	毘沙門天（玉村浩）、蛭子（比嘉一之）、大黒（儀間俊次）、弁財天（宮平みゆき）、布袋（大宜見盛志）、寿老人（金城英人）、福禄寿（新城浩也）、呼び出し（比嘉秀和、中村桂）
9 下り口説	平良洋一、池原善史
10 鶴亀	金城幸人、吉本要
11 かせかけ	呉屋宮子
12 獅子舞	金城辰也、吉本博己
13 矢蔵の比屋	矢蔵の比屋（吉本健夫）、呉屋の大役（宮平勇二）、嘉手苅の子（新城浩也）、トゥムジリ（池原善史）、乙樽（中村かおり）、虎千代（仲本政勝）、平良（比嘉一之）、祖母（吉本朝美）、上地モーヤー（中村桂）、越来どん（津嘉山隆）、御主前（神谷牧夫）、森川の子（仲本政二）、内間の子（中村桂）、門番（金城泰彦）、山戸（吉本要）
14 高平良万歳	比嘉秀和
★地謡	（三線）中村正一、新城哲夫、平良昇康 （太鼓）金城幸昭
★演技指導	奥本養幸、比嘉博昭、金城幸昭、比嘉愛子、呉屋宮子

上り口説

伊佐浜の恨み

かぎやで風

伊佐浜の恨み

浜千鳥

前の浜

高平良万歳

鳩間節

18、十五夜祭（別リ遊び）

旧暦八月十五夜、月を祭るとともに、五穀豊穣と一家の円満を祈る。シクミから綱引き、ショウニチ（ジイシキ）、十五夜祭りまで連動した八月行事である。小豆（あずき）をくっつけたフチャギ餅を仏壇、火の神、月前に供える。その後、各家庭では月見をしながらこのフチャギを食べる。

19、ハジマヤー（カジマヤー）

ハジマヤー（カジマヤー）　比嘉カナ（2002年）

旧暦九月七日数え九十七歳の生年祝いを川田ではハジマヤーと言っている。この歳になると人は童心にかえるとされ、本人にハジマヤー（風車）を持たせ、七橋七ハジマヤーを越してパレードを行うなど盛大に祝う。ハジマヤーの祝いは非常にまれであることから、全区民がその人の長寿を祝福するとともにあやかりの盃（さかずき）を受けている。

近年になってハジマヤーを迎えたのは、一九八四年に比嘉ウシ（メーフクジヤグヮ）、一九八六年に高江洲ウト（ミナトガワオバー）、一九八七年に平良ツル（ミーヤグヮ）、中村ウサ（ギキチャー）、一九九〇年に中村マカ（アガイピガヤー）、二〇〇〇年に中村ハナ（ナカヒジャヤー）、また、二〇〇二年に比嘉カナ（イリウフヤグヮ）がハジマヤーを迎えた。

20、チクサギ

旧暦九月九日この日は菊の葉を酒盃に入れて仏壇や火の神に供え家族の幸を祈願した後に飲む。菊には邪気（じゃき）を払う力があるとされ、菊酒を飲むと無病息災がかなえられると信じている。この菊酒をチクサギと言っている。また、旅に出た人々の健康安全を祈願することでもある。供え物として、酒（菊酒）の他、米、果物などである。

21、秋分の日

秋の彼岸である。春分の彼岸とほぼ同様の趣旨で行われる。

綱引き

開会式（東、西、郷友会、生徒会の各チーム）

つり大会

22、区民運動会

十一月第二土曜日か日曜日の頃、区民の健康増進と親睦を図る目的で開催されている。種目は区民誰がも気軽に参加できるグランドゴルフやゴールーマーセー、つり大会等の軽スポーツが主で、村陸上競技大会に向けての選手選抜の競技などは取り入れていない。以前は村陸上競技大会の予選を兼ねていたので、出場選手を決めるのに難渋（なんじゅう）とともに、郷友会も一チームとして呼びかけた大掛かりな取組であったので区にとっては負担が非常に大きかった。

区民もチャンピオンスポーツよりも、老若男女誰もが気軽に出来るレクスポーツの実施の要望が強くなってきた。

なお、参加者へ与える景品は従来以上に準備されている。

パン食い競走

ゴールマーセー

四、主な冠婚葬祭

1、冠の部

(1)ハチアッキー（初歩き）

初歩きのことを「ハチアッキー」と言って母親が初めて赤ちゃんを連れて実家や親戚の家に連れて行く初めての外出の儀礼である。塩（マース）が赤ちゃんを悪霊から守るとされ、里方では、古くは塩を包んで子どもの懐に入れる習慣があったが、現在では塩の代わりにお金（御祝儀）を包みそれを塩代（マースデー）と言って渡している。実家では魚料理を用意し、子どもの成長を祈願して親子をもてなす。

(2)タンカーユーエー（初誕生祝い）

赤ちゃんの満一歳の誕生日をタンカーユーエーと言い、この日は、火の神や仏壇、神棚に赤飯とごちそうを供え、親戚を招いて誕生日を祝うとともに、健康を祈願する。料理は赤飯、吸い物、上げ豆腐、テンプラ、豚肉、かまぼこなどである。

この日、子どもの将来を占う意味で、大きな四角盆に赤飯、算盤、書物、お金、鉛筆、物差し、農具などを並べて、選ばせる儀式がある。書物を取れば将来学者に、算盤を取れば商売人、赤飯を取れば食べるのに困らない人になれるなど、どれを選んでもよい意味に考えている。

(3)トゥシビーユーエー（生年祝い）

十二年ごとにめぐってくる自分の生まれた干支の年を祝う。これがトゥシビー或いはトゥシビーユーエーと言っている。数え年で十三歳、二十五歳、三十七歳、四十九歳、六十一歳、七十三歳、八十五歳、九十七歳に行われる祝いである。

十三歳のトゥシビーは、特に女子の成長を祝うもので盛大であった。つぎは二十五歳のトゥシビーであるが、二十五歳といえば結婚しているのが普通であった。したがって、十三祝い（ジューサンユーエー）が生家での最初で最後の生年祝いであり、男子にくらべて一段とにぎやかに執り行われたが、現今では男女とも祝いの差はあまりない。

六十一歳のトゥシビーは還暦と言われ、六十一歳は六十年目で干支が一回りするので、本卦還り（生まれた年の干支に返る）という。七十三歳のトゥシビーは古稀とも言われている。古稀とは中国の詩人杜甫（とほ）の詩の「人生七十古来稀なり」の句から出た語である。九十七歳のトゥシビーはカジマヤーと言われている。還暦からは長寿を祝う年とされてきたが、現在では本格的な祝いは古稀から行われている。

2、婚の部

(1)クファンムイ（サキムイ、結納）

結納は本人同士が結婚を約束したことを親戚、知人、友

人等に正式発表し、社会的に婚約を認めてもらう儀式である。結納を酒盛、一合ムイ、二合ムイと称するのは、男性側が持参した酒「泡盛」で盃を酌み交わすことからきていると言われている。以前は仲人を立てて執り行われるのが慣例であったが、最近では本人と両親で結納品を交わされることが多くなってきた。また、結納金も新郎の月給の二～三カ月分とされたが現在では金額にこだわらないようである。

結納品は七品か九品が一般的で、ここでは九品の例を挙げてみると、目録（結納品の内容）酒肴を意味する「長熨斗」、「結納金」、不時に備える「鰹節」、長期保存で生命力を象徴する「寿留女」（鯛）、子孫繁栄を願う「子生婦」（昆布）、ともに白髪の寄りそうまでの意で「友白髪」（そうめん）、繁栄を願う「末広」（お茶）、盃をかわす酒樽の「家内喜多留」などである。

結納祝いの菓子として片方が割れて開くので、縁起のよい揚菓子として「さとう天ぷら」、子孫繁栄を願って「白あんだーぎー」、二人の縁を結ぶ「松風」などである。料理としては、赤かまぼこ、カステラかまぼこ、揚げ豆腐、結び昆布、三枚肉、赤寒天、花麩、天ぷら、田芋などの奇数の品を準備する。場所も最近では家庭の他、設備の整ったホテルなどの式場で執り行われるようになってきた。

(2) ニビキ（ニービチ、結婚式）

ニビキを漢字で書くと「根引き」になる。その意味の一つは立派に育った娘を花嫁として花婿の家に連れてくること、二つには本家（宗家）より新たに系統を引いて一家を創立することらしい。昔はモーアシビーなどで若者が交際し愛を確かめ、親の許しを得て結婚した。現在では日常的にあらゆる機会を交流の場として生かされている。今日でも見合い結婚も盛んに行われている。

一般的には仏前での結婚式、神前での結婚式、教会での結婚式などがある。一昔までは仏前での結婚式が普通に行われていたが、近年は神前や教会で執り行われることが多くなってきた。また、勤務先の上司などに媒酌人を頼んで結婚式や披露宴をおこなうことが慣例であったが、今日では、媒酌人を立てない事もしばしばである。

川田のニービチ歌

親の義理守て吾んや夫持ちゆさ
愛し若者やとりて立ちゆさ
夫持っち行かば焦りゆな里前
夫振りやい来りば2人どなゆる
玉黄金産し子姑の家にやらち
姑の家のあんま思てたぼり
銀嫁でもの黄金嫁でもの
親うかん勝て思るさびる

「沖縄県史二十二民俗より」

3、葬の部

(1) 葬　制

昔の人々には死は前もって知ることが出来たと言われている。死の前兆のことをムヌシラシ（物知らせ）と称し、鳥などの動物による知らせがあった。本字でもユウガラサーがイリ（西）からアガリ（東）へ群れて鳴いて行くと死人が出ると言われた。

葬制も洗骨葬を伴う複葬で風葬という葬法を採用していたが、最近では火葬が主である。

(2) 野辺送り

野辺送りのことをダビ（荼毘）とかウクイ（送り）と言っている。野辺送りの時間は、夕方の干潮時が理想的だが、その日の都合で潮時がわるいときはその限りではない。野辺送りでは拝所の近くの道をさけ、いわゆる神道を通らずに別の道を通った。野辺送りの途中、シマミシー（島見せ）あるいはシマワカレ（島別れ）という死者と集落の離別の儀式を行う地域もあったが、本字川田では行われなかった。

遺体を運ぶ龕（がん）は四人でかつぎ、交替要員が四～六人ついている。交替するときはかついだまま行う。これは龕を地上に下ろすと、霊魂が落ちてしまうといわれた。墓に着くと龕を墓庭に下ろす。墓口を開けるのは干支で相性の合った人でなければならないとされた。しかし、これらの人が実際に開けるのではなく、墓口の前の雑草を三回むしり取るか、あるいは墓口を三回たたき居合わせた人々が加勢して開ける。棺（ひつぎ）を墓に納める人も相性の合った人々が当たり、墓内には二人が入りシルヒラシと称する所に棺を安置して、墓から出るときは、後ずさりして出た。なお、火葬が普及した今日、野辺送りの様子も変わってきた。

(3) ナーチャミー

葬式の翌日、朝早く墓参りをする。これがナーチャミー（翌日見舞い）と言っている。家族や親戚などごく身内の人々が参加し「ゴクラクシミソーリヨー（極楽往生して下さい）」と唱える。

一般にナーチャミーは、死者が蘇生（そせい）してないかどうかを確かめるために行われたと言う。火葬のない時代は、死者が生き返ると言うこともあったようで、それが伝説となって今日まで慣習として定着している。

(4) ナンカ祭（七日祭）

死後七日ごとの焼香儀礼がナンカ祭（七日祭）である。四十九日までに七回のナンカが行われ、それぞれ次のように呼ばれている。一回目ハチナンカ、二回目タナンカ、三回目ミナンカ、四回目ユナンカ、五回目イチナンカ、六回目ムナンカ、七回目シンジュウクニチである。特に、ハチナンカとシンジュウクニチは大事な儀礼で参加者も多い。ナンカ祭には家族や親戚の者が墓参を行うのが通例である。

ナンカ祭は死者が七回の裁判を受けて極楽往生（ごくらくおうじょう）ができ、来世へ出発するといわれている。シンジュウクニチでナン

カ祭は終わりで、墓前に備えてあった白位牌や装飾物などを焼却する。また、仏壇の前の祭壇も片付け、白位牌をさげ、仏壇の本位牌に祭る。白位牌は魂抜きをしてから焼却し、灰の一部は本位牌の香炉（ウコール）に加える。

(5) スコー（法事）、年忌供養

死後何年目にあたるかを示す年数で、死者供養のための法事が行われる。一般に百日目、一年忌、三年忌、七年忌、十三年忌、二十五年忌、三十三年忌が行われる。十三年忌まではワカスコー（若焼香）と呼ばれ、まだ死霊が神化しておらず忌みつつしむべき焼香であるが、二十五年忌、三十三年忌はウフスコー（大焼香）と呼ばれ、祝事にかわる。特に、三十三年忌はウワイスコー（終わり焼香）と呼ばれ、この最後の供養が済むと祖霊は神になると信じられている。

墓も人の年忌供養と同様に、新築改築の後は一年、三年、七年、十三年、二十五年、三十三年の年忌祭を営み、子孫の繁栄を祈願する。

(6) 洗骨儀礼

死後一～七年の間に洗骨儀礼が行われる。洗骨する時刻は午前中に行うのが普通であった。洗骨することをシンクチとかチュラクナスン（美しくスル）、カルクナスン（軽くスル）などといった。一般的には三～七年目の七夕に洗骨するが、次の死者が出ると三年目でなくても洗骨する場合があった。そのとき死体が完全に白骨化してないこともあって、洗骨に長時間かかったと言われている。洗骨儀礼への参加者は親戚に限られ、まず頭蓋骨から先に洗い、すべて洗い終わった遺骨は厨子瓶に足の方から順次納め、頭蓋骨を上において墓の奥深く安置した。洗骨する場所は地域により異なるが川田では海浜で、海水を用いて洗い浄めた。

洗骨の目的は浄めであり、遺骨に汚染が付着したままでは、その霊も昇天することができないとの考えからである。人は死ぬと肉体は土に還るが、霊は何かに生まれ変わるか昇天するかであり、骨は相変わらずに残るものと考えた。その骨に汚染が残っていては霊も神になれない。神は完全なる浄まり（きよら）である。洗骨することをもって成仏（神格化）への供養の最終的なものとなるとされている。しかしながら、火葬が普及した今日では洗骨儀礼は見られなくなった。

【コラム】

エンマ王に追い返された「ふしぎな話」

サカマヤーの三男、比嘉貞幸（大正十年生まれ）は元気者の少年であった。ところが小学校一年生の夏、突然病魔に襲われた。しかも世に恐れられた流行性の日本脳炎であった。高熱にうなされ生死をさまよう日々が続いた。とうとう力つきて危篤状態になり親戚の者が集められたが、元気をとりもどし回復した。しばらくして二度目の危篤が襲ったがやはり元気になった。しかし、三度目はさすがに回復せず親族一同深い悲しみに沈んだ。若い少年の死を悼み部落中の者が悲しむさなか、棺（ひつぎ）が準備され、その中に少年は手足や首など無理やりに曲げられ収められた。いよいよ最後に棺の蓋（ふた）を閉めようとした時に、奇跡が起こった。体のかすかな動きに叔父の比嘉貞次郎が気づき、直ぐに脈を取ってみると、まだ生きていることが分かった。親戚一同は悲しみから一変して喜びの歓喜に右往左往した。その騒ぎで当人は悪夢からさめたという。

本人の話として、夢の中で金銀で着飾ったピカピカの馬に乗った怪力の勇ましい男が現れ、するどい目でじっとにらみつけていた。しばらくして「君はここへ来るのはまだ早い」と言い残して立ち去って行ったと言う。また、自分が一度入った棺は小学校六年生まで本箱として大事に活用したという。

ピカピカの馬に乗ってきた男が、あの世のエンマ王だと言われている。当人は、長期の闘病生活を経てすっかり回復してからも、左手や首筋に異常をきたし、学校の体育などは長い間、見学していたと言う。成長するに従いすっかり健康になり、部落代表の長距離選手までになった。

比嘉貞幸（84歳）、左は妻光子（2004年）

現在、彼は国頭村辺土名で元気に悠々自適の生活を送っている。川田では、あの世の入り口まで行って返された人だから、長寿は保証されていると言われている。これからますますの壮健を祈念したい。

（比嘉貞幸（本人）、金城文、池原直吉等からの聞き取り）

〈法事の供え物と線香〉

行事名	ぜひ必要な供え物	線香	ウチカビ	その他
ナーチャミー（翌日）	墓前◎花の水かえ ◎お茶・酒 仏だん　朝・昼・晩の食事を初七日まで毎日欠かさず供える事	墓前　十二本 火の神　右に同じ 仏だん　右に同じ	なし なし なし	
初七日	墓前◎お茶・酒・花 ◎くだもの・おかし 仏だん◎盛り菓子×2組 ◎くだもの×2組 ◎重箱　モチ15コ×1組 ごちそう×1組 ◎盛りごはん ◎精進七品のおつゆ 白トウフ・ニンジン・シイタケ・モヤシ・ダイコン・ニラ・花ふ ◎三枚肉三切れの2組	墓前 火の神 仏だん 右に同じ	組 なし	
二・七（タナンカ）～四十九日	墓前 仏だん 右に同じ	墓前　十二本 火の神 仏だん 右に同じ	なし　組 組	白紙　7・5枚 天地紙　1組 白紙　7・5枚 天地紙　1組
若スーコー 一年忌・三年忌 七年忌・十三年忌	墓前◎お茶・酒・花 ◎おかし・くだもの 仏だん◎盛り菓子×2組 ◎くだもの×2組 ◎重箱　モチ15コ×2組 ごちそう×2組 ◎精進七品のおつゆ 白トウフ・ニンジン・シイタケ・モヤシ・ダイコン・ニラ・花ふ ◎三枚肉三切れの2組 ダンゴ7コ×2組	墓前　十二本 火の神 仏だん 右に同じ	一年忌　組 三〃　組 七〃　組 十二〃　組 ◎仏だんも右に同じ	白紙　7・5枚 天地紙　1組 ◎仏だんも同じ
大スーコー 二十五年忌 二十三年忌	墓前　若スーコーと同じ 仏だん　若スーコーにブタの顔を2組加える	墓前　十二本 火の神 仏だん 右に同じ	二十五年忌　組 二十三年忌　組 ◎仏だんも右に同じ	白紙　7・5枚 天地紙　1組 ◎仏だんも同じ

※法事の日延べは、十二本を火の神に立てて日延べの祈願をする。

4、祭りの部

(1)火神の信仰

「火の神」（ヒヌカン）はどの神よりも最高位にあるとされている。沖縄の人々の暮らしの中には、祖先崇拝よりも古くから家庭を守る神として沖縄固有の火の神信仰があったとされている。火の神が、最高の神と信じられたのは、家というものが「かまどの火」とともに発生し、「火」を守ることがその家の繁栄につながるとされたからである。

火の神は各門中の宗家「元家」（ムートゥーヤー）から分神してきたとされ各自の家の火は宗家の火の神が「元火」とされている。火の神は、旧暦十二月二十四日には守護している家の安泰を天に報告するために昇天し、一月四日に降りてくると信じられている。また、宗家から分神する時期も十二月二十四日が適当と言われている。

(2)マブヤーグミの儀式

人の持つ霊魂のことをマブイ、またはマブヤーといっている。そのマブイは、強いショックを受けたり、身体の不調のときなどに肉体から遊離する性質を持っていると言われている。特に成長が十分でない子どものマブイは遊離しやすいとされ、子どもが驚いたり、転んだりするとマブイが落ちると信じられている。また、遊離した霊魂（マブイ）を元の肉体に戻すにはショックや事故の質、或いは、場所によって呪文の内容が変わるとされている。マブイが落ちると病気や事故にあいやすいとされ、落とした場所に行き供え物を準備してマブイを身体に戻るマブヤーグミの儀式を行う。供え物は、花米、米、酒、平御香（ヒラウコー）、ゲーン（ススキを結んだ魔よけ）などである。

(3)ジュールクニチ（十六日祭）

旧暦一月十六日は後生（ごしょう）の正月と言われている。祖先供養の行事で、特にミーサ・新仏（亡くなって最初に迎えるジュールクニチ）のある家庭には部落民の多くが焼香に訪れる。

なお、本字では生活改善や簡素化から返礼はしないことになっている。

(4)ウニムーチー（鬼餅）

旧暦十二月八日に、月桃の葉で包んだ餅を仏壇や火の神（ヒヌカン）に供え、邪気払いと家族の健康を祈願する行事である。赤ちゃんが誕生して最初に迎える鬼餅の日を「初餅」（ハチムーチー）と言っている。

(5)トゥンジージューシー（冬至雑炊）

冬至の頃は、大陸から強い季節風が吹き寒波が数日つづく、その寒さをしのぎ明日への活力源として、ジューシーを仏壇や火の神に供え、健康を祈願し家族で食べる。ジューシーは豚肉、昆布、シイタケ、カマボコ、ニンジンなどを混ぜた炊き込み飯である。このジューシーを食べたら正月を迎えたも同じであるといわれ、冬至正月ともいわれた。事実、琉球王府は公事として、元旦と同じくらいに重視し

ていたと言われている。

(6)チータチ・ジューゴニチ

旧暦毎月一日、十五日に仏壇にお茶を供え、線香を焚き家族の無病息災を願う。

(7)ヌギファウガン

死者が成仏したことを生前お世話になった神々にお告げするとともに感謝を申し上げる儀式である。とりわけ水の神への報告と感謝が主である。本字では通常シンジュウクニチ（七回目のナンカ祭）の終了後出来る限り早い時期に執り行う。拝所として先ず根神屋、次にウフアナガ（大井戸）、ウッカー（現教員住宅の近くの小川）、ウッチンハー（清正屋の向かいの小川）、最後にアミチブガー（お嶽の後ろ）の順で拝む。

(8)門松としめ縄

門松は、年神の依代と言われ、年神が宿る安息所であるとともに神霊が下界に降りてくるのに、寄り付かせるためのものと考えられた。門松は十二月二十七日、二十八日頃立てるのが適当とされている。なお、二十九日は「苦立て」といって嫌う風習がある。

しめ縄は、昔から神聖な場所に飾り、周囲のけがれを断つ印しとして用いられてきた。古い年の悪や不浄をはらい清める意味で飾る。

(9)除夜の鐘

大晦日は全国どこの寺でも、百八回の鐘を打ち鳴らす。川田区でも毎年鳴らしている。この除夜の鐘は中国から伝来したと言われている。仏教の儀式のひとつで、人間の現在、過去、未来のすべての煩悩の数が百八であり、「煩悩解脱」、「罪業消滅」を祈って打ち鳴らすと言われている。また、大晦日の夜を「除夜」と言うのは「寝ないで過ごす日」、「古い年の除かれる日」と言うことらしい。毎年百八回の鐘を聞いて、心身を清めて新年を迎えたいものです。

(10)屋敷ウガンとヨーハビー

旧暦八月八日は家族の無病息災の為に屋敷を清めお祓いを行う、屋敷ウガンを実施する日である。一切の災いを無くし、健康で安全な生活ができるように、門及び屋敷の四隅で祈願する。供え物としてはモチ（ウチャヌク）、塩、花米、酒、線香（十二本）である。おわりに塩と花米を混ぜて屋敷内に播き、ウガンを終える。

なお、旧暦八月八日にはよく知られているトーハキ（トーカチ）ユーエー（米寿祝い）が催される慣わしもある。

旧暦八月九日から十五日まではヨーハビーと言われ、魔物（マジムン）や悪霊（タマガイやピーダマ）が出現する時季とされている。特に九日はヨーハビーの入りの日で、魔物や悪霊が屋敷内に侵入しないようにススキ（魔よけのススキをシバあるいはケーンと言う）を結んで、門、屋敷の四隅及び車庫、別棟に置きお祓いする。そこに供える物は特に無いが、仏壇に夕食として赤飯（赤豆ご飯）を供え合掌（ウートートゥ）する。

なお、ここで使うススキは、その家の屋根が見えない場所から持ってくることになっている。また、川田区としては毎年旧暦八月九日には恒例の綱引きを実施している。

(11) 神アサギ・獅子の入魂式

戦火で焼失した「神アサギ・ムラヤー（獅子を安置）」を五十八年振りに完成させ、平成十四年十二月二十四日に川田、平良の神人による祈祷で村の守護神を迎え入れる入魂式を執り行った。

神アサギは、祭祀場で村の神事を行う場であり、区民の心のより所でもある。また、獅子の社であるムラヤーにはシシガナシ（獅子様）を安置している。獅子は魔よけで悪霊を払い、豊かな実りで福をもたらす守り神とされている。ムラヤーは神事を執り行う際の神人の休憩所としての館でもある。

神アサギ・落成祝賀会

5、今帰仁上りの拝所

根謝銘屋門中の祖先の故地である城跡、墓、洞窟、泉（湧水）、井戸、御嶽などを巡拝する神拝の行事があり、その一つが今帰仁上りである。以前は門中代表で三年越しに巡拝していたが、最近では五年に一度の巡拝になってきた。この「今帰仁上り」は「東御廻り」ともに沖縄中の門中が巡拝する神拝の行事とされている。

川田根謝銘屋門中の始祖や祖先を温ねることで門中の絆を強め村全体の未来永劫の安泰と繁栄、子孫繁昌や五穀豊穣を祈願する。根謝銘屋の祖先が今帰仁城主の次男恩徳金の末裔であると伝えられていることから、そのことにかかわる関係箇所を巡拝している。その巡拝箇所を、湧上元雄、大城秀子共著「沖縄の聖地」、「今帰仁村史」を参考に記述した。

(1) 湧川新里屋……今帰仁村湧川

雑木林の中に神ホコラがあり、その後方の家屋内

に位牌、火の神が祭られている。天孫子御世（天孫氏は伝説による沖縄最初の王）のものと云われており、木造セメント瓦葺きの家であり無人家屋になっている。

(2) 大北墓（ウーニシバカ）……今帰仁村字運天

運天港近くの断崖下を掘り抜いた広壮な造りで、北山監守時代の一族を葬った墓である。別名「按司墓」とも云われている。

(3) 百按司墓（モモジャナバカ）……今帰仁村字運天

運天港を見おろす運天森の断崖の中腹にあって、岩かげを利用して造られ、その表面をシックイで塗りかためており、前面は雑木がうっそうとして日中でもうす暗い。

ここは北山王族を葬ったと云われているが、一説には第一尚氏王朝最後王、尚徳王の遺臣が首里を追われこの地にて世を去ったのでその人達を葬ったといわれている。さらに、墓名の示すとおりもろもろの按司やたくさんの按司が葬られているとも云われている。

(4) テラガマ（ビジュルの神）

百按司墓の上、運天森にあり、昔洞窟内にビジュルと称する霊石があり吉凶福禍を占ったといわれる。一説には源為朝が上陸し一時その洞窟に住みついたと云われていた。

大正十一年五月国頭群教育部の起案で、沖縄史跡保存会に依って為朝上陸祈念碑が建立され、その右側にビジュルホコラを設けて移した。

(5) 御川（ウカー）……今帰仁村字運天

運天公園入口の公園に向かい右側下の湧き水川。現在の周辺状況は灌木やススキなど雑草が繁茂して、川が確認しにくい。

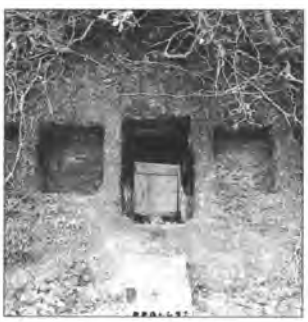
（上：(5)御川（ウカー）、下：(6)ウフガー（アナガ））

(6)ウフガー（アナガ）……今帰仁村字上運天

上運天部落のはずれ、運天港入口トンネルの手前約四百メートル右側の雑木林の下にある。昔ながらの井戸であり湧水が出ている。

(7)満名墓

今帰仁村大井川の下流に向かって左側にあり岩壁の中腹を削り貫いた墓であり、墓口までブロック四段が積まれた階段が設けられ、木製の扉がついている。川田根謝銘屋始祖、満名上殿内の元祖の墓である。

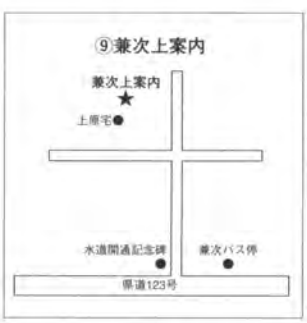


(8)諸志御川（ウカー、祝座川（シュンザガー））

今帰仁諸志、県畜産試験場入口の右側の雑木林の下にある井戸、右側に小さい自然の井戸があり、左側に入口の井戸が設けられている。中北山時代のものと云われている。

(9)兼次上御内（金満殿内）

今帰仁兼次一一〇番地上原清吉氏宅屋敷内の西に神社がある。根謝銘屋門中がそこを巡礼するが、根拠は、現時点では不明である。



(10) 今帰仁ノロ殿内（親泊ヌンドンチ、ヌル屋殿内）

今帰仁親泊入口県道東側、福木等でかこまれた家屋で今帰仁ノロは代々この家の長女が引き継いだという。曲玉、水晶、黄金のカンザシを密蔵し、今帰仁城内の拝所、クボウの御嶽、親泊の各拝所の祭りを司ったという。

(11) 今帰仁ノロ火の神（国の火の神）

城外下の三叉路旧道から東に入ると左側に老松林があり、その中に神ホコラがある。お遥し拝所で城内の各拝所への祈願に先立ち、ここで遥し拝みをしたと伝えられている。

(12) 空御川（カラウカー、今帰仁城内）

……今帰仁村字今泊ハンタ原四八七四番地

正殿本丸跡の火の神の一段下にある。向かって右側にカラウカーがある。その右手にある木の根元に弁財天が鎮まっている。

(13) 火の神（今帰仁城内）

南殿跡東南の方向に位置し、正殿本丸中央に今帰仁城の火の神が祭られている。この火の神は天孫子以来の北山の守護神である。

(14) 今帰仁のカナヒヤブ（テンチヂ、アマチヂ、今帰仁城内）

北御用原の横に石垣で囲んだ霊石があり、これをテンチヂ、アマチヂといい、今帰仁城の守護神である。北山最後の王攀安知が、尚把志の連合に攻められたとき、宝剣千代金丸で敵を斬りつけた場所であり、また、落城の時攀安知が自害した時に斬ったとされる石の一片が安置されていたとも伝えられている。

(15) ソイツギの御嶽（今帰仁城内）

北殿跡の西側にあり、ソイツギのイシス御イベが鎮まる所である。カナヒヤブが大嶽とすれば、ここは子嶽である。共に北山鎮守で五穀豊穣の祈願所である。

(16) 公房の御嶽（クボウノウタキ）……今帰仁城内の拝所

公房の御嶽は、天来子乙女王の御降臨の聖地で琉球七御嶽の最たる所である。御祭神は、ワカツカサノ御イベである。志慶真の後乙樽歌碑が建立されている。

(17) 満名上殿内

本部町並里神社の西側高台にある。根謝銘屋の始祖、ピギドキウフスウは満名上殿内の次男で、中北山の末裔であると云われている。

(18) **屋部のあぢみち家**

(19) **名幸ホコラ（名護南南城内）**

名護南南城の中腹、登山道の左側の広場に大きな拝所がある。

(20) **北山名幸の墓（名護南南城内）**

名護兼久田門中の始祖の墓で、名幸ホコラの広場の右側に一段下がった所にある。

(21) **ウカー（井戸、名護南南城内）**

名幸墓の下に川が流れており、川に降り立った川辺に井戸がある。

6、東御廻りの拝所

東御廻り（アガリウマーイ）は時の琉球国王が麦の初穂儀礼に久高島に、稲の初穂儀礼に東方（あがりかた）（玉城、知念、佐敷、大里、与那原）井泉、御嶽などを巡拝して、国土の安泰と五穀豊穣を祈願したのが原型とされている。国王の御参詣（さんけい）が廃止された後、その頃から士族の門中組織の形成が盛んになり、士族の門中神拝みとなり三山の遺臣たちの祖先祭祀（さいし）から始まったとされる。したがって、巡拝地は大方共通しているが、門中によって一部異なるところもある。川田根謝銘屋門中は以前には五年廻りで巡拝していたが、今日では十年廻りになっている。巡拝しない期間が長いので拝所や道順に戸惑いがあるなどの課題があり、以前の五年廻りの実施を望む声がある。

次に、川田根謝銘屋門中の巡礼箇所を記述する。

なお、写真と地図は玉城村、知念村、佐敷町発行「東御廻い」―神々と琉球王朝のロマンをたずねて―から引用した。

(1) **山田祝女殿内**

(2) **山田城跡**……恩納村字山田小字城原

北山王統の縁（ゆかり）の深い護佐丸の祖先墓碑

に祈願する。その後辺戸義本王の墓、伊平屋島へ遥拝する。

(3) **大井戸、墓**

(4) **園比屋武御嶽**

園比屋武御嶽は、国王が城外に出るとき、帰路往路の安泰を祈願したと伝えられる拝所である。

(5) **浦添伊祖安里ヤー**

英祖王代々の御元祖、大井戸。

(6) **浦添ようどれ**…浦添市仲間浦添城跡北側崖下の中腹向かって右側英祖王、左側尚寧王の墓。浦添は首里以前の古都として、十二世紀の半ばから十五世紀の初期まで約三百年間、舜天、英祖、察度の三王統が興亡をくりひろげた。

(7) **佐敷グスク（上グスク）**……佐敷町字佐敷

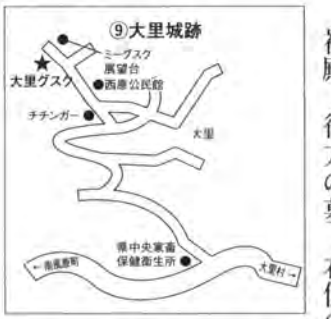
第一尚氏の祖・尚思紹と三山統一の覇者・尚巴志父子の居城として名高いグスクである。

(8) **斎場御嶽**……知念村久手堅サヤハ原二五四番地

琉球開闢の七御嶽の一つとして、国王の行幸（東御廻り）のあった恩嶽として、最高神女・聞得大君（きこえおおぎみ）ノ即位式である御新（おあら）下りの行われた霊地である。

(9)**大里城跡**……大里村字大里小字西原

神殿、後方の墓、右側の井戸。



(10)**大里祝女殿内**

左は火の神、中央に感応、右に霊在の偏額。

(11)**受水走水と御穂田**…玉城村百名小字浜川原一六〇九番地

流れの緩やかな受水、早い走水で琉球稲作の発祥地。

(12)**浜川御嶽**……玉城村百名小字伊佐良原七一七番地

ヤブサツの御嶽、この一帯はヤブサツ浦原でアマミキヨの最初の居住地跡。後にミントン城へ異動。

(13)**ヤハラヅカサ**……玉城村百名小字伊佐良原七〇八番地

アマミキヨがニライカナイの神世から琉球に初めて上陸した地点。

(14)**ミントン城跡**

……玉城村字仲村渠小字後根原七五六番地

アマミキヨがニライカナイの神世からヤハラヅカサに上陸、一時浜川御嶽に居住したが後にミントン城に安住した。アマミキヨは三男二女をもうけ長男は国王の初めで天孫氏、次男は諸侯の初め、三男は百姓の初め、長女は最高の女神、次女はノロの初めとされている。城の下に霊泉がありナカンダカリヒージャといっている。

(15)**新里村整理客屋**……佐敷町字新里

火の神、神棚、御元祖、墓。

(16)**弁ケ嶽**……那覇市首里鳥堀町四丁目

大嶽、小嶽、井戸。

国王の参詣した整地で、大嶽の神名は玉ノミウジ、

スデルカワノ御イベツカサで久高島への遙拝所であり、小嶽は神名天子「てだこ」で斎場御嶽への遙拝所である。

（上：⑮新里村整理客屋、下：⑯弁ケ嶽）

ヤハラヅカサ

五、川田で語られている民話の例

東村教育委員会発刊「東村の民話と民俗」より引用

1、恥うすい坂

金城　長一（大正二・三・十）

女と男が強く愛し合っていた。男は久志村、女は東村の人であったが、二人の親達が許さなかったので、密会の場所を決めていた。ある日、女が先について待っていたが、何時間たっても男が来ないものだから、他の女と遊んでいると考えた。それから、男が来たが、女は下の方も見せて死んでいた。そこで、男は木の葉を折ってその恥を覆（おお）った。それで、恥うすいと言う。

2、姥捨（うばす）て山（馬の親子）

中村　ウサ（明治三十・五・二十）

母親は皆、時期になると山の中へ捨てに連れて行った。だが、その男の子は絶対に親を捨てきれなかった。自分の家の床下に大きな穴を掘って親をかくまい、御飯を持ってきては食べさせていた。ある日侍が馬を二頭引いてきて、どちらが親で、どちらが子か区別できるかと言ったので、子はたいそう困ってかくまっていた自分の親に尋ねた。（親は）草を刈ってきて、馬の前に置いて先に食うのは子馬だと教えた。親の言うとおりにすると、子馬は先に食っ

た。侍は「誰から習ったのか。お前の考えなのか。」と尋ねた。それで「こうこういうわけで、自分の親を捨てることが出来ずに親をかくまっていたので、親から習った。」と言うと、それからは、亀の甲より年の功、年寄りほどの考えは（若い者には）ないものだ、と言って親を捨てることはなくなった。

3、猿長者

渡嘉敷ウト（明治三十五・六・十五）

年の夜に金持ちの家に（神が）泊まりに来たが、神とは知らずに追い返した。今度は貧乏者の家に行くと「こんな家でよかったら泊まって下さい」と言うので、そこに泊まった。しかし、年の夜だというのに何もなかった。「どうして、あなた達は年の夜だというのに何もないのか」と聞くので「私達は貧乏なので、何も買う金がないのです」と答えた。「それではお湯を沸かしなさい」と言うので湯を沸かすと、粉のような物を入れた。片方は御飯、片方は肉を入れて御馳走した。そして、沸かしたお湯で浴びると若返った。隣の金持ちの家に行くと「あなた達はどうして若返っているのか」というので「夕べ泊まった人が、このようにしてくれたんだ」と答えた。その人（実は神であった）はいなくなっていたが、またやって来て、心の悪い金持ちの人達を猿に変えた。そして、金持ちの家はあなた達がもらいなさい、と貧乏者に言った。それで、金持ちの家に住んでいると、猿がやって来た。マーイシ（堅い石）を焼いておくと、その上に猿が座って尻が赤くなった。

※学校で先生から聞いた。

4、キジムナー

金城　長一（大正二・三・十）

夜、海に出た漁師がいて、松明でエサを取っていた。すると、目の前に赤ん坊みたいにオカッパにした者がいた。その漁師はびっくりして化け物だと思ったが、言葉を交わした。すると、それが「エサ取るときにはタコを絶対に取るな。取ったら殺してやる。」と言った。この漁師は「タコは取らないから、助けてくれ。」と頼んだ。キジムナーが、自分は山仕事が出来るから友達になろうと申し込んだ。それから、二人は同じ家に住んで山仕事をした。キジムナーは、大きな木を切ったら担ぎ出して相当助かった。しかし、毎日、夜に仕事をするものだから、男は体がもたなくなったので何とかしようと考えた。そして、キジムナーに今日の夜は山に行かないで海に行こう、と誘った。男は、松明をつけてタコを見付け、キジムナーにもう友達はしないと言ったので、キジムナーは、命は助けてあげる、家まで連れて行ってあげるといった。この人はだいぶ助けられたという。

5、鬼餅由来（その一）

池原　直吉（大正二・九・十）

兄は人喰いで、部落の者から嫌われていた。妹が、これ以上世間に迷惑をかけたら大変なことになる、ということで考えた。どうしても、いろんな毒物を作ってやる以外にはない、と考えた。以前、同居していた時、兄は餅が大好物であった。そこで、餅を作って兄の所に行き、帰らないかと誘う。初め兄は全然取り合わなかったが、餅をくれたら帰ってもいいと答えたが、妹は、帰らなくてもいいから餅を腹一杯食べてくれと言った。兄は承知して一生懸命に食べたが、中に毒素が入っていたので兄は完全に倒れてしまった。妹は、兄を殺したと悩んだが、みんなは妹を慰め、いつまでもそれを残そうと鬼餅を作った。

6、鬼餅由来（その二）

金城　幸子（大正三十八・六・一）

鬼が子供を取って食べたりするので、人から恐れられ山の中に引っ込んでいた。姉は、殺そうと思っても弟なので殺せないし、人に対して恥ずかしい思いをし、大変困っていた。本当に自分の目で確かめなければいけないと思い、弟の留守中に山小屋に行ってみると本当に人の毛や足などがあって、泣くにも泣けず悲しい思いをしていた。自分一人で退治しようと思い、餅を沢山作りに二人で食べようという事になり川へ行った。姉はこちら側、弟は川べりに座っていた。おいしい、おいしいと弟が夢中になって食べている時に、姉が川に落とし鬼を退治した。

※現在は鬼はいないが、流行の病気にかからないように健康を祈願して餅を作る。学校で先生から聞いた。

7、十二支由来

池原　直吉（大正二・九・十）

動物だけを並ばせ、そして、歩かせて先に着いた順に年を決める、ということになった。ネズミはその中で一番小さかったが、頭が良かった。大きな牛の角に乗って出発し、決勝の土壇場で先に飛び降りた。それで、ネズミが年の始になった。

8、蛇婿入り

喜屋武ツル（大正二・九・二十三）

美男子が赤いハチマキをして、女をしのんできた。それで、その人にアレされてしまったので、針に糸を通し、男子につけて糸をずっとたどっていくと、アカマタが住む岩穴（ガマ）に入っていった。だから、この由来記から、浜へ行って砂を踏まないとアカマタに襲われるぞと昔は言った。（女が浜下りすると）アカマタがわさわさ産まれたそうだ。

9、夫振岩

池原　直吉（大正二・九・十）

婚約をして、親同士は認めていたが、本人達が一緒になるのを嫌っていた。どうしようかと親戚達は考えて、あの離れている石に二人を連れて行こうということになった。そこは、周囲は何もなくて、泳いで渡ってこれる所でもないからである。真冬に二人をそこに連れて行き、男の方に毛布を渡した。どっちかというと女の方が乗り気じゃなかったからである。夜になると益々寒くなった。女は初めは我慢していたが、とうとう男と一緒にかぶり物をかぶった。それで結ばれたので、そこを夫振岩と名前を付けた。

10、普天間権現由来

金城　幸子（大正三十八・六・一）

首里の平良にとても美人の女の子が生まれた。外には絶対に出ず、家にこもって芭蕉を紡いでいた。男の人達にも評判が高くて、みたいと思うけれども、どうしても見ることが出来なかった。ある青年が弟をすかして物をやって、叩いて大声を上げさせた。姉はびっくりして覗いてみると、そこにいた青年が「見た。見た。」と言う。姉は驚いて自分で紡いだ芭蕉の糸を持って逃げていった。その糸を辿って行くと、普天間権現の中に続いていた。

※工芸学校にいる時、校長先生から聞いた。

11、田場大工（その一）

仲村　宜徳（明治四十・八・二十四）

田場大工を雇うと、彼は一日中、大工道具ばかりをいじっていた。雇い主が文句を言ったので、二枚の板をくっつけて、その間に水が入るかどうかを試したところ、開けてみると、少しも水が入っていなかった。

12、田場大工（その二）

宮平　次郎（大正二・三・十六）

（一日中、大工道具ばかりをいじっていたので、雇い主は田場大工を辞めさせてしまう。）それで、田場大工は、木を削ってくっつけ水の中に入れるが、その木の間には水が入らなかった。それ程の腕を持っていた。

六、芸　能

本字に伝わる芸能は主に豊年祈願祭（旧暦八月十日～十五日）に公演されている。以前は毎年実施されてきたが、複雑多様化してきた時代に字として適切に対応するために最近では三年に一度の実施になってきた。川田の豊年祭で上演されてきた演目も、古典舞踊の老人踊り、若衆踊り、女踊り、二才踊り、それに組踊り、また、雑踊りの多種多

様であった。踊りは主に玉城流である。近年の指導者は中村武太郎、比嘉吉二、宮平義光、中村廣、池原善一、池原直吉、中村政市、比嘉博昭らである。組踊りの指導は奥本養徳や金城鎌信、吉本実、奥本養幸、神谷時男ら、地方（地謡）は宮平松之助、比嘉貞太郎、比嘉仁治ら終戦直後は、宮平次郎、比嘉正雄、金城光栄ら、その後は仲本政栄、宮平辰雄、中村正一、新城哲夫、金城敏光、最近では平良昇康等で、太鼓打ちは戦前戦後を通して金城長一で、その後は金城幸昭がやっている。舞踊や組踊等の小道具は以前は主に真栄城嘉政、池原善一、池原直吉が、近年になってからは金城幸昭、平良茂が作成した。カンプー結いは主に中村実助がやった。

川田に伝わる主な芸能を簡略に紹介したい。

1、国頭サバクイ

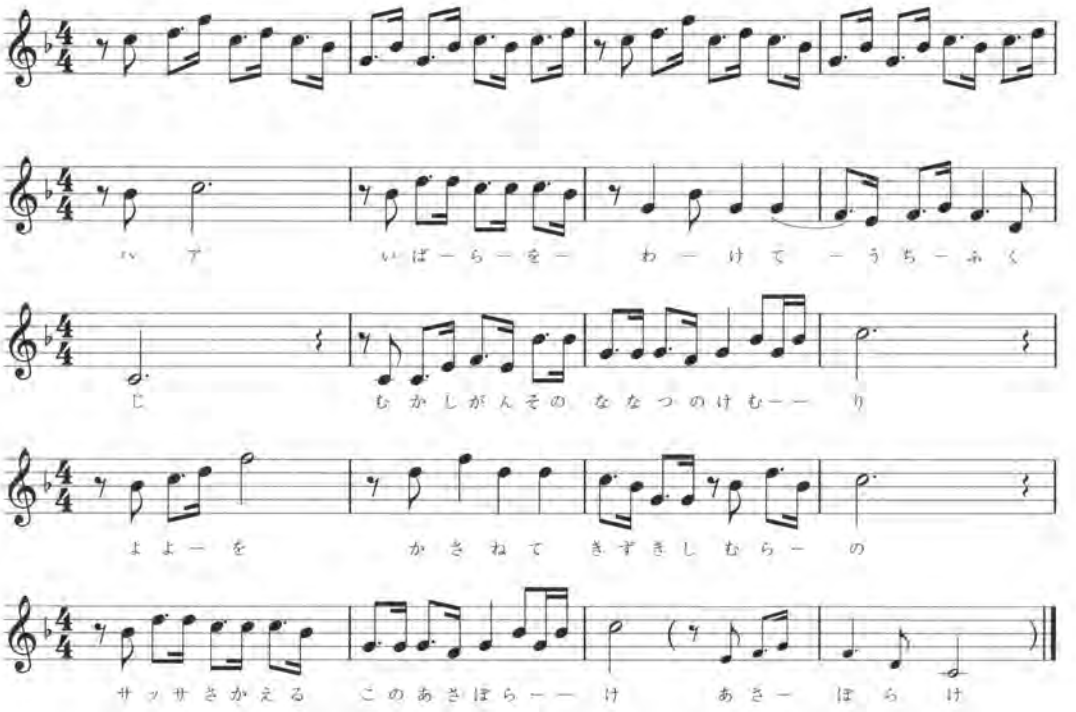
昔、首里王城の造営、改築の時、国頭間切り奥間部落の後方にある与那覇岳八合目付近の長尾山から木材を伐採して、鏡地浜（かがんじはま）まで引っ張って行き、山原船で、時には陸路駅伝方式で首里王府まで運んで行った。その道中で歌われた歌である。「サバクイ」というのは捌理（サバクリ）、捌庫理（サバクリ）などと呼ばれる山林担当の下級役人のことで物事をさばく（捌く、処理する）という言葉からきていると思われる。木遣（きや）り歌で、国王賛歌と国王に献上される大事な材木を皆で力を合わせて運ぼうという内容になっている。

川田の「国頭サバクイ」は入羽（退場）に大きな特徴があり、他地域のそれと比べて圧巻であると言われている。

なお、一九七五年本部町で開催された国際海洋博覧会で沖縄県の代表芸能の一つとして公演して、世界の人々に感銘を与え高い評価を受けた。解説は当時役場の総務課長の平良昇康（後に村長を二期務めた）で踊手は婦人会、青年会、成人会で総勢百余人、地謡は宮平辰雄、中村正一、新城哲夫であった。他日第二回目は婦人会独自で公演した。

国頭サバクイ　国際海洋博覧会にて（1975年）

川田小唄



2、川田小唄

（昭和二十年十月十日）

作詞・作曲・振り付け　玉城幸男

採譜　照屋寛八

一、ハアーいばらを分けて内福地
昔元祖の七つの煙
代々を重ねて築きし村の
サッサ栄えるこの朝ぼらけ朝ぼらけ

二、ハアー北の並松祖先の教え
前の潮垣は私しらの功
代々を重ねて築きし村の
サッサ捧げよ感謝の祈り祈り

三、ハアー福地大川流れも清く
乙女の肌も真珠に変わる
広く豊かな河原の実り
サッサ誇れよホイこの宝宝

四、ハアー浜の真砂に寄せ来る波に
続く海原太平洋は
川田若衆のこの腕だめし
サッサ行こうよこの海越えて越えて

五、ハアー渡海に風待つ旅船の高平良
風見の旗にホイ波枕
川田よいとこ情けの島と
サッサ云いますそれなびきます

六、ハアーやがて出来るよ理想の村が
老も若きも手に手にとって
夜明けの鐘に心も明るく
サッサ行こうよ希望の丘に丘に

3、エイサー

エイサーは沖縄の夏を彩る風物詩で、野外の集団舞踊である。発生当初は祖先の供養的性格が濃厚であったが、時代が進むにしたがい、五穀豊饒を願うような意志を強く加味されてきた。小道具はパーランク、太鼓、三線等で歌や衣装は各村で異なり、踊りは強烈なリズムで灼熱の太陽の下で若者のエネルギーあふれる演舞である。

川田のエイサーは昭和二十三年終戦間もない頃、儀間光徳、城間栄、城間栄一などが高江から取り寄せて、青年達に教えたものが始まりである。当時の地方（地謡）は、儀間光徳、大宜見朝二郎、比嘉正雄それに新垣山戸等であった。

〈三村踊り〉

※地謡（アヤマミグナヨ）・踊り手（ムトウカンジュンド）

小禄豊見城垣花三村　三村のアン小達が
揃とうて布織い話
（アヤマミクナヨームトカンジュンドー
ムトカンジュンドー）
上泊泊元の泊まりと三村
三村の二歳達が
揃とうて塩たち話
（アミフラスナヨームトカンジュンドー
ムトカンジュンドー）

〈スーリー東節〉

※地　謡（スラヤサハイヤ）・踊り手（スラヤサハイヤ）

スーリー東うち向かいて　とぶる綾蝶
（スーリーサーサースラヤサ　ハイヤ）　※が続く
先じゅ待て綾蝶　キヤい物ゆたぬま
（スーリーサーサースラヤサ　ハイヤ）　※が続く

〈谷茶前節〉

※地　謡（ナンチャムサムサ）
・踊り手（カミテイサンタル）

谷や前の浜にスルルが寄ってちゅんどへイ　スルル
（小が寄てちゅんどへイ
ナンチャマムサムサ　デアン小ソイソイ）
（シチイチ　シチイチ）
スルル小やあらん大和ミジュンどやんでんどへイ　大和
（ミジュンどやんでんどへイ
ナンチャムサムサデアン小小ソイソイ）
（シチイチ　シチイチ）

〈ダンク節〉（三下げ）

※地　謡（スリーヌ）
・踊り手（ダンクシタリヌシタヨーマンブリ）
※地　謡（スリーヌ）
・踊り手（ダンクシタリヌシタヨーマンブリ）

ダンク節習ゆんで名護アガリ通うてヨンサー
名護の石垣にちんしちりわてぃ
（スーリーヌ　ダンクシタリヌ　シタヨーマンブリ）
ダンク舞いやしがややいかにアバ小ヨンサー
ダンク舞いやりば我にんいちゅさ
（スーリーヌ　ダンクシタリヌ　シタヨーマンブリ）

4、川田ヤン松ぬ唄

作詞・作曲　川田有志の合作
振り付け　呉屋宮子

一、川田ヤン松ぬ　枝むちぬ美らさ
川田みやらびぬ　すなみ美らさヨ
二、川田前ぬ浜に　ぽたん花咲かち
川田みやらびゆ　はべるなさなヨ
（間奏）
三、天場いじたしが　遊ぶ人うらん
月夜ながみとて　うたていむどらヨ
四、川田前ぬ海ぬ　漁火ぬ美らさ
川田ニセ小たや　思い深さヨ
（間奏）
五、川田福地村と　川ゆひざみとて
言葉変らする　水ぬ力らヨ
六、川田美ら浜ぬ　砂利まくらしちょて
太陽ぬ上がるまでん　語てみぶさヨ

5、獅子舞

各地に古くから継承されている祓（はら）いの芸能の一つで、旧暦八月に豊年祭に行われている。豊年祭の第一番目の演目として舞台にかかり座を清めるとともに、邪気をはらうとされている。また、獅子は百獣の王として、その威力が信じられ、獅子を舞わすことによって、悪霊を払い、五穀豊饒と村（字）の繁栄がもたらされるものと考えられた。

川田では戦前から獅子舞いが行われて来たが、初代の獅子頭はこの大戦で焼失してしまい、現在有る二代目獅子頭は昭和五十二年に金城幸昭が浦添市仲西のものを参考に作成したものである。

一九七五年本部町で開催された国際海洋博覧会で北部市町村に保存されている伝統芸能の一つ獅子舞を公演し、世界各国から来園した人々から万雷の拍手喝采を受けた。その代表の一翼を担ったのが川田の獅子舞であった。なお、踊手は金城幸昭、新城哲夫で、地謡は中村正一と平良昇康が努めた。

6、棒踊り（棒術）

旧暦八月の豊年祭に演じられ、獅子舞と同じでその威勢により災厄（さいやく）が払われるとされ、幸先きよい芸能として演じられている。棒踊りは踊り的要素のある棒踊り（棒振り）と、武技的要素のある棒術に分けられる。

本字の棒は、棒踊りのカマヒー棒と棒術のミーヌキ棒、それに集団演技のスーマキ棒の三種目が伝えられている。終戦間もない頃、奥本養徳、中村武太郎の二人から金城幸昭、平良茂が指導を受け、継承されてきた。

7、組踊「矢蔵の比屋」、「伊佐浜の恨み」

組踊りは十八世紀初頭にできあがったもので、玉城朝薫という、首里王府の踊り奉行の構想によるものである。組踊りは沖縄に伝わる音楽と舞踊を総合的に取り入れ、一つの物語を形成した戯曲と言われている。

(1)「矢蔵の比屋」

次の五幕（八段）から構成されている。

一幕　「矢蔵の比屋」の出羽、矢蔵は津堅田の按司と棚原の按司を殺害したことを述べる。

二幕　棚原の按司の乙樽と若按司虎千代は、しばりあげられ矢蔵の前に突き出される。

三幕　虎千代は母の敵である山賊を打ち取り、御主前とハーメーからほめられる。

四幕　虎千代と山戸等は、矢蔵の比屋と戦う。

五幕　矢蔵は、若按司虎千代にとらえられ、しばりあげられる。

川田では大戦前から演じられてきた伝統的演舞であるが、戦争でその台本が焼失してしまった。しかし、終戦直後大宜味村高里に疎開していた玉城金三から奥本養徳、金城鎌信、比嘉博昭、玉城哲弘、知念佑憲が一泊して、「矢蔵の比屋」の教えを受け、現在に継承されている。昭和二十一年の「命（ヌチ）の祝い」で戦後初めて演じられた。その後しばらくの間は豊年祭の外でも公演された。

――脚本「矢蔵の比屋」――

矢ぐらのひや詞　出やうちゃる者や幸地のあるじ矢ぐらのひや、津堅田の按司と棚原の按司や、わんいゆいんまさていちょい栄やりばわがままにならん、はかりごとたばかやい、二人按司こるちなまどちむはりる我が上の空や、とぴといんとぱん花ざかりいなぐ色々に撰（ク）ぬてあの村に遊びいきらくのたのみすることどやしが津堅田のなし子棚原ぬ妻小取いのがちねらん、ぬぎはしてをらんゆるちうちからやあとあとになりば弓ひちゅらとめばとてんあヌかんら根葉（ネハ）までん苅やい。浮ち世楽々と暮しぼさあむぬ、やあ呉屋の大屋、嘉手苅の子。

呉屋の大屋・嘉手苅の子　ふう（二人登場）

矢ぐらのひや　津堅田の産子棚原の妻子取りぬがちおらん、ぬげ走（ハ）しておらん後々になりば弓ひちゅらとめば片時ん急ぎ、島々よみぐてさがしあらたみてからみ取りてちょうり

呉屋の大屋　めせるごとこの天世界（テインダンケ）にゆるちおちからや、後々ぬくとぎわい弓ひちゅらと思ば片時ん急じ島々ゆみぐてさがしあらためてから取やいちゃぴら

矢ぐら　とうと肝に肝しいて念ゆ入りゆ

呉屋の大屋　拝がんちゅみやべて（一同入場、一幕）
出羽乙樽虎千代さがしに（二幕）
幸地の臣家呉屋大役嘉手苅の子島々よみぐて、里里よ
忍でくまぐまとさがすしがあの二人が妻子、行き方ん
知らん後方ん見らん聞きば中城伊舎堂の村にかくりや
いをんで、しらしべのありぱ散々にをむの押払い〳〵
うみいさみいさいで忍で行きゆん
嘉手苅の子　さり、伊舎堂の村に着やびたん
呉屋大役　ことひさしちやいしそんじのあむの、みすく
心着きて立聞ゆすらに（二線滝落）
この宿の内やひと不思ぎでもの棚原妻子うたげやね
らんいすじふみ入やいからみ取ちちよいり
幕内で　いやいちゃが〳〵
乙樽　人まちげやあらにとがねん我身に縄ゆかきゆしや無
理やあらに
呉屋大役　人ちまげんあらん見しまちど居ゆる。棚原の妻
子うだげやねらんおがたちが故いにうみ忍び忍で番所
走廻る内る又やたる、物事多さ急が〳〵
虎千代　我身やしみゆらば如何程んしみり、頼んで母親や
許ちたぼり
呉屋大役　くちさがしわらびいゆることのにくさ、しみ縄
ぬうるさなひんくんしみれ
嘉手苅の子　いやいちゃが〳〵
呉屋大役　とう〳〵急が〳〵
さり按司加那志棚原の妻子小がらみ取てちゃびたん
矢ぐら　ほをー出来た〳〵（登場）
いちゃるはたらきにからめやい来ちゃが
呉屋大役　さり按司加奈志島々ゆみぐて様々にさがち行
き方ん知らんさししまて居たん中城伊舎堂たゆい島
やとて、かくれや居んち知らしびぬりーぱ直ちにふみ
いやいからみ取てちゃーぴたん
矢ぐら　やぁ棚原の妻子みすく聞とみりうがが按司主徒
津堅田の按司や肝暗さおこり者やとて生かておちし
まん討ちはたてあしがやあ嘉手苅の子悪按司の種や
生きておちしまん。急ぎ引立て殺ち来ようり
嘉手苅の子　拝がんちゆびて、さあ〳〵立ちゃうり〳〵
矢ぐら　やあ、嘉手苅の子急じあぬわらびもどち来やうり
嘉手苅の子　拝がんつめやびて
矢ぐら　なる〳〵の目まゆ口色の美さ殺すしや惜さあもの
やー、乙樽仕合せの袖にいとの縁結で夢の間の浮世楽
ゆすらな
乙樽　女身のなれや夫二人持ちゆみ急ぎ引立て殺ちたぼり
矢ぐら　いらん義理立て産子もろ共に殺されてからや棚原
の後や残る者うらんとーとーちくぢくと後の事ゆかん
げーてみより
乙樽　玉やくだきてん光ある習い、竹や焼きるとん節や
失なわん女身ゆやてん義理や失いみ片時ん急じ殺た
ぼーり

虎千代　やあ母親よ、永へて居てん苦ちささるゆいか按司主位前とめて急ぢぼしやあむぬ

矢ぐら　くちさかしわらび、言ゆる事の憎さ、急ぢ引立てて殺ちちよりーやあ〳〵呉屋大役あのわらび急ぢ引ちむどち来よーり

呉屋大役　拝んちゅびやびて

矢ぐら　やあ玉の乙樽、虎千代が命、助きやいきいゆらば、頼んで我が願になりてきいり

乙樽　虎千代が命、御助けのありば義理ん失やい御言葉になりら

矢ぐら　おうしたい〳〵、神の御助けか今日のほこらしゃや、天の白雲に登る心地、とう〳〵縄よとち許し

乙樽　あゝとう〳〵

乙樽　願ごとのあものおんかちたぼうり、恥がさや我身の親子押しちりて只足に任ちあわて様、行ぢてあの村に忍びこの村にかくり、にわといの暮しやる故がやゆら、我身気失いわ肝ちいぢいとなやい、又行きば按司主位前お側、朝夕なりすみて居らんてんすむぬおとるさゆあむぬ、親ぐみさあもの、医者たぬで薬のみぼしやよあものうの内やたんで許ちたぼり

矢ぐら　持病どんやりばうかっとしやしまん、用心の事に手じけしるな

乙樽　御慈悲お情の按司の御言葉やなりて我袖に露で落る

矢ぐら　やあ嘉手苅の子あのわらびちりて金武寺に行ちやい御願事、上ぎて座主の弟子なさい十二、三なりば頭とい下ち染々の衣きしてたぼうりてみしく細々と頼で来やうり

虎千代　母親のお側朝夕なりそめて知らん山寺にいちゃし行ちゃびいが

乙樽　玉黄金産子命ぬたみでむものかなしふわかりんしらなゆみ

虎千代　やあ母親よ、哀りこの二人が今日のうち苦しさ天の運やりば永らへていもり、廻りあう節又ん拝ま

嘉手苅の子　やあ思子ちわまとる事や思切りゆいみそうり、遠く山路や急がにばしまんとう〳〵御立ちゆみそうり

乙樽　やあ嘉手苅の子虎千代が事や今わらびでものたんでかながなと連りてたぼうり

嘉手苅の子　いちぐかながなとわんゆかんすむぬ打連の事やたいてみそうな

乙樽　やあ産子命のたみともて思みちやいをしがまことこれまでのわかりと思ば

虎千代　やあ母親よ永へて居もうれ又ん拝がま

―歌〈干瀬節〉

互いに泣ち別て散々になてん
永らいていもり又んうがま

嘉手苅の子　遠く山路や急がねばしまんとうとう御立ちみそうり

矢ぐら　金武の座主しうんが事や座主の内なかいしなさしでもの、いちぐ細ぐと育てらんしゅものとう〳〵内に入りゆ

平良　とんぢたる者や、元棚原の按司の馬の草切りしゆたる平良どやる元ぐ主人の御使に中城伊集村に行ちゅん。ああうなぢやらの前や唯一人や、あみそうらん、矢ぐらの側になりゆ〳〵りんで言ちゃりば玉砕けてん光ある習い竹や焼るとん節や失なわん女身よやてん義理失なゆみ片時ん急じ殺し〳〵で言ちゃりばをなぢゃぬめや目まゆ黒々としゅらさあれば矢ぐらやちゃんと打ちふりて虎千代が命助きやい呉らば頼んで我願になりて呉いゆんで云ちゃりばうなぢゃら御思子のためともて虎千代が命御助けのありば義理んうしなやいう言葉になりゆんで御返事みそうちゃりば矢ぐらぬバカ男やうっさふくらさ、ほーほーしたい〳〵神のう助きか今日のふくらしや天の白雲に昇る心地。んで、言ちゃりばをなざらや産子のためと思てうことばになりみそうちん、う肝やあねあみそうらん持病のうんのうんち色々廻ちゃりば矢ぐらぬバカ男やほんのんで思て、医者の数々薬ぬだんだん上ぎみそうちんだじんとうぬ病気やあみそうらんしにちいて薬の印やすっとんねえらん、らんらんの様御なりみそうち色色ふり物云いし頭みだりて舞やていやしみそうちゃりば矢ぐらや明きてん暮てん酒と色好で、ああ無情や産子虎千代や金武寺にやらち虎にちばさ、さったしとーいぬもんやがてぬぎしまて打ちけーさいーるちむう、我ったあがん胸冷るやる、はい〳〵とっちきんねらん。うひな大道側居ちうかと物云ちかんぬうな御使いゆだんしやしまん、急が〳〵はい〳〵言うる内する内伊集村ん走ちゃい御使い次第内に出ぢ御んぬさら。

〈乙樽登場〉

―歌〈散山ぶし〉

夢や見ちうづりやしまうんあてる
真夜中に一人忍んで行ちゅる

乙樽　哀れ知りみそうり今出る我身や、棚原の按司の側居たる女、引ちぐりさ涙くひちみて玉黄金産子金武寺にやらち見ぶさうらちさ我んとめて来ちゅんで道ゆ踏迷て、山盗いちゃて殺さりてやり夢や見ちうづで我肝ちいちいとあわて様出ぢて真夜中の星のちら道ゆたゆで知らん山路行ちゅん

―歌〈子持ぶし〉

①玉黄金産子この世にが居ゆら
夢の告げ知らし誠どやりば
②あきよこの母や露の日ゆたゆて
一人生き残ていちやがすゆら

乙樽　なまに夜まんぐになやい又やりば行く先や見らん村にかからこの宿の内に物たのみさびら

祖母　たるがやいみせら

乙樽　我身や首里方の者やいぴしが金武に思事のあとて行ちゃぴしがやみの夜の暗さ行く先ん見らんたんでう情きに宿がらちたぽり

祖母　首里営国なれぬくがと道いもち足だるさみせらうくたんであいみせら内に入りみそうちり休みよみそり、田舎山国やものすそんあやぴものあねらわんともてう休みよみしよーり

上地モーヤー　くりやヤミスク山に住む上地モーヤーやあ越来どんや

越来どん　何事か〳〵

上地モーヤー　今日の夜首里方の女糸着や赤ふたら打重ね〳〵着登川金力段大主宿に泊てんてい聞ちゃん急じ行ちはじとろう〳〵

越来どん　仕合せどやゆる急が〳〵

上地モーヤー・越来どん　やあ女衣てるまじりはじり〳〵

乙樽　盗人ややてん肝のあてたぽり下着までん取ぱ赤裸なゆみ

越来どん　いや、ぬーくぃうぱい取り赤裸なゆしぬ恥かさが

乙樽　女てる物の赤裸ならりゆみ、恨みしやこの身殺ちたぽれ

上地モーヤー・越来どん　いや死ぬし希望か（殺す）衣裳はじ取たい急が〳〵

祖母　お座敷に高く物音のあしが御主前ん起きみそうち出ぢゆなぴら

御主前　夜辺の真中に宿借たる女いちゃし来やる事が急ぢ語り

乙樽　かんなたる我身や棚原ぬ按司ぬお側なれとゆたる乙樽どやゆる二人按司主位や矢ぐらのひやにたばからり産子虎千代や金武寺にやらさりて見ぶさうらちらさしじららんてやり行ちゅんてこの宿にとまやぴて山盗いちゃて命や失い哀れ虎千代がわんとめて来りぱ山盗殺ち矢ぐらのひや打ちはたち按司主位と我身の死出か山路に道明てくれよ胸開けてくれてやり母親の遺言ていの道ぱたに深くたゆいはからやいうくてたぽうり、この御国にへや後世までん胸に思いつめて行ちゅん思とめて行ちゅん

御主前　やあ、按司ぢゃなし〳〵お水お薬ん気ぱてうさがとて産子虎千代んかいいちへゆみそうり、やあ按司ぢゃなしあきよ按司ぢゃなし肝ふりていんめんああ按司じゃなし御遺言のごと金武の道ぱたにたゆりはかちやいほうむやい上ぎやぴら

虎千代　我身や金武寺の御育ての虎千代母ゆ拝がみぽしやしどうららんあてる座主に四、五日、暇いて今日や一日拝がまてい出ぢて行ちゅん。

―歌〈長金武ぶし〉

我身や金武寺の御育の虎千代
金武の寺いちて向て行く先や

伊芸屋嘉の浜の送る浜波に
我衣袖濡らち七日浜歩で
虎千代　のがし浜千鳥声々となちゅる聞きは母親の面かげのまさて
―歌〈長金武ぶし〉
石川走川や一人打ち渡てぃ
夏のしらしちゃや流れたゆてぃ
栄野比川崎ぬ松下にしだでぃ
登川の村や今どう着ちゃる
虎千代　この道のそばに人うくてあしが、無情やいちゃる事が、いちゃしがな今日やこの墓の前に知らし母親の面かげのまさして行ちん行からん立ちん立ゝりらん
御主前　玉の按司じゃなし哀れなき後花ゆ祭ちやびら水ゆ祀やらび
虎千代　御主前が祀て泣く人やたるがかなしさやたんで語てたぼり
御主前　哀りさみ童聞きぷさゆありば近く寄り細く語て聞かさをっての夜三十頃の女ぐ我宿に泊またしが山盗ののしざね何時の耳しぢに聞きちて来、夜の真夜中に宿に踏み入やいた衣装はじ取やい深く傷付て細々ゆ聞かば棚原の女じゅらゆ、金武の寺いめるお産子虎千代がにうい行いしゅみせんてくのわざはいをいしじゃち夜明き白露となり果てゆみそうち
虎千代　あきよ母親や、やあ母親や、我身や虎千代るやゆる
―歌〈東江節（アーキー）〉
あきよ母親よ
御主前　金武の寺いめる産子でやびる今る産子拝がまびる
虎千代　あきよとまいて来るめちてん母ん拝がまらん我身ん母親と共にならな
御主前　はぁくしばし待ちみそうれ親がなし御遺言よ我身にあやびむぬ山盗人殺ち矢ぐらのひやん討果ち、二人按司の死出の山路に道開てくれよ胸明てくれてやりいう言葉のあむぬ御遺言のあやびむぬ親がなし御遺言告じゅあぎやびら
虎千代　義理人ことはらん御主前が言葉敵討ちゆる事に計やいたぼうり
御主前　とうくく今日や我が宿にうんちけ拝がまびら、あれに御座みそり盗わたくらさ又ん聞きちきて来るはじでむぬこの大刀ようさぎらば身振り立ちみそうち打ち殺ちしそうり身腰立てさびら
上地モーヤー　越来どん
これややみすく山に住む上地モーヤーや越来どんや
越来どん　何事かくく
上地モーヤー　首里方わらび糸衣や打ち重ねく着て登川金が段御大主宿に泊て居んて聞つん急ち出ちはじ取ろうや
越来どん　やあはじ取ろうやしあわしどやゆる急がく

虎千代　親の敵討ちゆん知らんあたみ
山盗　いや、しいさんな童（戦う、虎千代勝つ）
祖母　手早く肝早く思子程あやびいん
虎千代　御主前とハーメーが故に敵ん討ちしまち、ふくらしやとあしが津堅田の産子山戸ど伊集村にかくり敵討ちゆるたくみ御準備の事よしちいめんてやり風のもとたゆて知らべのありばう間から直に行かんしゅむる御主前とハーメーに暇さびら
御主前　御願事定め御希望ゆ定めいひん片時ん御急ぎゆみそうり
虎千代　やあ御主前この御恩でしや肝に思染めて命永へて待ちやいいもうり
御主前　永へて居れば又ん拝む定め明日ん日ん知らん露の身どやしが御肝いさみとて勝ちいくさ召より肝に願しちよて御待ちさびら
虎千代　立ち別れかねていちまでん名残り命の定めや互いに知らん
御主前　遠道ゆやりば急がにやしまんとう〳〵御立ちゆみしょうり
虎千代　永へていもうれ又ん拝ま
（虎千代御主前と別れる）
―歌〈長伊平屋節〉
永へていもり又ん拝ま（下句）
森川の子　くりや棚原按司の産子守役森川の氏この間や我身ん夜昼ん忍で島々よ廻て―散々になたる群集集めつはむぬぬたぐい押し列てからに与那原にうりてちゃいひょう法のおくれ弓やたちかたな失いぽくのひでん残らじにさとて矢ぐらのひやが城にはいぶて火じみさんともてたばかやいをたし内間の子連れて中城伊集村にちも勇いさで忍で行ちゅん、やあ内間の子油だんしゃしまん急が〳〵
内間の子　御急ぎゅ召しようれ御供さびら
―歌〈口説〉
さても移りば変わり行く
水に木ぬ葉ぬ裏表となりかくなり
この程や
二、編笠深くかおかくち行きぃは程なく我謝安里
浜の千鳥の友呼ぶや
三、聞くにつけてんあわりなり内間嘉手苅打渡て「エイ」忍び〳〵に立ち出て今る伊集村
忍でいちやる
森川の子　このやどの内に案内ゆたのま
門番　たるがやいみせら
森川の子　棚原の按司の産子守役・森川の氏御産子拝まいゆしりやい居ものこのよおんのけてくれよ
門番　まこと産子ぬ守役がやゆら細々の次第拝まさい召しようれ
森川の子　棚原の按司の産子守役・森川の氏、この内や

我身ぬ散々になやい、散々になたる群集集みやいつわ
もののたぐい押し連れてからに与那原にうりーてひよ
う法ぬおくれ弓や大刀かたなやいぱこの秘伝残らじ
にさとち「ほー」矢ぐらのひやが城に立ち登て火じみ
さんともてたばかやい居たし御産子の行くえ聞ちゅ定
めやい内間の子連りてゆしやい居ものこの様おんにゆ
けてたぼり

（山戸、虎千代、森川、内間、門番登場）

虎千代　我身や棚原の一人子虎千代ゆ

山戸　我身や津堅田の産子山戸ゆ、やあ虎千代ゆ、この間
や二人の忍びかくれとて兵法や習て弓やたちかたなや
いぶくぬいほこのびてん残らじに渡ちこの間の思い明
日の日かぎり親の敵仇討たんしゅもの習取る手並ふり
立てて見しら、

虎千代　この間の手並今日るあらはする互に振り立てて手
並見せら

森川・内間　とう〳〵御振り立て召しょうり拝でなぴら
―歌（揚作田節）
忍びかくれとて習れ取たる手並み
敵の首すじに立たなうちゅみ

森川・内間　御振り立て見せし拝でなやぴりば敵討取ゆし
うたげやねらん

山戸・虎千代　やあや、互に肝合わち手くばいぬ事に明日
の明々に城に押し寄して起立たん内にしみかけるやり
ば矢ぐらのひややとかく用心の知らんあわて様出ぢて
戦いどちむい心落ちついて殺ちしてら

総人数　拝んつめやびて
（幕）

山戸・虎千代　敵寄してまん急が〳〵（第七幕）

一同　御急ぎゆめしょうれお供さぴら

森川　さり矢ぐらのひやの城に寄してあやぴしがのぢ討ち
にさぴみみな殺しさぴみ

山戸・虎千代　のぢ討ちにしちや武士の道立たん互に
打名のて戦花咲かさ

森川　やあ矢ぐら津堅田の按司と棚原の御代つぎの御産子
虎千代山戸がうががゆむ首やう望でゆむぬ急ぎ首下て
出様れ〳〵

虎千代　やあ矢ぐら耳の根よ明きて深く聞きとめりうがか
あくゆくや悪としゆ企て二人の按司首位の前のぢ討に
殺ちうき、とめて百生したきやい生きらくよこので悪
ちむてからや今日までの命風の辺のつむぎ嵐吹く花の
落ちる葉の露心なさんしゅむぬ

矢ぐら　ほー命助きたる恩や忘れとて謀叛くわたちゅし
無理やあらに、やあ呉屋大役出ぢてあの童切り殺しち
きゃうれ

呉屋　世界にとよまれる呉屋大役一人二人と戦ゆる我身や
ヌあらん千人万人人掛り〳〵

森川　いや森川やこ間に居ん相手する者や居らに〳〵

虎千代　やあ森川しばし待てこのやからんどや我親討取たしややあ我身や虎千代どやゆる出ぢて我が刃受けて見やうれ

矢ぐら　あゝ口惜しや残念供のつわもののまぢり討ゆ果さりて運のきわまりや果て戦知らに

森川　さり産子いちゃし犬猫の虎の前に居ゆが急ぢ踏入やいみな殺ししやぴら

（追いかけ幕内に入る）

虎千代　残たる者や居らに〳〵

森川　妻子ぐわかたくじうち残らじに殺ち味方にや一人んけがんねいぴらん

山戸・虎千代　悪企むやから見りば休まらんとてん一刀に殺ちしてら

森川　ほうーしばし待ち召しょうれこのやからんざの悪企む罪や一刀にしちゃ罪残さあむぬ二所の御ちかぢに出ち散々にちざじ御祭ゆさびら

山戸・虎千代　討取たる今日のほこらしやや死じ二所ん嬉しやみしえら、今日のほこらしや物にたとらん押し列れて互に踊て戻ら

森川　召るごと踊て御供さびら

―歌〈立雲ぶし〉

かたち討取たる今日ほこらしや

死しじ二所ん嬉りしやみせら

(2)「伊佐浜の恨み」（姉妹敵討）

全体が八段から構成されている。

第一段　謝名の大主の出羽。伊佐浜で秋の十三夜の宴をはる。

第二段　亀松、乙鶴姉妹の出羽。潮汲みに伊佐浜へ行き、その最中、謝名に呼ばれて、酒の酌をし、踊りを披露する。

第三段　姉妹の父、大山下庫裡（したごおり）が、謝名に呼び出され、申し出を断って殺される。

第四段　亀松、乙鶴姉妹の出羽、道行。今帰仁へ武芸修行へ旅立つ。

第五段　姉妹が今帰仁城で湧川按司に事情を話し、武芸の特訓を懇願する。

第六段　平敷大主、亀松・乙鶴姉妹の道行。湧川按司は武芸を習得した姉妹に平敷大主を伴につけ、船で伊佐浜村へ旅立たせる。一方、平敷大主は、謝名の上司の神山按司に会い謝名の悪事を語る。神山は事実を知り立ち合いさせことを約束する。

第七段　間の物（マルムン）崎間と上原が出る。立ち合いの場所の掃除をしながら亀松・乙鶴姉妹の美貌を語る。

第八段　姉妹と謝名の立ち合い。無事父の仇を討つ。

――脚本「伊佐浜の恨み」――

大主　キユヤナーニ立ーツル、
　　八月ヌ十五夜
　　リーチヤヨ、ウーシーチーリーテ
　　ナーガミヤーイアシバ

供連　ウガドヤ、ビンサリ

（一廻りして元の位置に戻る）

大主　マクト名ーニ、立ーツル
　　伊佐浜ヌチーシチ
　　イザイ火ヌ、光ナードウヌチユーラサ

（そこで椅子に座わる）

大主　ウリウリサクモテ

供連　ウガドヤビンサリ

大主　サテム、サテーアマウトーテ
　　塩クムル女
　　イースジ呼ビー、ユーシティ
　　サークユムタスルグトシー

供連　ウガドヤビンサリ
　　二人ヌ女ユーチキヨー
　　アージザナーシ、ウイーシ
　　イスジ立寄イサークユ
　　ムチルゴトシ
　　ウガドヤビンサリ

女　（女は大主前になる）

大主　ウリウリサクモチ

（酒をついで上げる）

女　ウガドヤビンサリ

大主　アリヤ梅ヌ花、クリヤ櫻花
　　ムーツル杯ーヌ、ニユイヌスーラサ
　　二人ヤ兄弟ルヤールーヰ
　　又友達ルヤールヰ

女　二人ヤ兄弟ヤイビール
　　アーヂザーナーシーメータリ

大主　二人ヤ、シーグニ立戻ーテー
　　男ヌ親ーソーウテクー

女　ウガドヤ、ビンサリ、デーチヤヨ
　　ウートム、ウーガテクーヤー

（女二人幕内に入り男の親が出て来る）

父親　ウユバーシーニー、ナートウシー
　　ヌーヌ御用ガヤミセーラアジ

大主　イヤ女小ユワーミーヌー
　　側ニウチヨーティチカセ

父親　ナマヌ、イークトバーヤ
　　ニヘエール、ワンネーヤイビシガ
　　二人ヤクーサル、ウチウトウティ
　　縁組シーマチ、ウヤビン
　　ウーリヤ、チヤーシン
　　ナー、ヤビランサイ

大主　ヌンディ、云ウガースーナータ
　　ワンミヌ云ル、言葉
　　聞ン、マーターヤーリーバ
　　クルチ、トウラスー、シーガー
父親　ヌンディ、イーミーセーガ、アジザナシ
　　無理ナ事ミーセーナ
　　タートイ、クマーゥトーティ
　　殺サリーヤステン、
　　ウーリヤ、チヤーシンナイビランサリ
大主　イルクトウヌーニークーサー
　　タダ許チイシマン
　　取テン一刀ーニクールチシーティーラ
（大主が父親を切り立ち上がる）
大主　スシンカーヨー、クマウティヤ
　　心　持ワッサクトウ
　　デーチヤヨ宿ウ戻テ
　　祝アーシバ
（大主、供連が幕に入った後切幕をする）
女　ターリヤ、キサカライヂミソテー
　　ナマディ御戻ミソランシガ
　　デイチヤヨー、ウーシーチーリーティ、
　　ウートムウガデクーヤ
（切幕前を一廻りして切幕を開けて父親を発見する）
女　アキヨー親ガナシー、クヌカターチーナーチャル、
　　山田大主ヌカータチ
　　ウーチトウラーナ
（切幕して父親、娘幕内に入いる）
女　ユシリヤーイチャーピーラ
家主　惟ガーヤーイーミーセラ
　　アーキヨタトウクルヌ
　　アヒグワ、メータイーチゥタ
　　エーサイ里主出ヂミソレ
（婿二人幕より出る）
婿　ヌーガ、マーヌ、ターヤミセガ
　　アマカラ、イチュターイヂィミソリー
家主　始ミチデービル、ハキサミヨー
婿　女ミーヌナレーヌ、恥ンー
女　フーリーシィィテーテ
　　ユーシリヤイチョーシド兄弟
　　ウシ連テ伊佐浜ーニ
　　ウリーテー塩クマイ戻ルー
　　道シガラ、山田大主ヌ
　　ウスバーナーリンヂテ、ウヌクト
　　断ターールターミニ、ターリー
婿　ヤクルサリーユミソーチー
　　サテムサーテム、チクーシヨ
　　ユルチー許ールーサーラン
　　クーヌ兄弟ウシ揃テー

シート親ヌカターチ
切リクルーテー捨テラ
女　シバシ待ミソーリ
アヌヤーカーラーンヂヤヤー
此ヌ兄弟ニ武勇ユシミソチ、
父親ヌカタチウタチ、クゥミソーリ
婿　内ニ入リ、互ニ、クマグーマートーカタラ

〈三線テンヨ節〉

主小　エーヒヤパチ小
ハーメ　ヌガスー小
主小　ソーヂヤアサウティリッパニシーリーリナマネー
ケーユクヤイハナシーグワンデーディキラサヤー
ハーメ　サッテムスーグワガイルグトウニーリーリナマ
ネーケーユクヤイハナシーグワンデーディキラサ
ナーエーヒヤースーグゥヨースーグゥワッター
トンチヌサトヌシトウアヒダゥーメーターヒルマ
シモンユーヌミーヌアキドンセーナギナタカータ
ナムシチメンソチーチリチリバラバラタタカユセ
ハーメ　ワッターガーヤーヒルマサヌタダウトルーサル
アーユール
主小　ウヌナリユチヤーヨーパチグゥーアヒグゥメータ
ウヤガナシヌウファヂナーカイクルサリティー
カータチゥーチュルタミナカイルーメーニチチー
クスンディンドー
ハーメ　イッペーコーコヌウミングワヤサムレングワヤチ
ガユンヤー
主小　アリアリアマカラメンセーシガ
合同・婿・女　カタチウチトタルチューヌフクラシヤウシ
チリテタゲニウドテムドラー

屋慶名クファディーサ節

◎婿二人、女二人、揃って幕に入る。そして、婿も女もタヌキ掛ナギナタを持って戦いの練習をする。その時ウスメー、ハーメーも同日出て戦いのまねをする。練習を終えたら一たん幕に全員入る。

◎次に、大主（一番大主）と女（姉）と幕より出て入る、次の二番大主と女（妹）も同様その後にウスメーとハーメーが後を追うて幕に入る。

◎その後、一番大主と女（姉）が戦う。次に二番大主と女（妹）が戦う、その時にウスメー、ハーメーは幕近くでうろうろする。戦いが済んで、四名幕前に並んだ後にカタキを取った踊りを始める。踊りが終ったら男女（大主、女姉）（二番大主、女妹）並んで全幕の終りウスメー、ハーメーは最後に踊って入る

8、七福神

戦前から演じられていた「七福神」の台本が戦争で焼失したため、しばらくの間、上演ができなかったが、昭和五

十二年に川田と同じ流派であるとされた、名護市辺野古の保存会から指導を受けた。教えを受けたのは比嘉博昭、新城哲夫、金城幸昭等であった。早速後輩たちを指導し、その年の豊年祭から公演した。その後、川田と謝名城の七福神の師匠が同一人物と知り、中村正一、新城哲夫の二人が謝名城の七福神の指導を受け、踊りの一部手直しをして現在に継承されている。

なお、面は名護市城の七福神を参考するとともに、小道具は金城幸昭が作成した。

●紹介名七名

ワリワリヤ、トーアザ、青年、ヤヤビシガアーザーヌ、シンブタ、カタガキテ、ウカミヌトイムチサルユイに、シチフクオカミヌチユカラクヌアザウマムイミセルゲトアテ、ワリワリヤ、スリウンケーに

東西南北、ミナスルテ、イーチワカサンチチミソリスリテメンセル七福ヌ、ウカミヌ、ウマムイウンヌキラ

●センスル節

一、ビサモンテン

イチバンハジミに、イチメンセル、ビサモンサマヌウマムイヤ、武運長久、ヤナカジン、ヌキテクトサビランゲトに

二、エビス

マタウヌナラビにイチメンセル、エビスサマヌウマムイヤツクイムヅクイ、マンサクに、ヌーグトワスクンネングトにマムテキミセルフクヌカミウマムイユーウキテフクイミーソリー

三、タイコク

マタラヌナラビにイチメンセル、タイコクサマヌラマムイヤラムクト、スルクト、カナワラチ、タカラヤクラにチンアマテ

四、ベンテン

ナマヤマナカに、イチメンセル、ベンテンサマヌうマムイヤタビヌ、オーフク、ナダヤシク、カヂグトイーサイネングトにマムテキミセルカミダヤビル

五、ホテイ

マタラヌナラビにイチメンセル、ホテイサマヌ、ウマムイヤグククマンサク、トイイリン、ウホークアラスル、カミダヤビル

六、ズロージン

マタウヌナラビにイチメンセル、ズロージーンヌウマムイヤイヌチガンジュウヌチナゲリ、マムテキミセルカミダヤビル

七、フクロクズー

イチバンハジシにイチメンセル、フクロクズーヌウマムイヤフーチ、チヨーミラタビミソチ、シソンハンジヨシミセン

八、クリカラ、ウカミヌウドミセクト、グスーヨシジカニウミカキテラマムイユウキテーフクイイミソリ

●亀甲節

一、（ビサモンテン）
上　武運何時マデン、チヂチ、ヤナカヂン
下　シリジキテムテイ、サカルウリシサヤ

二、（エビス）
上　ウムゲトヤカナテタカラ、タカラグラミチテ
下　ユルクビヌイユヤフカにフカにアマチ

三、（タイコク）屋ケ名クフワデーサ節
上　ジンカにンアマタヒトにアガミラリ
下　フキイクイルチツルハイヨアサンユサン

四、（ベンテン）ゴエン節
上　ウリシグトビケイ、トケイナダヤシク
下　タダイジヤイチチヤイ、イトヌイカラ

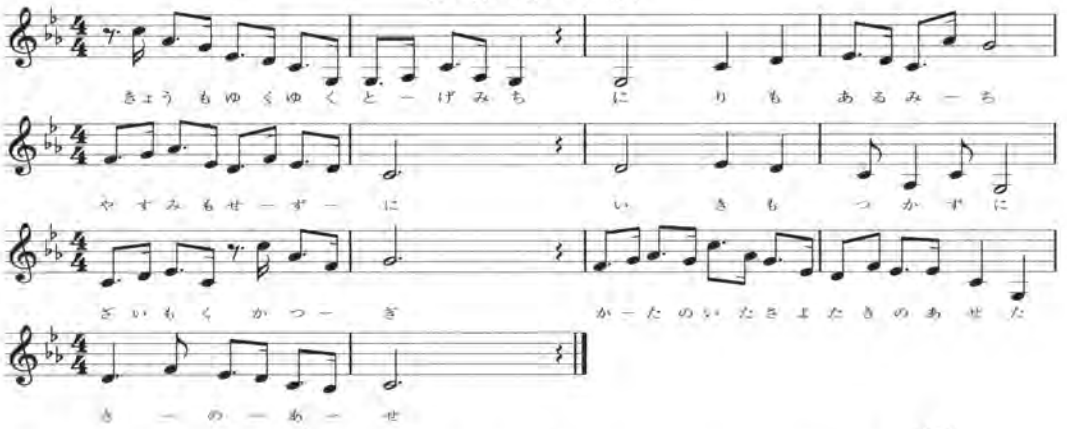
五、（ホテイ）チリタルメー節
上　ゲククマンサクにトイイリウホーク
下　クラにチンミチテマジンサビラ

六、（ズロージン）エサ節
上　ウイヌウリヤマにタズネチキテ
下　カワルクトネサミチトシマデン

七、（フクロクズ）スーライ節
上　ミブンヂンカにンヒトにマサリヤイ
下　シスンウチスルテアシブウリサ

八、（イリフワ）サーサー節

北村隊の歌



9、その他

(1) 北村隊の歌

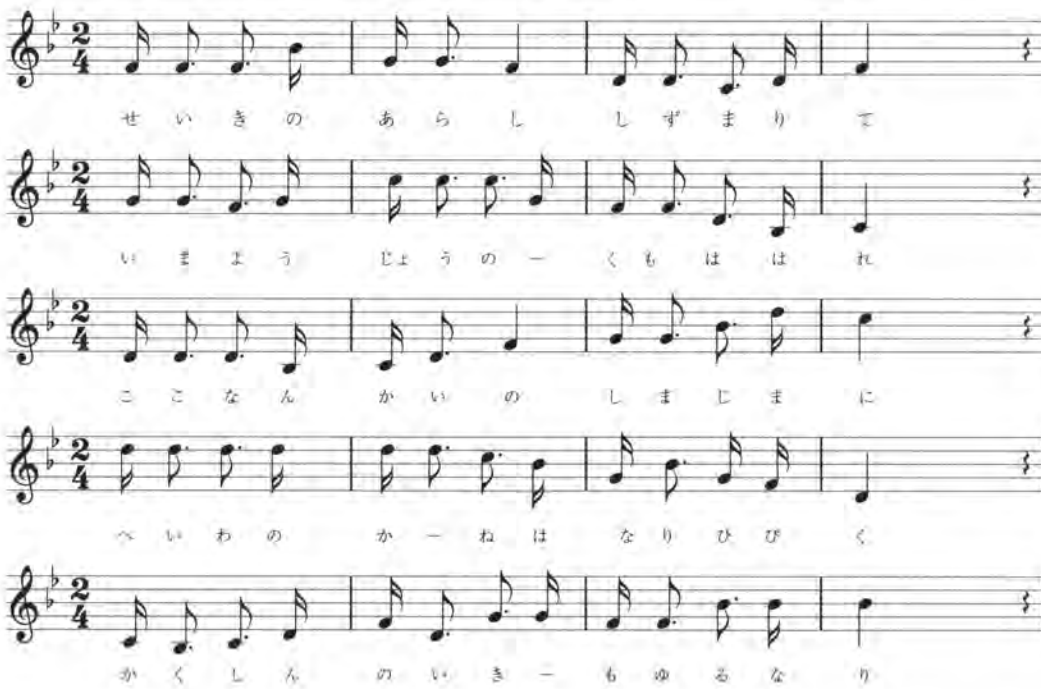
作詞・作曲　北村隊（武部隊の小隊）
唄　平良　恵美、中村サネ
採譜　上間るみ子（東中学校教諭）

一
今日も行く行く峠道
二里もある道　休みもせずに
息もつかずに材木担ぎ
肩の痛さよ滝の汗　滝の汗

二
落ち葉散る散る山合いの
歩む足どり　とぼとぼ重く
眼孔は落ちて眼はくらみ
やせる思いの帰り道
帰り道

三
帰ら今夜も千切れか
見える糧まつ　千切ればかり
遠い満州の豚肉恋し
やせて帰るはいつの日ぞ
いつの日ぞ

川田青年会歌



(2) 川田青年会歌（昭和二十二年）

作詞・作曲　玉城和信（青年会長）
採　　譜　平良啓子

一
世紀の嵐静まりて　今洋上の雲は晴れ
ここ南海の島々に　平和の鐘は鳴りひびく
革新の意気もゆるなり

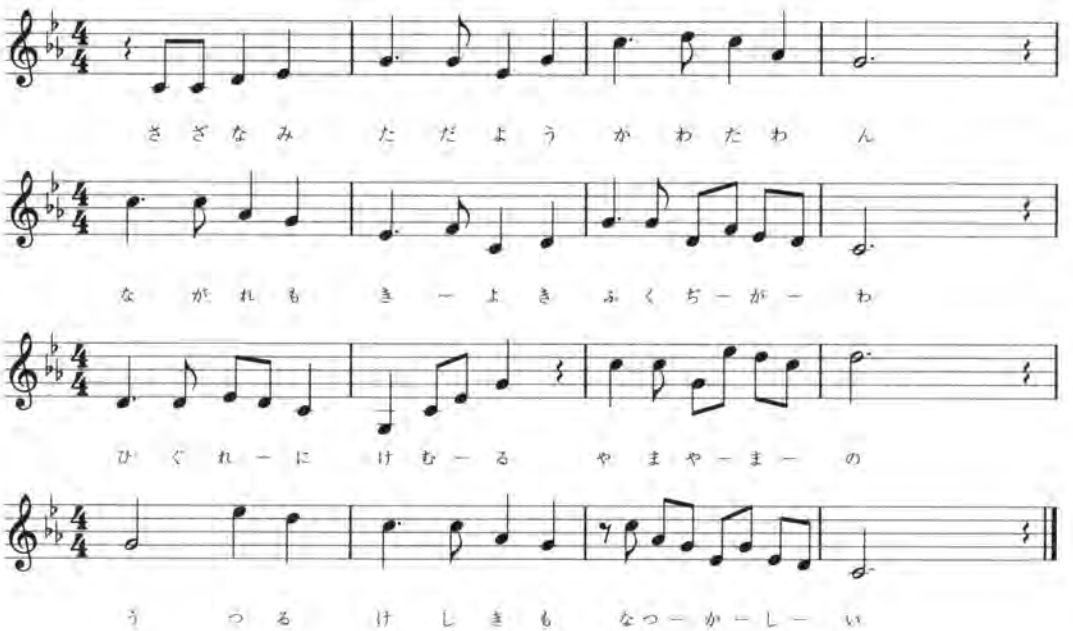
二
焦土と化せし我が郷土　今再建の時なるぞ
若き男女の力こそ　新沖縄のもとになる
山原青年いざ立たん

三
黒潮おどる岩頭に　集う百余の魂が
朝の星に夕月に　尊き鍬を振るう時
やがて黄金の波寄する

四
山青くして水清く　これぞ我等の誇りなる
心に抱く大理想　鉄の腕をきたえつつ
強く進まん青年会

五
進む理想の道清く　いざや築かん文化村
世界の果ての果てまでも　その名は高く鳴りひびき
川田青年いざ行かん

くめ隊の歌



(3) くめ隊の歌

作詞・作曲　久米隊（武部隊の小隊）
唄　儀間佐枝・平良恵美・中村サネ
採譜　上間るみ子（東中学校教諭）

一
さざ波ただよう　川田湾
流れも清き　福地川
日暮れに煙る　山々の
映る景色も　なつかしい

二
行く手ははるかな　水平線
さらば川田よ　沖縄よ
あつい情けの　数々は
永遠に忘れじ　夢の間も

三
はるか聞こえる　歌声は
タンニン作りの　乙女達
化粧のけはい　ないけれど
深山に花咲く　百合の花

(4) 白黒節

作詞　仲本亀一
作曲　仲村渠清吉
唄　金城実

一　たるがはじみたが　白黒ぬ戦さ
　静か山原に　嵐吹ちゆさ
二　嵐白黒ぬ　吹ちあらす村や
　一人殺し　はてやねさみ
三　口ぶしぬ言葉　まるあがみすしや
　誠ある神ぬ　たたれくゆさ
四　空飛るガンや　互げにうじにうい
　誠人間ぬ　手本さだみ
五　嵐白黒や　季節風と流ち
　互げに肝合ち　栄て行かな

(5) 川田の昔の子守歌

一九二九（昭和四）年頃

ホリホリホリ　〈
泣かんせー　泣かんせー　長魚（ナガイユ）かますんどー
泣くんせー　泣くんせー　短魚（ミンカイユ）かますんどー
ホリホリホリ　〈

七、子供の遊び

明治、大正、昭和初期の頃は家庭での労働や手伝いに追われ、子供とはいえ遊ぶ時間はさほどなかった。畑仕事、田の仕事、薪取り、山羊、牛や馬の草刈りなどの野良仕事。その他、庭掃除、ランプ磨き、水汲み、薪割りで毎日が多忙で遊ぶ時間はなかった。その中で、仕事を終え野や山へ、或いは、川や海でエビをとったり、釣りをしたり、また、泳いだりすることが最高の楽しみであった。

その頃の遊びは全県的に、大同小異であったと思う。沖縄県小学校体育研究会編著、沖縄県につたわる「こどもの遊び」からの引用をもとに記述してみた。

●用具を使わないでの遊び（内容の概略は次頁以降に記述）
(1) かげふみ　(2) ねずみとねこ　(3) 馬とび
(4) ケンケンずもう　(5) 花いちもんめ

●用具や玩具を使っての遊び（内容の概略は次頁以降に記述）
(1) かんけり　(2) パッチー　(3) こま遊び　(4) 竹馬
(5) ゴールマーセー　(6) カジマヤー（ハジマヤー）
(7) 水でっぽう　(8) 輪ゴム取り　(9) 竹とんぼ
(10) まりつき遊び　(11) お手玉遊び

●その他
(1) 頭（チブル）サーレー　(2) ビー玉遊び（センチダマ）
(3) クギタチエー　(4) チカユシレー　(5) ロクボク
(6) 三輪車遊び　(7) トゥイオーラセー（闘鶏）

1、用具を使わないでの遊び

(1)かげふみ

【人数】三～六人ぐらい。

①ジャンケンで、おにをひとり決めます。

②合図で、ほかの人は、おににかげをふまれないようににげます。おにはほかの人を追いかけて、その人のかげをふみます。

③おににかげをふまれた人はその場にすわって、おにが交代するまで待ちます。

④全員がおににかげをふまれたら終わりです。ジャンケンをして新しいおにを決め、また、始めます。

(2)ねずみとねこ

【人数】二十～四十人ぐらい。

①ジャンケンで、ねずみとねこの役をひとりずつ決めます。

②ほかの人は手をつないで、円をつくります。ねずみは円の中に入り、ねこは円の外に出ます。

③ゲームを始める合図で、ねずみはにげ、ねこはねずみを追いかけます。

④ほかの人は、ねずみはにげやすいように、ねこは追いかけにくいように、つないだ手を上げたり、下げたりします。

⑤ねずみがつかまったら終わりです。また、役を決め直して遊びます。

(3)馬とび

【人数】八～十六人ぐらい。

①ジャンケンで、二チームに分かれます。馬になるチームは、前の人の足の間に頭を入れて、つながります。

②馬に乗るチームは、ひとりずつとび乗ります。このとき、ひとりでも馬から落ちたら、チームを交代します。

③馬になるチームは、重さでつぶれたり切れたりしたら、馬を続けます。

④全員が乗ったら、馬は体をゆすって、上の人を落とします。もし、上の人が落ちたら、チームを交代します。だれ

も落ちなかったら、ジャンケンをして、負けたチームが馬になります。

(4) **ケンケンずもう**

【人数】ふたり以上。

①片足ケンケンで行います。片足ケンケンは、上げた足と同じほうの手で足首をにぎって行います。

②相手に体当たりしたり、当たるとみせかけて急によけたりして、相手のバランスをくずします。このとき、あいている手を使ってはいけません。

③足首をにぎっている手をはなしたり、両足をついたり、たおれたりしたら負けです。

(5) **花いちもんめ**

【人数】六～十二人ぐらい。

①ふたつの組に分かれ横に手をつないで向き合います。

②ジャンケンで勝った組からかわるがわる歌います。歌うときは前に進んで軽く足をけり、相手の組が歌うときには、後ろに下がります。

③「ほしい」と言われた人どうしが前に出て、引っぱり合いをします。負けた人は、相手の組に入ります。

④次は、勝った人の組から始め、片方の組がひとりもいなくなったら終わりです。

2、用具や玩具を使っての遊び

(1) **かんけり**

【人数】五～十人ぐらい。

①ジャンケンで、おにを決めます。

②ひとりがかんを遠くにけって、みんなはかくれます。

③おにはかんを拾ってもとにもどし、みんなをさがしに行きます。

④おにはかくれた人を見つけたら「○○さん見つけた」と大声で言って、かんをふみます。見つかった人はアウトになり、かんの所に立って助けを待ちます。このときに、名前を呼ばれてもおにがかんをふむよりも早くかんをけったら、セーフです。

⑤だれかがおにのすきをみてかんをけったら、おには三からやりなおします。アウトになった人も、また、かくれることができます。

⑥全員が見つかったら、最初に見つかった人がおにになります。

○かんをけるかわりに投げて行う遊び方もあります。

(2)**パッチー**

【人数】二～四人ぐらい。

①パッチーを何枚ずつ出し合うかを決め、地面にパッチーを置きます。

②ジャンケンで順番を決め、勝った人から順に相手のパッチーを裏返すように、自分のパッチーをたたきつけます。裏返しにしたパッチーは、自分のものになります。

③自分のパッチーが全部なくなったら、自分のもっているパッチーの中でいちばん裏返しにされにくいもので、勝負します。そのパッチーが裏返しにされたら負けになります。

【パッチーがもらえるとき】

○相手のパッチーを裏返しにしたとき。

○相手のパッチーをすくったらもらえるようにしてもよい。

(3)**こま遊び**

【人数】四～十人ぐらい

①ジャンケンでおにを決めます。

②こまを回して手のひらに乗せます。おにでない人はにげ、おには追いかけます。

③こまが回っている間は、自由に動くことができますが、こまが止まったら動くことはできません。すばやくこまを回

して手のひらに乗せてから走ります。

④おにににつかまったらおにを交代し、また、ゲームを続けます。

(4)竹　馬（他の呼び方…木ビサー）

【人数】何人でもよい

いろいろな乗り方で遊びましょう。

(5)ゴールマーセー

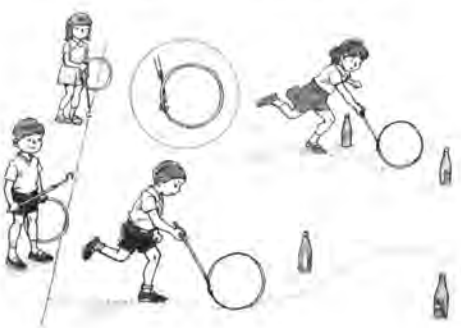
【人数】何人でもよい

【作り方】

①太い針金で、直径五十cmぐらいの輪を作ります。（自転車のリムやおけのたがも利用できます。）

②太い針金でU字型を作り、細い棒にくくりつけて、輪をおす棒を作ります。

○ひとりでも遊べますが、何人かでリレーや、障害物を置いてのジグザグ競争をしても楽しいですね。



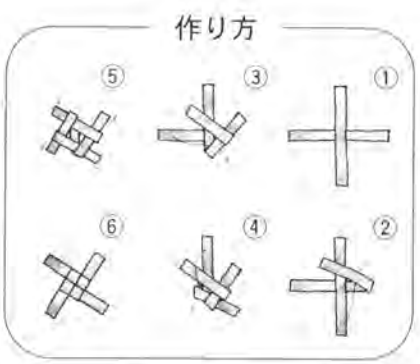
(6)カジマヤー（風車）

【人数】何人でもよい。

①アダンの葉を二枚取ってきます。

②とげを取って、はば一・五cm、長さ二〇cmぐらいの大きさにします。

③二枚の葉を左の絵のようにあみます。中心に穴を



あけて、つまようじやマッチ棒を差しこむとできあがりです。

○風に向かって回して遊びます。

○差しこんだ棒をストローや竹のつつに差しこんで手で持つと、よく回るようになります。

(7) 水でっぽう

【人数】二～三人ぐらい。

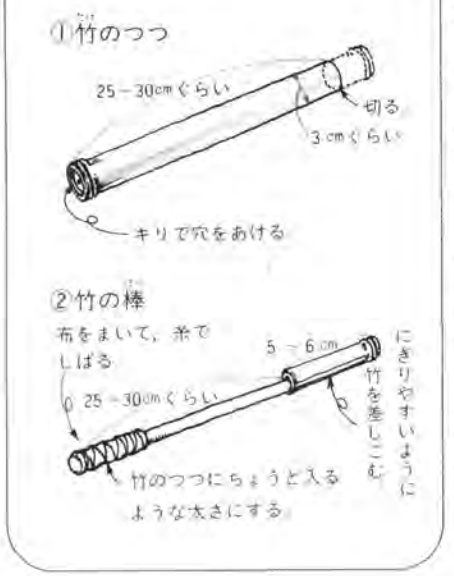
①直径三cmぐらいで、節と節との間が三十cmぐらいの竹を用意し、片方の節を切ります。

②残った節のまん中に、キリで穴をあけます。

③竹のつつに合うように、細い竹の棒に布をまき、糸でしばります。

④竹のつつの中に竹の棒を入れれば、できあがりです。

作り方



○まとを決めて水を飛ばし合ったり、四～五mはなれて水を交差させ合ったりして、遊びましょう。

(8) 竹とんぼ

【人数】何人でもよい。

【作り方】

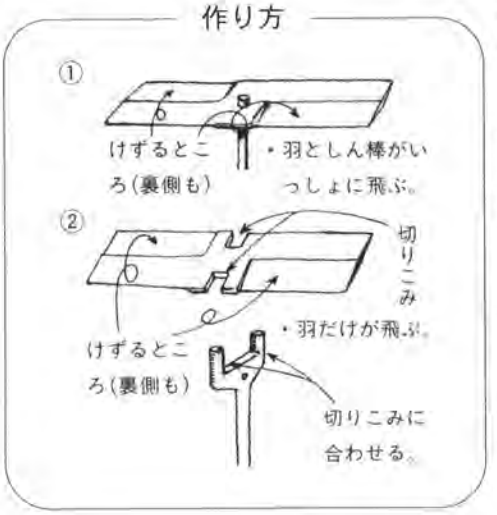
①長さ十～十五cmぐらい、はば二cmぐらいの竹の裏側と表側をプロペラのようにけずります。

②羽の中央に穴をあけ、竹のしん棒をしっかりと差しこみます（図①）。中央に穴をあけるかわりに両側に切りこみを入れ、竹のしん棒もその切りこみに合うようにけずると、ちがう竹とんぼができます。（図②）。

○竹とんぼが一個のとき、ジャンケンで勝った人が飛ばします。地面に落ちる前にほかの人が手やぼうしでとったら、その人と交代です。

○だれが長く飛んでいるか、友達と競争しておもしろいですね。

作り方



(9) 輪ゴム取り

【人数】ふたり以上。

①同じ数ずつ輪ゴムを用意し、ジャンケンで負けた人が、机や台の上に輪ゴムを投げます。

②勝った人は、先に投げた人の輪ゴムに重なるように、輪ゴムを投げます。

③相手の輪ゴムに重なったら、輪ゴムをもらうことができ、また、相手に先に投げさせて、続けてできます。

④重ならなかったら相手の番になり、今度は先に輪ゴムを投げます。

⑤全部の輪ゴムを取った人が、勝ちになります。

(10) まりつき遊び

【人数】二～四人ぐらい。

①歌に合わせて、まりをつきます。

②歌で「さ」がつくたびに、絵のように、いろいろな動作をします。（ちがった動作を決めておいて行っても、楽しくできます。）

③歌のおしまいの「ちょいとかぶせ」で、まりを両足の間をくぐらせてから、体の後ろでとります。

「あんたがた　どこさ　ひごさ
ひごどこさ　くまもとさ
くまもとどこさ　せんばさ
せんば山には
たぬきがおってさ
それをりょう師が
鉄ぽうでうってさ
にてさ　焼いてさ　食ってさ
それを木の葉で
ちょいとかぶせ」

(11) お手玉遊び

【人数】何人でもよい。

①両手に一個ずつお手玉を持ちます。

②右手のお手玉を投げ上げます。

③左手のお手玉を右手に移し、落ちてきたお手玉を左手で受けます。

④一～三をくりかえして続けます。

八、医療関係

一九四六年（昭和二十一年）の頃から復員してきた慶佐次出身の比嘉武男介輔が医療活動を実施していた。戦火ですべてを焼失し、学校近くの民家でしかも衛生設備の十分でない中で献身的に医療活動をした。しかも内科、外科をはじめ医療の全分野の治療に携わった。その当時はマラリアをはじめおおくの伝染病があり昼夜往診で睡眠時間を減らしての勤務であった。一九五〇年（昭和二十五年）診療所を平良区に移して医療活動を続けた。残念なことに一九六〇年（昭和三十五年）八月、オートバイに乗って往診に行く途中、慶佐次と有銘の間で米軍車両との事故に遭い帰らぬ人になった。

一九六一年（昭和三十六年）本部出身の饒波正善介輔が伊江診療所から東村立平良診療所に赴任し診療をはじめた。平良診療所には本土派遣の内藤周次医師も勤務していた。しかし、内藤医師の病死後は饒波介輔が診療所を運営した。

饒波の住まいは川田にあったので昼夜医療相談ができた。比嘉武男と同様医療の全分野に対応し、診療への多大な功労及び健康増進に貢献し、川田区民のみならず東村民から絶大な信望を受けた。また、他方では医療活動の激務にも拘わらず土曜日、日曜日には家族そろって農業にも従事した。

一九六七年（昭和四十二年）に村立の診療所専用の住宅が平良区内に建設され家族共々そこに異動した。異動後も昼夜にわたって医療活動を続けた。しかし、一九六一年以来四十余年東村民の診療に携わってきたが、二〇〇〇年（平成十二年）高齢のため村民に惜しまれながら現役を勇退した。

これまで川田区出身では医者が出てなかったが、二〇〇二年（平成十四年）に玉城幸男の次男千洋の長女（理奈）が医師となって、現在琉球大学附属病院に勤務している。

九、スポーツ関係

1、スポーツで村興し

平和で住みよい村づくりにはスポーツの振興が不可欠である。世界共通のスポーツの祭典オリンピックが国政を掛けて隆盛あることでその意義は理解できる。

本字は戦前からスポーツが盛んであった。大正末期から昭和の初期の指導者に玉城福吉（「旧姓比嘉」玉城幸男の父）がいた。福吉は村内で学校長を務めるかたわら、村青年のスポーツ指導に当った。福吉自身も陸上や相撲に非凡なものをもっていた。その頃の選手にスピードランナーの比嘉参一（宗幸の叔父）がいた。参一は裸足で国頭郡大会の百メートル一位、その年の県大会の百メートルでも見事優勝している。

戦後の琉球政府時代は東村、大宜味村、国頭村の三村は、

辺土名地区と言われていた。一九四八年（昭和二十三年）に全島大会が名護で開催された時、辺土名地区代表選手として比嘉貞男、新城利男、玉城和信、比嘉貞康らが活躍した。大会の最中、辺土名地区の監督玉城幸男と宜野座地区の監督だった嘉陽出身の翁長正雄が懇談の中で、地区の末端である字の対抗（アザスーブ）することを約束した。さっそく翌年の一九四九年の一月一日に川田と嘉陽の両部落対抗の親善陸上競技大会が東小学校グランドで行われ川田が勝利し、翌年は嘉陽で開催され嘉陽が勝った。陸上競技の他、親善野球大会も行われるなど嘉陽部落とはスポーツを通して親善を深めた。しかしながら、選手の派遣や宿泊などいろいろと課題があって中止せざるを得なかった。昭和二十四～二十五年は、まだ戦争の生々しい痕跡があり、衣食住に不自由しているにもかかわらず、村人はスポーツを愛し村興しに勤しんだ。

本字では村陸上競技大会の選考を兼ね、優秀な陸上競技選手の育成とともに親睦や青少年健全育成を趣旨に字を東西に分け各一チーム、郷友会チーム、それに生徒会チームで区民運動会を盛大に行った。選考された選手等は玉城幸男や比嘉貞男の厳しい技術指導並びに競技規則の指導を受け、優秀な選手や適正な判断ができる審判員が育成された。これらの選手が活躍して村陸上競技大会で多年にわたり連続優勝した時期もあった。また、育成された審判員は大会運営で大いに活躍した。

幸男の指導は技術指導の徹底だけでなく、技術を最大限に生かせる基礎体力づくりを主眼においた。そのためには身近にある豊かな砂浜を走ることで足腰をはじめ、全身にバネを付けることが最も重要であると力説した。また、技術や体力を鍛えるとともに環境の変化に動じない強い精神力を育むことや、指導者の助言を素直に受け入れる豊かな人間性を持ち合わせてなければ一流選手に成長することは難しいと強調した。その指導信念を受け陸上競技のみならず、多くの分野のスポーツに村、地区、郡、県を代表する優秀な選手が輩出した。とりわけ、二度もオリンピックに出場した吉本久也選手も幸男の指導哲学を学び実行した一人である。

次に本字出身で県大会出場以上の成績を成した優秀選手と国を代表する吉本久也選手をごく簡単に紹介し、終わりに玉城幸男のスポーツに関する実績の概略を述べていきたい。

2、優秀選手の紹介

氏名	大会名	種目	成績	大会場	備考
玉村　文（靖の母）	県大会	六〇m	一位	那覇	戦前
金城　文（金城孝の妻）	〃	一〇〇m	一位	〃	〃

全島大会辺土名地区代表選手

氏名	大会名	種目	成績	大会場	備考
比嘉 貞男	全島大会	走り高跳び	一位	名護	一九四七年
新城 利男	〃	一〇〇m	一位	〃	〃
玉城 和信	〃	砲丸投げ	一位	〃	〃
比嘉 貞康	〃	一〇〇m		〃	〃
中村 巽	〃	一般一〇〇m		那覇	
〃	〃	四〇〇m		〃	
〃	実業団	一六〇〇mリレー		〃	国場組
金城 重信	全島大会	一般一五〇〇m	二位		
	米琉親善大会	一五〇〇m	二位	名護高校	
	実業団	一五〇〇m	二位	那覇	国場組
山里 全武	全島大会	一般五〇〇〇m		〃	
山里 全武	米琉親善大会	中距離		那覇	
中村 正一	〃	〃		〃	
金城 安一	〃	〃		〃	
金城 紀吉	全島大会	一般一万m	四位	〃	
宮平 倜志	〃	一般一〇〇m		〃	
〃	〃	四〇〇mリレー		〃	

奥本 道夫	玉城 勝郎	儀間 武男	〃	中村 権二	金城 紀吉	宮平 信康	金城 正男	金城 栄一	渡嘉敷順子	仲本カツ子（旧姓中村）		中村ヨシ江	中村ヨシ江	中村 栄子（旧姓金城）		高江洲秀子		知念与津子（旧姓中村）
〃	〃	〃	実業団	〃	全島駅伝大会	〃	〃	〃	全島大会	〃	〃	〃	〃	〃		〃		〃
一般二〇〇m 四〇〇m	一般走り高跳び	一般五〇〇〇m	五〇〇〇m	一般五〇〇〇m					走り高跳び	一〇〇m	四〇〇mリレー	二〇〇m	八〇〇mリレー	一〇〇m	四〇〇mリレー	一〇〇m	四〇〇mリレー	二〇〇m
二位					優勝チーム	〃	〃	〃										
〃	〃	〃	〃	〃					名護	那覇	〃	〃		〃		〃		〃
四回出場			琉球石油		辺土名―塩屋	塩屋大保回り津波	田井等―許田	金武―石川										

氏名	大会名	種目	成績	記録	大会場	備考
玉村　靖	県民体育大会	四〇代走り幅跳び	二位	六m〇八	奥武山	
吉本　要	〃	一般八〇〇m	二位	二分四秒	沖縄市	一九七七年(昭和五十一年)
〃	〃	〃	五位	二分二秒	奥武山	一九八〇年(昭和五十五年)
儀間　光彦	〃	三〇代一五〇〇m			〃	一九八一年(昭和五十六年)
〃	〃	四〇代八〇〇m	二位		宮古	一九九二年(平成四年)
金城　智	〃	一般一〇〇m			奥武山	
〃	〃	一般四〇〇mリレー				
〃	〃	三〇代走り幅跳び	二位		宮古	一九九二年(平成四年)
〃	〃	〃	一位	六m四六	八重山	
〃	〃	四〇代〃	一位	五m八六	宮古	二〇〇〇年(平成十二年)
金城　康哉	一般五〇〇〇m				奥武山	
宮平　隼人	一般八〇〇m				〃	
中村　竜治	一般五〇〇〇m				〃	一九九三年(平成五年)
比嘉　宗幸	年代別四〇〇mリレー	六〇代			宮古	一九九二年(平成四年)
〃	〃	六〇代			奥武山	一九九三年(平成五年)

海邦国体一九八七年(昭和六十二年)

氏名	大会名	種目	成績	記録	大会場	備考
宮平　勇二	国体	カヌー			塩屋湾	ダブルス
金城　武三	〃	〃			〃	〃
中村　哲郎	〃	〃			〃	シングル

インターハイ出場者

氏名	出身校	種目	順位	会場	備考
比嘉　一之	辺高	バスケットボール	三位	山形県	一九七八年(昭和五十三年)
吉本　敏昭	辺高	八〇〇m		南九州・九州	一九七九年(昭和五十四年)
金城　武三	辺高	三種競技			
荻野　玉枝(巽一女)	辺高	走幅跳		南九州	一九八〇年(昭和五十五年)
〃	〃	〃		〃	一九八一年(昭和五十六年)
宮平　秀樹	〃	四〇〇m		〃	一九八二年(昭和五十七年)
嘉陽　瞳	名護高	八〇〇m	一位	高校秋季陸上競技大会	一九九八年(平成十年)二分二十四秒五十七
〃	〃	全国高校駅伝大会			一九九八年(平成十年)時間十九分三十秒

・全国障害者スポーツ高知県大会二〇〇二年(平成十四年)

吉本壮一郎(北農)　ハンドボール投げ　一位
砲丸投げ　三位

・全国重量挙げ選手権大会(岐阜県)二〇〇三年(平成十五年)

吉本　葵(北農)　六十三キロ級重量挙げ出場

第一回　沖縄県中学校夏季陸上競技大会

吉本振一郎	一〇〇mハードル	一位	十五秒二	三年	九州大会出場

一九八一年(昭和五十六年)

第三十三回　沖縄県中学校陸上競技大会

吉本　賢司	二〇mハードル	一位	十五秒四	三年	一九九一年（平成三年）
比嘉　昌太	走り高跳び	二位	一メ十五	三年	〃
嘉陽　瞳	八〇〇m	二位	二分三十一秒七	一年	一九九六年（平成八年）
〃	〃	一位	二分二十七秒八	二年	一九九七年（平成九年）
〃	〃	二位	二分二十七秒三	三年	一九九八年（平成十年）
吉本　梓	一〇〇mハードル	一位	十五秒八	三年	一九九七年（平成九年）

第五十二回全国青年大会

二〇〇二（平成十五）年十一月、東京体育館で開催された、バスケットボール大会へ沖縄県代表として東村青年会が出場し、四位に入賞した。監督は金城幸人、村代表選手十二名中次に挙げる四名が川田出身であった。吉本　祐、平良洋一、比嘉昌太、比嘉和志

3、日本を代表する「吉本久也」選手の紹介

中学校、高等学校時代に投てきで、県記録に金字塔を建てた。大学では、重量挙げに専念した。成績は次の通りで、オリンピック日本代表で出場した。川田をはじめ、東村の名を全国に知らせた。

・全国インターハイ陸上競技静岡県大会
　一九九一年（平成三年）……砲丸投げ　二位
・世界ジュニア・ウエイトリフティング選手権（ブルガリア）
　一九九二年（平成四年）……一一〇kg級　五位
・アトランタオリンピック　ウエイトリフテング
　一九九六年（平成八年）……一〇八kg級　十六位
・世界選手権タイ大会一九九七年（平成九年）
　……一〇八kg級　五位
・シドニーオリンピック二〇〇〇年（平成十二年）
　……一〇五kg級　競技中のけがで途中棄権
・釜山アジア大会……一〇五kg級　九位

シドニー大会（2000年）

アトランタ大会（1996年）

【主な保持記録】

中学校陸上砲丸投げ記録……十六m九十六cm

ウエイトリフティング日本記録

……一〇五kg級　スナッチ一七五kg　ジャーク二一五kg　トータル三九〇kg

……一〇五kg以上級　スナッチ一八〇kg　トータル四〇〇kg

インカレ個人四連覇、国体十二回、世界選手権出場六回

4、秀れた指導者玉城幸男

玉城幸男はスポーツ全般をこなしていたが、特に陸上競技が得意であった。一九四〇年（昭和十五年）と一九四二年に陸上競技選手として明治神宮大会（現在の国体）に出場したこともあった。選手引退後は秀れた指導者として活躍した。一九五八年（昭和三十三年）の第十三回国民体育大会（富山県）の陸上競技監督から、一九八八年（昭和六十三年）の第四十二回京都大会までの三十年間に十二の大会の総監督や総務等を務めた。また、一九八七年本県で開催された第四十一回大会、沖縄海邦国体では選手強化委員長を務めた。

なお、当人は学校長や短大の非常勤講師のかたわら、沖縄県体育協会の理事長や沖縄陸上競技協会の理事長など多くのスポーツ関係機関の要職にも就いた。また、本県では数少ない陸上競技の終身一種公認審判員の資格を取得していた。

スポーツに関する主な受賞は、一九七六年（昭和五十一年）陸上競技の功績で日本陸上競技連盟から秩父宮章の贈与、また、各種競技力の向上や体育振興に貢献された実績が高く認められ、一九八八年（昭和六十三年）文部大臣より体育功労表彰、一九九七年（平成九年）には全国ラジオ体操連盟会長より表彰状が授与された。

「健康は最高の幸福で、運動は健康の礎（いしずえ）なり」をモットーに日々を過ごしていたが、一九九九年公務で宮古出張中に倒れ七十九歳で生涯を閉じた。

秩父宮妃殿下より秩父宮賞を授与される玉城氏（1977年）

平成５年　野球大会

平成２年　新春駅伝優勝

平成９年　バレーボール優勝

平成10年　バスケットボール優勝

平成10年

平成10年　新春駅伝優勝

平成10年　バレーボール優勝

平成11年　バスケット優勝

平成10年　女子バレーボール優勝

平成13年　新春駅伝優勝

平成13年　野球優勝

【コラム】

実力で負け、ルールで勝った大会

川田区は沖縄大戦前からスポーツが盛んな部落であった。これまで辺土名地区大会、郡大会、県大会、全国大会などで活躍した選手が多く育っている。琉球政府時代に開かれた辺土名地区大会での陸上競技、駅伝への村代表選手の半数近くは川田出身者で占めるなどまさに「陸上の王者」の名声を内外へ轟かせていた。

村陸上競技大会では中南部在住の川田郷友会のバックアップで連勝記録を更新し続けていた。戦後の一時期には陸上競技の技術向上、親善を図る目的で、旧久志村（原名護市）の嘉陽部落との交流大会を開くなどして選手強化策に取り組んでいた。

川田区が陸上王国を築いた背景として、県内スポーツ界では名の知れた優れた先輩指導者である玉城幸男、比嘉貞男両氏の指導があったことは言を持たない。両人は浦添市、沖縄市に住み、県内各種スポーツ関係の要職を務める傍ら、川田区、東村内で催すスポーツ行事に出席して協議運営、技術指導を積極的に行っていた。

一九七五年に村営総合グランド（現村営体育館敷地）で開催した村陸上競技大会は、川田、平良両チーム間で優勝を競い合い大変盛り上がった。玉城、比嘉両氏は川田区の選手控え場に陣取り、選手や監督にアドバイスをしながら戦況を見守っていた。

競技は予想通り川田と平良両チームでの白熱した展開となり、男子三十代の一五〇〇メートルの結果で勝敗が決まる状況となった。平良チーム代表が一位でゴールすれば優勝する情勢となり、会場の注目を集めた。

注目の種目がスタートした。一周目から平良チーム代表選手が始終先頭で走り、後続の選手をグングン引き離した。ゴール前の直線、ラストスパートで力走する選手の優勝を確信した平良チームの監督が興奮のあまり、グランド内に出て、選手の肩を叩いた。その選手がトップでゴールしたことで、平良区の控え場では優勝の喜びに沸いた。

しかし、監督が選手の身体に触れた場を玉城、比嘉両氏は見逃さず、川田チームの監督に「平良チームの選手は失格だ」と抗議するよう助言した。早速監督は審判長に抗議を行った結果、その内容が認められ平良チームの一位でゴールした選手は失格となり、川田チームの優勝が確定した大会となった。

十、川田の方言

1、はじめに

◎ナンマンタナー、ダー　イドゥタガ
○ダーチン　イカン　タン（テーバンナ）

◎アン　イートゥイン　チュー、ウガヤーチ　カーンガヤー
○ヤガチクーンドー

◎ウマンヤーヤ、ウッペナー　テレビ鳴ラチ　ハンナージ
　ウッペナー　鳴ラシバレーン
◎ウンナータ、ダーン　ワラビタガ
○川田ワラビタ　レーヤサーニ

◎ウンナータ　正月ネー　ヘーチクゥーガヤー
○シラーアシナー、ウンナータ　クトゥヤ、ウンナータ
　ガル　ワカイル

以上で示した五例の川田ことばによる対話で分かるように、川田方言は沖縄方言（標準的な）に比べ幾分変わった独特の語意、アクセント、抑揚（イントネーション）があり、全体的にゆっくりと上下動するその抑揚と流れは、悠長さとなごやかさを感じさせる。

また、沖縄方言に比べ「カ行子音」が「ハ行」化したり、「ハ行子音」が「ファ行」化したり、「ティ音」が「チ音」に変わったりする音韻の変化は、はっきりと感覚的に捉えることができる。しかし、その音韻の変化を含め、川田方言の語意、語法の特徴や、その変化、活用についての経緯、法則規則、歴史的背景等、これら言語学に関する知識に乏しく、言語学に即して論じまとめることはできなかった。従ってここでは、沖縄方言とは変わった川田方言だけを収集順に収録し、羅列した。

ここに沖縄方言と対比させて川田方言の一覧という形で収録したが、「川田ことば」の成因や、その変化については全く知らないので、ここで言う川田方言とは、川田だけの方言ではなく、「昔から今まで川田で使われている方言」と理解してほしい。

なお、沖縄の方言は、村（島）が変われば言葉も変わる、と言われる程各地独特の方言があり、これが沖縄方言の「標準語」だと特定されている方言は無いものと考えられる。従ってここでは、首里、那覇方言を中心に、沖縄の演劇や歌詞に使われ、沖縄の何処でも一応は通じ、理解されている言葉を「沖縄方言」とした。

2、川田ことばの対話事例

（注釈）傍点は川田ことば。川田ことばの次の行に標準語訳を加えた。

●例一――イーマール

○ヘーイサイ　ヤーニーメンソーイン（ユフティルメンソーイン）

（ご免下さい　家に居られますか（お休みでしたか））

◎ワンナー　ウヤヌ　イイチカレーシ　カービタン

（私の親の使いで来ました）

○アッチャー　イキムシヌヤー　フカーヂ　ウムトゥイビーン

（明日、畜舎の茅葺きをしようと思っています）

◎イチュナサーアイラハジ　エービーシガ　イーマール

ナイビランガヤー

（お忙しいこととは思いますが扶けて（手伝って）下さい。

お願いします）

○ナイサ　イー

（うん）

●例二――太郎が次郎の家を尋ねて

◎イェー次郎、ウキトゥイン

（おーい次郎、起きたか）

○イー、ウキトゥインドォー。ヌガ

（ああ起きているよ。どうした）

◎イャー、クーヤ、ヌースゥーガ

（君、今日は、何をする）

○アイ、ヌガ。ファルーチル、イクル

（あれ、何で。（何時もの通り）畑へ行くよ）

◎ウムフゥイガナー

（諸掘りに行くのか）

○イー

（うん（そうだよ））

◎アンセー、ハンダバーハラバ、イヒグヮー　ワキティ

トゥラショー

（それでは、諸かづらを刈ったら少し分けてくれよ）

○ヌガ。ウイ　ヌースーン　ジチガ

（ん、どうした。これを何に使うのか）

◎ヒージャーグサ　ノゥ　フスク　ヒチュイトゥテー

ヒージャーチ　クヮースサ

（山羊の草が不足しているから、山羊にやるんだよ）

●例三――海へ

◎クーン　キー　ウァーチキ　ヤー

（今日もよい天気だね）

○エーン　ヤー　ドゥクファリー　ジユーサヌ　マルケー

チナーヤー（イヒナー）アミ　フティン　シムシガ　ヤー

（そうだね、あまり晴れすぎだから、時々は（少しぐらい）

雨が降っても良いけどね）

◎エーサ。イャークー　ヒルーラ　ダーチ　イクガ。リカ、

ウミーチ　イカン

（そうだね。君今日昼からどこへ行く。海へ行こうじゃないか）

○イー　ターフニーシ（ダーン　フニーシ）イクガ
（そうだな、ん、誰の船で（どこの船で）行くの）

◎ワー　サバンニーシ　イカナ。ヌウーヒィン　シコラットゥイトゥ　シグイカイサ
（僕のサバニで行こう。何もかも準備（用意）されているから、すぐ行けるよ）

○アンセー　三郎ン　イェージヒチ、ウガ　ミッチャイシ　イカナ
（それでは三郎も合図して（誘って）我々三人で行こう）

◎エーサ。イャー　エージヒチコウー
（そうだな。君、合図して（誘って）こいよ）

○イー　ワーガー　ヒチイクーサ。ダー　ウミーチ　イクガ
（ん、僕が、合図してくるよ。どこの海へ行こうか）

◎イノー　ナーギー　レール
（イノー（礁池）の中でやるよ）

○ナマジブンヤ　ヌー　イュウーヌ　クゥーイガ
（今頃は何の魚が釣れるかな）

◎ワカラン。ヌガ　クゥーイシヤ　ヌーンイュウー　ヤチン　クワーシル　スール
（分からない。釣れる魚は何でも釣るさ）

○ピシンチ　インナヌン　トゥラヤー　メービシンチ　トゥラナ
（干瀬で貝も採ろうよ。前干瀬で採ろうじゃないか）

◎イー　アンサナ
（うん。そうしよう）

●例四―川へ

◎イェー　リカ　ハーチ
（おい、川へ行こう）

○ヌガ、ヌーシーガ
（うん、何をしに？）

◎ア、アタイメー　タナガー　トイガ　レール
（あれ、当然のこと、川エビを採りにじゃないか）

○ダーン　ハーチ　イクガ
（どこの川へ行く？）

◎福地川ヤ　マシ　アラン
（福地川へどうだ）

○タナガー　エーバ　古島川ン　ユー　ウィンドー
（川エビなら古島川もわりといるよ）

◎アラン。タナガーピカー　アラン　イーバー　クワーチャイ　チックワ　クワーチャイン　サーナ
（いや。川エビだけでなく、ハゼを釣ったりボラを釣ったりもしようじゃないか）

○アンセー　福地川ヤ　マシテ。リカ
（それでは福地川がよいな。さあ行こう）

―川で

◎ウマヤ　ドゥク　ウランヤー。リカ　アンファラーチ　ワタラーニ　アン　フムインメーチ　イジマーナ。ウマン

ビンビン　ワタラーニ　イカナ
（ここはあまり（川エビは）はいないな。向こう側へ渡って、あの淵の所へ行ってみようよ。ここの浅瀬を渡って行こうよ）
○エーサ、アンサナ
（そうだな、そうしよう）
◎エー、アマン土手チー　ビチュイン　チュー　タルガ
（おい、あそこの土手に座っている人は誰だ）
○ワカランサー。ダーン　チューガ　ヤー
（知らないな。どこの人だろう）
◎シランチュー　レーンドヤー　ヌー　ヒチュイガ
（知らない人だ　何をしているのかな？）
○ウナギル　クヮーチュイ　ギサイン　ドヤー
（うなぎを釣っているみたいだよ）
◎ヒルーラナー。ウナギヤ　ユルーアランバ　クーランヨー
（真っ昼間から？　うなぎは夜でないと釣れないよ）
○アラン、アミヌ　フラーニ　ハー　ヌ　ミングトゥイ　ネーヒルヤチン　クーイシガ、アンシ　ファリラーニ　ミジヌ　クラサイネー　クーランヨー
（いや、雨が降って川がにごっていると昼でも釣れるけど、こんなに晴れて水がきれいだと釣れないよ）
◎ウン　ウナギグヮーサーターヨー、ヘーイネ　ムンダニ　ーラ　ヌーヒィン　ハーチ　ヒチチクトゥヨー、ハー　ユグチ　フシガランドー
（ウナギを釣る人達は、帰る時は練った餌やら何もかも川へ捨てていくから、川を汚して困ったものだよ）
○アラン。ウンアタイヤ　ヌーンアランドー。ユルーナー　バッテリーシ　ウナギ　トゥイン　チューン　ウインドー
（いやいや。それくらい何でもないよ（驚くに当たらないよ）。バッテリーを使ってウナギをとる人もいるよ）
◎アンストゥル　イーバーン　タナガーン　ムル　イッソー　ラ　サーチィ　ヒィナトゥイサ　ヤー
（それでハゼや川エビなどもみんなやられて減っているんだな）
○ウンナータヤ　ウンアタイル　ワカイガヤー。サッコー　エッサーヤー
（あの人達はこれくらいのことも分からないのかな。困った人達だな）

●例五―名護へ
◎クウヤ　アミレーバン、リカ　ナグーチ　パチンコ　シー　ガ　イカン
（今日は雨だから、名護へパチンコをしに行かないか）
○エーサヤー、リカ　三郎タン　ユバーニ、ムルマンジューン　シ　イカナ
（そうだな、三郎たちも呼んで、皆で一緒に行こうよ）
◎アンセー、イヤー　ムル　ユジコー
（それでは君、皆を呼んできてくれ）

○アラン、ユバンティン　ムル　クーンヨ
（いや、呼ばなくても皆来るよ）
◎アラン、ユバンネーンネーカーンヨー
（いや、呼ばないと来ないよ）
○アネ、ムル　クーセー、リカ　ハイ
（ほら、皆来たよ、さあ行こう）
―パチンコ店で
○アキサミヨー。クーヤ　アミエートゥゲーラ　イッパイヒチュインヤー
（わあ驚いた。今日は雨降りのせいか混んでいるな）
◎トー、アンキカイ　アチューイセー。タミシヒチ　メー
（あれ、あの台（機械）が空いているよ。試してごらん）
○ワンヤ　シムサ　イャーラ　シレー
（僕はよいから、君からやれよ）
◎エーン、トーアンセー　ワンラ　サーイー。アバイ、ウンキカイヤ　ティーチン　イジランバンナー。
（そうか、それじゃあ僕から先にやろうか。あれ（おや?）、この台（機械）少しも出ないじゃないか）
○アッカイ、イヤー　ヌーン　ワカランセー。ウンキカイヤ　アンシサーンネー　ナランドヤー
（おやおやお前何も知らないんだな。この台（機械）はこうしないといけないよ（こんな風に扱わないといけないよ））
◎エー　アンレーン　アインチャ、ウングトゥヒチャートゥイジーサ
（ああそうするのかなるほど、こうしたらでるようになったよ）
○アギヨー、ヌー　アンシイジール。クーヤ　モーキタルウチテー（モーキーンテー）
（あれれ、何でそんなによく出るの。今日はきっと儲かるよ）
◎アンエーバ　シムシガ
（そうならよいけど）

●例六―キャンプで
◎アッチャー　ヤ　ヤスミ　レーパン、リカ　キャンプヒチカー
（明日は休日だし、キャンプへ行こうか）
○ダーンチ　スウーガ
（どこでやるの）
◎エコパーク　ヤ　マシアラン
（エコパークがよいと思うが）
○エーサ　道具ヤ　キャーナトゥイガ
（そうだな、道具はどうなっているかな）
◎マハイン　フカヤ　ムル　スリトゥインドー
（お椀以外はみな揃っているよ）
○カミムンヤ　キャースーガ
（食料はどうする）
◎ムル　ムッツインヨー
（みな持っているよ）

○ポーク　トゥ　ハラスグヮー　ヤ　ハンダージ　ムチヨー
（ポークとカラス小（小魚の塩漬け）は必ず持てよ）
◎ヌガ
（どうして）
○ユーバン　ヌ　ハチムン　ヤ、ポークトゥ　ゴーヤーシ
シコラーニ、ハラスグヮー　ハチラーニ　ビール　ヌマ
（夕食のおかずは、ポークとゴーヤーで作って、カラス小はビールを飲む時のつまみにしよう（カラス小をおかずにビールを飲もう）
◎アンスサ
（そうしよう）

●例七―潮干狩り

◎イエー、アッチャーヤ　サングヮチ　サンニチ、ドォー
ウミンムン　トゥイガ　イカン
（おい、明日は三月三日だし、潮干狩りへ行こう）
○ダーン　ビシーチ　イクガ
（何処の干瀬へ行こうか）
◎メービシチ　イカン
（前干へ行こうか）
○イー、ウス　プーン（プーガヤー）
（うん、潮引くかね）
◎アギヨー。ワン　キヌウン　イジャシガ、クラーク　ウ
スヤ　ピラーニ　ビシヤ　ムル　ピーパーガチル　ウタル
（ああ勿論。私は昨日も行ったけど、うんと潮が引いて干瀬はすっかり干上がっていたよ）
○ヌー　トゥティチャーガ
（何を採ってきたの？）
◎タフトゥ　シガイ　サゼインナ　ユカーイ　トゥッ
タンドー
（タコとシガイ（タコの一種で小さめなタコ）とサザエを相当採ったよ）
○イユー　ヤ　クヮーサンタン
（魚は釣らなかったのか）
◎クヮーチャンドー。クサバー、イシミーバイ、カタカシン
デー、ユークーイタッサー。ダーンチューゲーラ　ワカ
ランシガ　イカッペン　ウドゥウナギ　トゥテータッサー
（釣ったよ。ベラ、カンモンハタ、ヒメジなど、よく釣れたよ。何処の人かは知らないが、大きな大きなウツボを捕っていたよ。）
○アンセー　メービシネー　ナーヌーン　ウランテェー。
リカ　ピザンメー　チ　イカン
（それではもう前干には何もいないのではないか。ピザの前の干瀬に行こうか）
◎アラン、ナマ　アマンカ　メービシヤ　マシドゥ。メー
ビシヌ　イリンファラヤ　ユーウィンドゥ
（いや、まだ向こうよりは前干の方がよいよ。前干の西側はよく採れるよ）

○リカ　アンセー、ワラビ　タン　ソーラーニ、ヤーニン
ジュ　ンナーシ　イカ
（それでは、子ども達も連れて、家族全員で行こう）
◎ウッサケーン　ワラビ　タ　スンカーカラカー　ヒチ
ウカーサン。ワラビヤ　ウッチュケー
（こんなにたくさんの子ども達を引き連れては危険だ。
子どもは置いていこう）
○チケー　ネーンシガ、ソーティーカナ
（大丈夫だよ、連れて行こうよ）
◎ハンナージ　ソーティーキバレーン
（どうしても連れて行かないといけないのかね）
○アンシ　イキブサ　ヒチュイムン、ソーティーカナ
（あんなに行きたがっているのに、連れて行こうよ）
◎アンスカ　イューラー、リカ　ソーレー
（そんなにまで言うなら、さあ連れて行こう）

●例八―八月踊り
◎クー　ヤ　ハチグヮチ　ジュウーグニチ、ハチグヮチ
ウドゥイ　ヌ　ソウーニチヤー
（今日は八月十五日で、八月踊りの総日だね）
○イーワァチキ　ナタンヤー、イーアンベー　エッサー　ヤー
（良い天気になって、よかったなー）
◎ウドゥイ　ヤ　ナンジーラガヤー
（踊りは何時から始まるのかな）

○チクーヌ　イジーシンデーレール、シチジグルー　ラ
アランガヤー
（月が出次第だから、七時頃からかな）
◎アンセー　チントゥ　ユーバン　ジブン　エーンヤー、
ムラーラ　ジューシーメー　アイカヤ
（それなら丁度夕食時だね、村からジューシーがあるかな）
○アバイ、ズゥーシーメーヤ、ルクグヮチヌ　ハーリーフ
ギーヌ　トゥキレール
（おやおや、（カーサ）ジューシーは、六月のハーリーの
ときだよ）
◎エー　アンヤタンヤー、クゥーン　クワッキーヤ、ドゥー
ムチル　ヤタン　ヤー
（ああそうだったな、今日のご馳走は、各自持参だったな）
○ジュース　サキ　ビール　ヤ　ムラーラ　イジャスンジドゥー
（ジュースや酒ビールは　村から出すってよ）
◎アンセー　ドゥーシヤ　キャッサナー　イジーガヤー
（それなら会費はいくらかね）
○アラン、ドゥーシヤ　イジラン　シガ、寄付　スーシヤ
トゥインジドー
（いや、会費は要らないが、寄付は受け付けるそうだよ）
◎アンセー　ブンヌ　アタイヤ　イジャ　シルスール
（それじゃあ応分の寄付はするよ）
○アンサナ
（そうしよう）

3、川田方言一覧

	標準語	川田方言	沖縄方言
1	私達、僕達	ワンナー、ウガ	ワッター
2	君達	インナー	イッター、
		ウンジュナー	ウンジュナー
3	彼、彼女	アイ	アリ
4	彼等、彼女達	ウンナータ、	
		アンナータ	アッター
5	誰、誰ですか	タル、タルガ	ターヤガ、タッターヤガ
6	あれ、これ	アイ、フイ	アリ、クリ
7	ここ（此処）	ウマ	クマ、ウマ
8	そこへ	ウマーチ	ンマーチ（ウマンカイ）
9	いやだ（嫌）	ベール、ンバ	ンバ
10	疲れた！	クタンジタン・	ウタトールムン、
	休ませて下さい	ウタタンーユフラ	ユクラチ、トゥラ
		チトゥラセー	セー
11	急いで	ハクナー	イスゲー
12	どうにかなりませんか	チャーガラナランナ	チャーガナナイビラニ
13	食べてみて下さい	ウサガインセービレー	ウサガティンジミソーレ
14	あちら、あちらへ	アマンカチ	アマンカイ
		アマ、アマーチ	アガタ
15	このような習慣だ	アンシンナレー	カンシヌナレー、
			アンソールナレー

16	何というの	ヌージューガ	ヌーンディガ
17	男	イヒガ	イキガ
18	夫婦	ミートゥンバ	ミートゥ
		ミトゥンバ	ミートゥンダ
19	祖母	ファー、ファーメー	ハーメー
20	祖父	ウメー	ウシュメー
21	月	チキ	チチ
22	東（方位）	アガイ	アガリ
23	晴れる	ファリーン	ハリーン
24	片降り（雨の）	ハタブイ	カタブイ
25	天気	ウァーチキ	ウァーチチ
26	旋風	ハジマーイ、	カジマーイ。
		ハジマヤー	カジマーヤー
27	雷	ハンナイ、デンナンゴール	カンナイ
28	虹	ヌジ	ヌージ
29	早魃	ファーイ	ヒャーイ
30	風	ハジ（風のつく言葉は総てハジ）	カジ（風のつく言葉は総てカジ）
31	川	ハー（川の名にはガー）	カー、カーラ
32	井戸	アナガ	カー、チンガー
33	干瀬	ピシ（地名の時はビシ）	ヒシ
34	朝	ヒィトゥミチ	シティミティ
35	昨日	キヌゥー	チニュー
36	今日	クゥー	チュウー
37	明日	アッチャー	アチャー

38	おととし	ミチュ	ンチュ
39	昔	ムカシ	ンカシ
40	今	ナマ	ナマ
41	今まで	ナマンタナー	ナママディ
42	川の瀬	ビンビン	
43	川の深み（溜まり）	フムイ、グムイ	クムイ
44	後（うしろ）	フシ	クシ
45	角（かど）	ハドゥ	カドゥ
46	毛	ヒー	キー
47	髪	ハラジ	カラジ
48	鬚	ピギ、ヒギ	ヒジ
49	鼻	ファナ	ハナ
50	ひたい（額）	ピテ	ヒチェ、ムコー
51	歯	ファー	ハー
52	顎（あご）	ハクジ	カクジ
53	舌	シベ	シバ
54	唾	トゥッペー	チンペー
55	肩	ハタ	カタ
56	腕	ヘーナ	ケーナ
57	背	フシナガニ	クシナガニ
58	へそ（臍）	プス、テンプス	フス
59	足	ピサ	ヒサ
60	ふくらはぎ	フンダ	クンダ
61	腰	ガマフ	ガマク

62	皮膚	ハー	カー
63	ものもらい	ミーリンベー	ミンベー
64	かさ（瘡）	ヒェーガサ	ヘーガサ
65	いぼ	クチビ	クチュビ
66	ぜんそく（喘息）	ヒィミチ	ヒミチ
67	胸やけ	ククラキ	クララキ
68	気難しい人	ハマラシムン	カマラシムン
69	倹約家	フメーキヤー	クメーキヤー
70	心	キム（心の付く言葉は総てキム）	チム（心の付く言葉は総てチム）
71	機嫌をそこねる	キムヤンブン	チムヤンジュン
72	気がかり	キムガカイ	チムガカイ
73	心から可愛く思う	キムガナサン	チムガナサン
74	貫木屋	ヌキヤー	ヌチギヤー
75	石垣	イシガキ	イシガキ
76	台所	トゥングヮ	シム
77	茅葺きの家	ハヤブキヤー	カヤブチヤー
78	戸	ファシル	ハシル
79	水瓶（みずがめ）	ファンドゥー	ハンドゥー
80	梯子（はしご）	ファシ	ハシ
81	団扇（うちわ）	オーギ	オージ
82	蝿	フェー	ヘー
83	じざい鉤（イロリ上の）	ハキジャー	カキジャー
84	火吹き竹	ヒーフキ	ヒーフチ
85	わらむしろ（敷物）	ヌクブク	ニクブク

86	ふとん（蒲団）	ウド	ウードゥ
87	あか（垢）	アハ、ヒィング	アカ、ヒング
88	冷たい	ヒグルサイン	ヒジュルサン
89	おわん（お椀）	マハイ	マカイ
90	きせる（煙管）	キシル	チシリ
91	マッチ	チキジ	チキダチ
92	ふんどし（褌）	サナギ	サナジ
93	くば笠	フバガサ	クバガサ
94	針	ファイ	ハーイ
95	三又鍬	ミチバー	ミマター
96	鍬	トゥングェー	クェー
97	一本もり（銛）	イグン	ウギン
98	三本銛	ミチバー	トゥジャ
99	かぎ（鉤・漁具）	ハキジャー	カキジャー
100	水中めがね	ミーカガン	ミーカガン
101	浮き鏡	ウーキカガン	ウキカガン
102	かい（櫂）	ウェーク	エーク
103	鋸	ガンドウー、ガガイ、ガンドゥ	ヌクジリ
104	かんな（鉋）	ハナ	カナ
105	おの（斧）	ウーン	ウーヌ
106	かなてこ（金梃）	ファニガラ	カニガラ
107	ときぐし（櫛）	サバキ	サバチ
108	こま、輪	ゴールー	ゴールー

109	かおり（香り）	ハジャ	カジャ
110	鳥を飼う	トゥイチカネーン	トゥイチカナユン
111	習う	ナレーン、ナライン	ナラユン
112	見に行こうよ	ミーガイカン	ミーガイカニ
113	行く	イクン	イチュン
114	来る	クーン	チューン
115	来なさい、おいで	コー	クーワ
116	来ている	チューイン	チョーン
117	戻る	チューイセー	
118	帰る	ムドゥイン	ムドゥユン
119	乗る	ヘーイン	ケーユン
120	降りる	ヌイン	ヌユン
121	百姓	ウリーン	ウリユン
122	商人	ファルサー	ハルサー
123	仲買人	アキネーサー	アチネーサー
124	きこり（樵）	アチヨールー	アチョドゥー
125	かじや	ヤマアッカー	ヤマアッチャー
126	泥棒	ハンジャー	カンジャー
127	畑	ヌスドゥ	ヌスル
128	種をまく	ファル	ハル
129	植える	サニマクン	サニマチュン
130	なすび（茄子）	イールン	ウィーン
131	さつま芋の葉	ナシビ	ナーシビ
		ハンダバー	カンダバー

132	水前寺菜	ファンダマ	ハンダマ
133	あかじそ	アハナバー	アカナバー
134	にがな（わだん）	ンガナ、ンガナバー	ンジャナ、ンジャナバー
135	山芋	ヤマン	ヤマンム
136	唐辛子	ホーレーグス	コーレーグス
137	米	フミ	クミ
138	麦	ムギ	ムジ
139	さとうきび	フギ、ウーギ	ウージ
140	煮る	ニーン、ニールン、ニレー	ニーユン
141	煮えている	ニートゥイン	ニートォーン
142	炊事	ジョウーシキ	ジョウーシチ
143	大豆	トーフマーミ	ウフチジャー
144	炒める	イリクン	イリユン
145	揚げる（テンプラを）	アギーン	アギユン
146	和える	イェーイン	エーユン
147	塩漬け豚肉	スーチキジシ	スーチキー、スーチカー
148	朝食	ヒトゥミティムン	シティミティムン、
149	おかず	ハティムン	カティムン
150	おかずにする	ハテーン	カテーン
151	おから	トーフンカシ	トーヌカシー
152	血の炒め物	チーイリチャー	チーイリチー
153	買い物	ホーイムン、ホーイン	コーイムン、コーイン
154	これください（買物）	フイホーラ	クリコーラ
155	ホルトの木	ターウラシ	ターラシ

156	サキシマスオウノキ		シーワーギー
157	つつじ	サックワンバナサー	チチジ
158	きょうちくとう	ミーフックワンギー	ミーフックワー
159	くば（浦葵）	フバ	クバ
160	みかん	クンブ	クニブ
161	桑の実	クワーギンナイ	ナンデンシー
162	つわぶき	チパンブー、チパブー	チーパッパ
163	すすき	グシキ	グシキ
		ビッキンソーリー	グシチャー
164	ちがや	マハヤ	カヤ
165	はますげ	ホープシ	コープシ
166	おにたびらこ	タバクグサ	トゥイヌチビー
167	紫かたばみ	ヤファター	ヤハター
168	かたばみ	ミーハンジャー	メーハンジャー
		ミーハンコー	
169	すべりひゆー	ミンプトゥカー	ニンプトゥカー
170	のぼたん	ミーフックワンギー	テーニー
171	げっきつ	ギンギチ	ギンギチャー
172	セイロンベンケイ	プーカー	ソーシチグサー
173	おおばこ	シプグサ	ファラファーグサ
174	つるむらさき	シービ	シービン
175	かにくさ	ハンダ、ハンダグサ	チヌマチカンダ
176	鳥の鶏冠	ファンギ	カンジ
177	鳥の羽	ファニ	ハニ

178	魚のえら	魚のアギ
179	とげ	インギ
180	孵化	ヘーイン、シジーン
181	猪	ヤマンシシ
182	固い（かたい）	フパサイン
183	辛い（からい）	ハラサイン
184	にがい	インガサイン ンガサイン
185	焦げる	ナンチキ
186	匂い（におい）	ハジャ、ハダ
187	たぎらす	タンガスン
188	ひよどり	モードゥイ
189	いそひよどり	イシンミー
190	あひる	アヒルー
191	しゃも	タフチー
192	つばめ	マッタラー
193	うぐいす	チョッチョロー
194	しろはらくいな	ベン、クミルー
195	かわせみ	ハーバンドゥイ
196	あかしょうびん	オカル、ウカル
197	しじゅうから	ヒーグドゥイグワー
198	ふくろう	チコホ、チッコホ
199	ごいさぎ	ユーガラサー
200	ばった	ゲッタ

		アジ
		ンジ
		シディユン
		ヤマシシ
		クファサン
		カラサン
		ンジャサン
		ナンチチ
		カジャ
		タジラスン
		スーサー
		イシスーサー
		アヒラー
		タウチー
		カジフチマッタラー
		チョウッチョー
		クミラー
		カーラカンジュウー
		ククルー
		シーシーチョッチョー
		シーコフ、チクフ
		ユーガラアス
		セー

201	いなご	ゲッタ
202	毛虫	ヒームシ
203	ぽうふら	アミンクゥー
204	ほたる	ジンジン
205	かなぶん	ブンブン
206	あおどうがね	クスブンブン
207	けら	ヒィージャークエー
208	むかで	ムカジ
209	さそり	ヤマムカジ
210	なめくじ	ナンドルー
211	はぶ	ファブ
212	あおかなへび	センスルー
213	木登りとかげ	ホーレーグスクエー
214	とかげ	カーミンワイ
215	やもり	ヤードゥー
216	いもり	ソージムヤー
217	みみず	ミミジ
218	琉球じゃこうねずみ	ビーチャー
219	琉球青へび（青大将）	オオナガ
220	琉球からすへび	ガラシンヘーバー
221	琉球ひめはぶ	フッパ
222	かまきり	サールーグゥー イサトゥーグゥー

		ンナグラゼー
		キームシ
		アミヌックワ
		ジンジナー
		カーニーグンバー
		クスブンブン
		ジーシーウゥーグゥー
		ンカジ
		ヤマンカジ
		ハブ
		ジューミー
		コーレーグスクエー
		アンダチャー
		ヤールー
		アカワタ、ソージムヤー
		ミミジャー
		ビチー、ビーチャー
		オオナジャー
		ガラシバー
		クーファ
		イサトゥー

223	かえる（蛙）	アタビー	アタビチ
224	おたまじゃくし	アミナー	アタビチャー
225	やどかり	アンマン	アミナー、ビル
226	八目鰻	アブシブシカ	アーマン
227	もずくがに	ウリガイ	トーナジャー
228	うに（白ひげ）	ガシシ	キーガイ
229	うに（がんがぜ）	クダグー	ガシサー
230	めだか	タハマミ、タカマミ	
231	はぜ（ごくらくはぜ）	イーバー	タカマーミー
232	じゃこ	チミファンカー	イーブー
233	穴はぜ	マーンファナー	マーハンカー
234	すずめだい	ヒチャーグヮー	
235	かわはぎ	プックミ	ヒチグヮー
			カーハジャー
236	ひめじ	オジサングヮー	フクラビ
		カタカシ	オジサン
237	ぼら	チックワ	
238	とびはぜ	トントンミー	ブラ
239	うつぼ	ウドゥウナギ	トントンミー
			ウージ
240	えい	ハマンタ	カマンタ
241	じゅごん	ザン、ザンヌイユー	ザンヌイユー
242	こういか	グブシンミー	クブシミ
243	なまこ	シツキー	シチラー

244	貝	インナ	ケー
245	宝貝	モーモー	ウシモーモー、スビ
246	いもがい	カジブトゥ	
247	いもがい（小）	カジブトゥ	
248	まき貝（長）		チンボラー
249	ほら貝	ブラインナ	ブラゲー
250	ことひき	フパガナー	クファガナー
251	かんもんはた	イシミーバイ	ウルーミーバイ、ヒシミーバイ
252	さざえ	マーインナ	マーンナ
253	あわび	サゼインナ	アウビ
		タンパラゲー	クサバー
254	やまぶきべら	オークサバー	サークサバー
255	おにだるまおこぜ	アーファ	イシアー、アバラ
256	針千本	アバシ	アバサー
257	いなびかり		フディー
258	津波		シガラナミ
259	釣瓶（つるべ）	チー	
260	背負う	ウッパー	ウーファー
261	肩車	ウッパースーン	ウーファースーン
		コーンー	
262	地震	コーンスーン	
		ネー	

4、桃太郎（川田方言）

ムカシムカシ　ダーゲランムラニ　ウメートゥ　ファーメーガ　ウタンジ。

ウメーヤ　ヤマーチ　タムン　トゥイガ。ファーメーヤ　ハーチキンアレーガ、イジャンジ。

ファーメーガ、ハーンチ　キンアラチユイニ　イカッペン　ムムヌアマカカイ　ヒッカカイ　サーガンナー　ハーンイーラ　ナガリティクータンジ。ファーメーガ

「マーサイラー　ウマーチコウ。

ンガサイラー　アマーチイケー」

ジ　イチャートゥ　ムムヤ　ファーメーメーチ　ナガリティチャーンジ。ファーメーヤ　ウンムム　センタクイリムンチ　ヌシラーニヤーチ　ムッチチャーンジ。

ユサンディ　ウメーガヤマーラ　ヘーチチャートゥ　ウンムム　タイシ　カムンヂチ　マナイタンイーンチ　ワラージ　ヒチャートゥムムヌ　パンミカチ　ワリラーニ　イヒガングヮヌ　トゥンヂチチャンーンジ　ウメートゥ　ファーメーヤ　マンダマシ　ヌギタシガドゥーナーンクヮーヤ　ウラントゥ　サッコー　ウッサヒチ　「桃太郎」ジナー　チキラーニ　サッコー　ハナーサヒトゥタンジ。

桃太郎ヤ、フカンワラビンカ　ウフォークナー　ムヌンカディドンナイ　フドゥイラーニ　チカラン　ジンブヌン　マンディ　ウメートゥ　ファーメー　ン　カシーンユースーン　ソーイリングヮジナタンジ。

桃太郎（原話）

むかしむかし、あるところにじいさまとばあさまがおりました。

じいさまは山へたきぎとりに、ばあさまは川へ洗濯に行きました。

ばあさまが川で洗濯をしていると、川上から大きな桃がドンブラコドンブラコと流れてきました。

「うまい桃なら、こっちへこい。

にがい桃なら、あっちへいけ。」

と言うと、うまそうな大きな桃がばあさまの方に流れてきました。ばあさまは、桃を拾って家に帰りました。

夕方になって、じいさまが山から戻ってきました。二人で食べようと桃をまな板の上に乗せて切ろうとすると、桃はぱっと割れて、中からかわいい男の子が「ほうぎゃあ、ほうぎゃあ。」と生まれました。じいさまと、ばあさまはびっくりしましたが、大喜びで桃太郎という名前をつけて育てました。

桃太郎は、一杯食べれば一杯分だけ、二杯食べれば二杯分だけ大きくなりました。ひとつ教えれば十まで覚え、十教えれば百まで覚えました。

ウンジブン　ムラーチ　ヤナウニターガカーニ　ムランチュー　フルチャイ　ムンヌスダイ。イナグワラビター　ヘーソーティジャイヤナグトゥヌダンダン　シーブサカッティーヒチ　ムランチューヤサッコーシカディ　ウニ　ウトゥルサヒチ　クラチュタンジ。

アンシ　ウイ　ミラーニ　桃太郎ガ　ウメートゥ　ファーメーンメーチ　ヒサマンキー　グリーヒチ

「ウメートゥ　ファーメーニ　スダティラッティ　ウッペナーナイビタン　ニフェーエービタン　ナンマーラ　ヤナウニタ　ムルウチクルシーガ　ウニンヌシマチイカビートゥ　ウミキチ　チカラ　イジーン日本一ヌ　ムッチー　ウフォーク　チクティ　トラシンセービレー」

ンヂ　イチャートゥウメートゥ　ファーメーヤ　サッコーウドゥルチ「デージドォー　イカンドォー」ジ　イチャシガ　キャーシン　キカンシカタヤネーン　ウメトゥ　ファーメーヤ　日本一ヌ　ムッチー　ウフォークチクティ　ガマフーチ　クンサギラチ　ミーハチマキ　シミティ　ミーハカマ　ハカチ　タチ　ガマクニサシミティ「日本一ノ桃太郎」ジハチェーン　ハタムタチ、「トォーアンセー　イジコー」ジ　イチ　イカチャン。

ムラハジシ　マヂチャートゥ　インヌ　ワンワン　ナカガッチーカーニ「桃太郎サン、桃太郎サン、ダーチ　イクンヂチガ」

ジ　イチャートゥ　桃太郎ヤ

「ウニンシマーチ　ウニフルシーガ」

ジ　イチャートゥ　インヤ

「ワン　ケライ　ナチトゥラセー　ガマフニクンチェーン　日本一ヌムッチーダンゴ　ティーチ　ワンチトラセー」

こうして桃太郎は、どんどん大きくなって、力持ちで強い賢い子になりました。

そのころ村に悪い鬼どもが出てきて、村の人に乱暴したり、ものをとったり、娘をさらったりして、人々は大変困っていました。

ある日、桃太郎はじいさまとばあさまの前へ来て、きちんと座って両手をつき

「おかげさまで、こんなに大きくなりましたから、鬼ヶ島へ鬼退治に行って参ります。どうか日本一のきびだんごを作ってください。」

と言いました。じいさまとばあさまはびっくりしてとめましたが、桃太郎はどうしても聞きません。じいさまとばあさまはしかたなく、日本一のきびだんごをたくさんこしらえて腰に下げさせ、新しいはちまきをさせ、新しいはかまをはかせ、刀をささせ、「日本一の桃太郎」と書いた旗を持たせて、送り出しました。

村はずれまでくると、犬がワンワン吠えながらやってきました。

「桃太郎さん、桃太郎さん。どこへ行くのですか？」

「鬼ヶ島へ鬼退治に行く。」

「私を家来にして下さい。お腰につけた日本一のきびだんごをひとつ下さい。」

「ン　トォートォー　ウン　ムッチー　カミーネー　十人力ナインドォ」
ジ　イラーニ　ティーチ　トゥラチ　家来ケライナチ　ウイソーラーニ
ドンナイ　山ヤマンメーチ　イジャートゥ　キジガ　ケーンケーンナ
カガッチィー
「桃太郎サン　桃太郎サン　ダーチガ」
ジ　キチャートゥ
「鬼ウニンシマーチ　ウニフルシーガ」
「アンセー　ワヌン　ソーティージ　トゥラセー　フシニサギテーン
日本一ヌ　ムッチー　ティーチ　ワンチ　トゥラセー」
「イートォートォー　ハイ」
ジ　イチ　ムッチー　ティーチ　トゥラチ　キジン　ケライナチ
イントゥ　タイ　ソーティ　ドンナイ　メーチ　イヂャートゥ　サー
ルーガ　イカッペーナー　キャーキャーナカガッチー　トゥンジチ
チャーンジ　アンシ　サールーン　イントゥ　キジングトゥ　ヒチ
家来ケライナチ　桃太郎ヤ　人ミッチャイ　ガ　大将テーソーナラーニ　鬼ウニン
島シマチ　プンナイ　ムカティ　イジャンディ。
鬼ウニン島シマーチ　チカーニミッチャートゥ　イカッペン　マックルー
門モンヌ　ヶタッチュタンディ　サールーガ　ドンナイドンナイ　門モン　タ
タチャートゥ　ナカーラ
「ダームンタガ」ジ　イチ
赤鬼アカウニガ　イジティ　チャーンジ　桃太郎ヤ
「ワンヤ日本一ヌ桃太郎　インナーグトゥン　ヤナウニターヤ　ムル
タックルチ　トゥラサ」
ジ　タチ　ヌジ　キリカカタンジ、ウマニウタン　グマウニグヮー

「よしよし、きびだんごを食べれば十人力になるよ。」
と言って桃太郎は、犬にきびだんごをひとつやり、家来にしました。どんどん進んで山の方に行くと、きじがケーンケーンと鳴いてやって来ました。
「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへ行くのですか？」
「鬼ヶ島へ鬼退治に。」
「私も連れて行って下さい。お腰につけた日本一のきびだんごをひとつ下さい。」
「よしよし。」
と言って、きびだんごをひとつやりました。きじも家来になりました。桃太郎が、犬ときじをつれて、どんどん進んでいくと、猿がキャアキャア叫びながらやって来ました。猿も犬やきじのように家来になりました。桃太郎は三人の大将になって、鬼ヶ島へ進んでいきました。
鬼ヶ島へ着くと、大きな黒い門が立っていました。猿が門をどんどん叩くと中から
「どーれ。」
と赤鬼が出てきました。桃太郎は
「我こそ日本一の桃太郎だ。鬼どもを退治に来た。覚悟しろ！」
と言って、刀を抜いて斬りかかりました。

ター　ヤ　マンダマシ　ヌギラーニ　ヒンギスーブヒチ　ヤーンナカー
チ　チャー　ヒンギーヒチャンジ　ヤーンナカンチェー。ウニターガ
ムル　スリラーニ　サキヌメーパンジ　ヒチュタシガ
「ヌーウー　桃太郎、　ヌガ　ナマ　ワラビレーバンナ」
ジ　ウセラーニ　ムカティチャーンヂ　アンスシガ　ウマヤムル
日本一ヌ　ムッチー　カマーニ　千人力ル　ナトゥイトゥ　桃太郎
ヤ　タチーシ　インヤ　イッソーラムルクーイ　サールーヤ　チミ
シ　ムルハカジー　キジヤ　トゥバガンナー　ムル　チャーチチキ
ヒチ　ウニヌ　ウルウッサー　ムルフルシ　ヒチ　ネーン　ウニヌ
テーソーヤ　桃太郎メーチ　ヒサマンキーヒチ　ティーチチ　ナダ
ソーソー　サーガッチー
「フルサングトゥ　ヌチヤ　タシキティ　トゥラシンソーレー　ナン
マーラヤ　イカナクトゥアタンテーン　ヤナグトゥヤ　サービラン
タカラムンヤ　ムル　ウサギヤビーン」
ジ　ワビ　ヒチャートゥ　桃太郎ヤ
「ナンマーラ　ヤナグトゥ　サーンラー　フルサングトゥ　ヌチヤ
タシキーサ」
ジ　イラーニ　ユルチャンジ。
桃太郎ヤ　タカラムン　クルマーニ　チジ　イン　サールー　キ
ジーチ　ヒカチ　ウメート　ファーメーヌ　チトゥ　ジチ　ムラーチ
ヘーチ　チャーンジ　ウメートゥ　ファーメーン　ムランチューン
インナ　ウッサ　クッター　ヒチ　桃太郎ヌ　イジトゥ　チカラヌ
チューサ　フミーアギタンジ。

そこらにいた小さな鬼は、大騒ぎして奥の方へ逃げていきます。奥では鬼どもは酒盛りの最中でしたが、
「なに、桃太郎？　なんだ子どもか。」
とばかにしてかかってきました。こちらは日本一のきびだんごを食べているので、千人力にもなっています。桃太郎は刀をふるい、犬は噛みつき、猿はひっかき、きじは空からつっつきます。その強いこと強いこと。とうとう鬼どもは、みんな負けてしまいました。鬼の大将は、桃太郎の前に手をついて、涙をポロポロと流して
「命ばかりはお助け下さい。これからは決して悪いことはいたしません。宝物はみんなさしあげます。」
と詫びました。桃太郎は
「これから悪いことをしなければ、命は助けてやる。」
と言いました。
桃太郎は宝物を車に積んで、犬、猿、キジにエンヤコラエンヤコラと引かせ、じいさまとばあさまのお土産にして、村へ帰ってきました。
じいさまとばあさまも村の人も、みんな大喜びで桃太郎の勇気と力を褒め称えました。

5、川田の童名（ワラビナー）（シマナー）について

沖縄戦（一九四五年）以前の老人は、人を呼ぶ時その人の屋号にシマ名をつけていました。昭和十（一九三五）年生の人までは、殆どの人にシマ名がついています。

例　①ユシムトゥグワー　サンドゥー〈吉本康信〉
　　②ナカサトゥ　ハニー　〈宮平倜志〉
　　③大正十三（一九二四）年生の女性三名が同名のウトゥーでした。

アガイユシムトゥグワー　ウトゥー〈知念エミ〉
クラムトゥ　ウトゥー〈新城加代〉
ハニジヤー　ウトゥー〈儀間サエ〉

学校へ入学した当時は三名共名前が比嘉ウトで、同じ学級でもあり、個人の区別ができないので一ウト・二ウト・三ウトと呼ばれていたとのことです。

(1)代表的な童名

①ウシ（ウシー）　②ウトゥー　③カナ（カナー）
④カミ（カミー）　⑤カマドォー　⑥カミジュー
⑦カマダ（カマダー）　⑧サンドゥー　⑨サンダー
⑩ジル（ジルー）　⑪ジラ（ジラー）　⑫タル（タルー）
⑬タラー　⑭ハニー　⑮ハマドゥー
⑯ハンドゥー　⑰ナベ（ナベー）　⑱ナバ（ナバー）
⑲ナビ（ナビー）　⑳マツ　㉑マツチー
㉒マチャー　㉓グラー　㉔カマー　㉕ハナー

(2)ワラビナー（シマナー）の命名仕方

琉球王府時代には人名にワラビナー又はシマナー（童名）が命名され個人の呼称はワラビナーで呼び、その慣習は沖縄大戦前まで県内の一部の地域では行われていた。現代の戸籍に登録されている人名は「ヤマトゥナー」と言われ区別されていた。

川田地域でのワラビナーの由来についての詳しい先達に出会うことができなかったことから川田在住の吉本敬子の故郷の読谷村座喜味区の事例を紹介したのが図1である。

図1
牛玉元家のワラビナー

図1は敬子の母　ツネが四人の子供にワラビナーを命名した由来を記述した実例である。

同家の屋号　牛玉元（ウシタマムトゥ）と呼ばれ敬子の父　盛吉のワラビナーはカナー、母　ツネはカミー、祖父伊七はウシーと命名され呼ばれていた。

ツネの長男　秀人のワラビナーはウシー、長女　光子はカ

ミー、二女　敬子はカナー、二男　功はカミー、などと命名されている。

同家にはウシーが祖父の伊七と長男の二人、カナーが父盛吉と二女の敬子の二人、カミーが母　ツネと長女　光子と二男　功の三人とそれぞれ同名のワラビナーをつけられた者が複数いることが分かる。

命名の手順についてツネは十二支の子（ね）、丑（うし）、寅（とら）、卯（う）、辰（たつ）、巳（み）、午（うま）、未（ひつじ）、申（さる）酉（とり）、戌（いぬ）、亥（い）、が年や日を表すのに使われていることが深く関わっていると話している。

ツネは四人の子供の命名した経緯について長男の誕生日が祖父の誕生にちかく、二女が父の誕生日にちかく、長女と二男が母の誕生日に近かったことから祖父、父母のそれぞれのワラビナーをそれぞれのこどもにつけたと話した。

ワラビナーを決める儀式としては子供が生まれたその日に同家の祖母か先輩女性らが神酒とハナグミ（白米）をヒヌカン（火の神）に供え「チュー、ユカルヒニ、ボージャー、ウマリトーシガ、ナージキー、サビークト、ユタシク、ウニゲーサビラ。ウヌワラベーイキガヌウヤヌ、トウシビーカイクデ、ウマリトービン、イキガヌウヤヌ、ワラビナー、チキティ、ユタサイビーガヤー」と祈願して供えたハナグミを人差し指と親指で摘まみその数が偶数になると神の了解を得たとして名前をきめ家族へお披露目する。ハナグミの数が奇数になると偶数になるまで繰り返しつかみ直す。ナーチキー（命名）儀式が完了すると「ナーチキーサビタン　○○ナーチチョンドー　ケンコーアラシミソーリ」と乳児の額にナービヒング（鍋の煤）を三回つけたと言う。

明治四年に戸籍法が公布され日本の戸籍法が施行されると明治生まれの人の多くはワラビナーを名前として出生届けする者が多く見られた。その名残の事例にはウシ、ウシーのワラビナーを持つ女性がウシと男性は牛で、カナ、カナーは女性がカナ、男性は加那で、カメ、カメーは女性がカメ、男性は亀で、カマーは女性がカマ、男性は蒲、マツ、マツチーは女性がマツ、男性は松でそれぞれ戸籍に登記されたという。

その頃農山村地域では自宅出産するのが殆どであった。出産を介助する人は地域の先輩女性がおこなっていたという。当時、産婦は薪を焚き煙の立ち込める室内のジール（炉）の側に横たわり暖を取り汗を流して疲労回復を図る慣習があった。産婦が臨月になると家族は「クワーナシタムン」（お産用の薪）の収集に励んだ。医療機関が未整備のうえ環境衛生の劣悪などで乳幼児の死亡率が高かったという。乳幼児の死亡の原因として病気の他に乳幼児が悪霊に取り付かれたことも死亡の原因とかんがえられていた。悪霊は出産見舞い客が持ちこむものと考えられ見舞い客が来る際には「ヤナムンが入り子供の命を奪う」としてジー

ルに清めの塩を捲く慣習があったという。出産祝いとして六日目に「ルクニチマンサン」が、九日目に「クニチジール」が、二十日目に「ウワーミシー」又は「ティーダウガマシースージ」が催された。乳児が寝て居る枕元には魔よけとして鉈又は挟みなどを置くことや、外出するときには「ヤナムン、イチャテーナラン」と魔よけとしてカーダキの葉を頭髪にさして外出させる習慣もあったという。

因みに川田地域で呼ばれているワラビナーを挙げると

ウシー、ウシ（仲本洋子、宮平重由、吉本勲）
ハニー（中村靜、神谷清孝、宮平倜志）
チルー（奥本徳子、呉屋宮子）
サンデー（弘子の祖父）
マツ、マツチー（城間マツ、金城幸昭）
カマドー（新城弘子、弘子の祖母）
カナ（比嘉カナ）
ウト（新城冷子、冷子の母、金城ウト）
カミー（中村カミー、平良カメ）
サンドウー（吉本康信）
ナベー（金城正枝）
ナビー（仲本　苗）

【コラム】

ワラビナー命名のエピソード

姓名の固有名詞は、日本戸籍法が沖縄で施行された後、一般化された。それ以前の琉球王府時代にはワラビナーが普及し、その習慣は昭和十七～十八年頃まで続いていた。「沖縄の民族資料第一集」で、新城交盛（当時八十六歳、哲夫の父）は「命名のときワラビナーは祖父母の名をもらう」と話している。昭和初期の頃の命名は、ワラビナーとヤマトナーを併用する家庭と、ヤマトナーだけを名付ける家庭とが見られた。子どもたちは親しい友達同士の会話や遊びの際にはワラビナーで呼び合っていた。

ワラビナーがなく寂しい思いをしていたある少年が母親に「僕のワラビナーはなんと名付けたか」と執拗に聞きただした。困り果てた母はなげやりに「お前のワラビナーはヤマーだ」と答えた。自分にもワラビナーがあることを知った少年は、大いに喜び意気揚々と仲間に「ヤマー」を紹介した。その少年とは玉城国昭である。「ヤマー」はワラビナーを付けるルールに基づかず母親の独断であったとは知らなかった。

6、結びに

川田方言を収録していると、現在の五十歳後半とそれ以前の人達、即ち戦前（一九四五年以前）生まれと戦後生まれの人達では、その使う方言に大きな差異・変化が見られる。

若い人達の使う川田方言は、その抑揚のみを残して殆どその特質が失われ、沖縄方言に馴化（じゅんか）されているように思われる。特に十代、二十代では川田方言どころか、沖縄方言の存続そのものが危ぶまれる感を受けた。

その原因は、現代の交通、通信、マスコミの発展により地域間の壁が取り除かれ、人の交流・コミュニケーションの輪が広がる情報化社会の当然の帰結と考えられる。しかし、私達川田人にとって、自分達の心を育て、成長させてきたこの味わい深い川田方言を、永久に消えることなく残していきたいものである。

2003年旧6月26日行事

第五章　郷友会・移民・移住・出稼ぎ

第一節　郷友会

川田郷友会は一九六七（昭和四十二）年に池原貞雄博士が琉球大学学長就任を契機に結成され、三十七年の歴史を経て今日に至っている。故郷東村を離れた者が心を一つにして、緊密に融和を図り会員の福祉向上をめざすとともに故郷川田との連携を強化していくことなどを目的にした。また、結成から今日まで故郷の絶大な支援のお陰で健全な運営ができた。今後とも引き続き切磋琢磨し村の発展に寄与していきたい。

この度、待望の字誌の発行に際し郷友会の概要を掲載することができたことに感謝したい。

先ず、会員を代表して会長の字誌発刊によせる喜びのあいさつ、次に、川田郷友会結成と川田部落との連携の歩みの概略を記述した。

これまでの活動の一部は会長のあいさつや故郷との関係で触れてきたが、つけ加えて、新聞で紹介された七つの記事を掲載した。また、今日まで郷友会を運営し世話をしてきた初代会長から平成十六年度の第十九代役員までの歴代役員の紹介と、最後に郷友会員（カータンチュ）名簿を平成十六年二月発刊の川田郷友会名簿を参考に一部補足し、氏名を五十音順に並べて作成した。

一、川田誌発刊に寄せて

東村川田郷友会会長　渡嘉敷　直　勝

川田誌編集委員会からいただいた資料によりますと、私共の故郷川田区の先人は、およそ五百年程前に現在の今帰仁村からの入移者を主体に時がたつにつれ他地域からも加わり集落が形成され現在に至っていると思われます。

福地川沿いの屋取りは一八七九年（明治十二年）の沖縄における廃藩置県後、泡瀬、与那原、首里、那覇の泊方面の港町から山原船の往来によって寄留民としての移住者であります。

昭和二十年第二次大戦の地上戦で敗戦の痛手も生々しい廃墟と化した郷土を再建するため、山から茅葺校舎の建設資材、家屋の建築、木材燃料の薪等区民総出で力を合わせて取り出し戦後の復興に頑張った諸先輩方の共同体意識や連帯感、協調性そして精神力の強さは小学生や中学生時代の私には大きな社会的体験として強く脳裏に焼きついています。

時代が落ち着くにつれ、林業から農業の稲作、甘藷作りそして砂糖きびやパイン作りと変遷し現在は柑橘、花卉園芸類等も栽培するようになったが、川田の方々の勤勉実直

さとスポーツを愛好する明るい区民性は私共郷友会員の誇りであり、今日でもその精神性は脈々と受け継がれているものと信じてうたがいません。

川田区の長い四〇〇年の年月を私なりに区分して要約致しますと現中国の明と交易した琉球王朝時代や薩摩の支配、廃藩置県、日露戦争、日支事変、太平洋戦争、米国の施政権下、祖国復帰と激動の時代であったといえます。

戦前から故郷川田区民は大自然の中で逞しく生き芸能文化や教育スポーツを振興し農林漁業で生活と福祉の向上にご尽力されてこられた先人、諸先輩方とその子孫の足跡を収録し後世に残すことは誠に時宜を得た好機であり、私共県内外地に移住している郷友会員や川田区出身者としても先人祖先の功績や歴史等諸々の事柄をさかのぼって編纂されることは大変意義深く価値の高い貴重な字誌となるものと期待しております。

ところで東村川田郷友会は、一九六七年（昭和四十二年）七月琉球大学第七代学長に同郷の池原貞雄氏就任の快報に我々は欣喜雀躍、その感激は最高潮に達し、池原学長に続けの合言葉に早速就任大祝賀会が計画され、その喜びを契機に川田郷友会が正式に結成されました。

初代会長に比嘉好吉、副会長に浦崎直次、比嘉参栄、事務局長に玉城和信の諸氏が選任され、比嘉会長を中心に役員の努力によって川田区より会の運営基金として三千弗の大金が助成されました。川田郷友会は人材の育成をモットーに掲げ池原学長就任の感激と誇りをそのまま精神的バックボーンとし池原貞雄学長に続けとの気概と希望を会活動の理念とし、今日に至っています。

郷友会の主な事業としては、敬老会、七十三歳以上の合同新年祝賀会学事奨励会、ピクニックやレクレーション、総会、川田区民運動会への全種目参加等でありました。各種激励会等川田区の年中行事には、ほとんど役員が参加して連携をとってきました。

郷里川田区が益々子孫繁栄し大きく発展をみることによって、その子弟が夢と希望を胸に名護や中南部に職を求め移住し希望がかない大成する中で、郷友会員も増え、故郷川田区民共々、未来永劫に繁栄し発展するものと信じております。

私は平成十二年度から二期四ヶ年間郷友会長として微力ではありますが役員の皆様や郷友会員、川田区民皆様のご指導とご協力により務めています。二〇〇一（平成十三）年八月に故郷の玉辻登山を会員大勢の参加で実施できたのが思い出となっております。

その他には新年合同祝賀会と名うって新年会、生年祝、敬老会、各種激励会を合同で開催致しましたが、奥本道夫氏の浦添市議会議員の第七期連続当選祝賀会や議長就任祝、地方自治の功績で藍綬褒賞を受章された祝賀会等盛大に挙行した思い出等があります。また旧暦六月二十六日の航海安全、豊漁祈願の海神祭、ハーリーに郷友会チームを

編成し参加させてもらったり川田区の生年祝や豊年祭に郷友会役員四～五名で区民皆様と懇談するなかで旧交を温め共々に健康、豊年や繁栄を祈願したことがよき思い出となり郷里川田区民と郷友会員との懸け橋に少しはなれたのではないかと思っているところです。

むすびに、過去の積み重ねが現在であり、現在が未来を照射して私共の生活や社会が方向付けられてゆくものだと思います。この度の字誌の発刊を心からお喜び申し上げますと共に川田区民皆様と郷友会員がますます緊密に連携協力し相互扶助の精神で人生を楽しく有意義に過ごしていきたいものだと思います。

そして私たちは川田区公民館ホールの緞帳に書きこまれた温故知新の心をもって、新しい川田区とそして新しい郷友会の時代を創造していかねばならないと思います。

川田誌の発刊を祝し、川田区の皆様並びに郷友会員皆様の益々のご多幸とご繁栄を祈念申し上げまして所感と致します。

平成十六年　三月

二、郷友会結成と川田部落との関係

東村川田郷友会理事　奥本道夫

昭和二十年八月に（トウングーマガイやイナンワタ）の避難小屋で終戦をむかえ部落民が集団で下山しあの泥んこ道を歩いて大宜味村の根路銘部落に集められました。そこで一時期生活し、その後川田へ戻り各々の家で槌音も高く復興が始まりました。

老若を問わず農、漁業も勤しみましたが、その頃は特に山稼ぎが主な仕事で福地川の豊富な水量を利用し（タムン流らさー）でタムン座まで持っていき、そこから馬車で川田の海岸まで運びました。又、エーラー山等から人力や馬を利用して、木材やタムン（マキ）を切り出しそれを換金して日々の生活の支えにしている状況でした。

その様な状況の中から吾々は逸早く教育関係の学校や仕事を求め、又起業のため中南部へ転出して各々の生活基盤を造り頑張ってまいりました。

川田を後にした方々は残された家族や子供達の教育、又川田区の為にもそれぞれの立場から経済的、そして精神的面でも絶えず協力し支えてこられたことだと思います。

中南部の各地に散在する川田部落を転出された方々のお住まいがながく掌握が出来ない状況でしたが諸先輩方がど

うしても郷友会をつくって親睦をはかりたい旨の機運が高まって参りました。そこでこのいきさつ（経緯）とその後の郷友会と川田の主なる関係を記憶のままに記述致します。尚、記録はありませんので年代や出来事が前後するところもあるかと思います。

沖縄県の最高学府である琉球大学学長に、我が郷里の誇りとして尊敬しております池原貞雄先生が御就任なされました。先生の就任祝賀会の準備会が真和志支所隣りの仲本政栄家で行われ私も前使者（メエジケサー）として呼ばれました。たしかコザの比嘉貞男氏、浦崎直次氏、仲本政栄氏の三名だと記憶しております。そこで祝賀会と郷友会結成について大まかな話し合いがなされその後コザの比嘉好吉家で第一回目の会合が持たれ池原先生の祝賀会の具体的な内容と郷友会結成についての話し合いがもたれました。

当日は祝賀会の席で前半は郷友会の結成、引き続き祝賀会を行う旨の話し合いがなされ初代会長に比嘉好吉氏、副会長に浦崎直次氏、比嘉参栄氏、事務局長に玉城和信氏を全会一致で決定しました。

思いつくままに例記して記述いたします。

会長初め役員で川田区にその報告と区との親睦を深めていく為の話し合いがなされその中で郷友会は零（ゼロ）からのスタートと言うことで川田区のご理解とご配慮により早速運営基金として三千弗の大金が助成されました。それを郷友会の活動費に当て最初の行事としては東村の陸上競技大会の予選を兼て区と郷友会の対抗試合を行い、その結果郷友会からも多くの方々が村陸上競技大会に選手として出場することになりました。大会当日は貸し切り大型バス二台も区から提供されて多くの方々が応援に行き、より親睦を深めてまいっております。

また、引き続き玉城幸男先生や比嘉貞男氏等を中心に役員の皆様が基金増額運動を展開され、コザの料亭大和で区の役員と郷友会の役員との話し合いがなされ、その結果川田区から五百万円の基金が助成され、この基金を活用し郷友会の活動も活発化してまいりました。

郷友会に於きましては、川田の氏神様である勝乃宮建設の際には会員から寄付金を集め協力させていただきました。

川田区の最大の課題でありました福地ダム用地（入り会権）をめぐる問題等に関する件で区から郷友会へ話しがあると言う事で、旧琉球政府前のホテル宮平の二階で川田区ダム問題対策委員会（委員長吉本実氏）と区長役員の皆様と郷友会の理事役員との意見の交換がなされ、区から郷友会の理解と協力の要請があり、全面バックアップすることの約束がなされその後何回となく会合がもたれました。

川田区では、弁護団（団長金城睦氏）も編成され、本格的に裁判闘争が行われましたことは御承知の通りであります。

川田区においては長年続いた入り会権問題も和解と言う

結果で解決しその後川田区と話し合いがなされ、川田区民のご理解の上で和解金の中から弐千万円と言う大金の助成金を戴き郷友会の基金として大切に活用させていただいております。

郷友会員の二世、三世にも長くそのことを理解させ継承し川田区出身者としての誇りを持たせたいものだと思います。

近年は旧六月二十六日のハーリーフギーに郷友会の選手も出場させることが出来、大変嬉しく思います。

こうして川田区の諸行事、又郷友会の行事共に両方の役員の方々が参加し親睦をはかりその時々の問題の報告等がなされますことは大変素晴らしい事だと思います。

この度の川田区の字誌発刊につきましては区民、郷友会の皆様の待望久しい出来事だと思慮致し区長初め編集員の皆様のご苦労に対し深甚なる敬意と感謝を申しあげ結びと致します。

平成十六年三月吉日

川田友の会　川田小唄を舞う

2001年（平成13年）9月21日　字誌聞き取り郷友会合同懇親会

2001年（平成13年）郷友会玉辻登山

2001年（平成13年）郷友会役員会

2001年（平成13年）郷友会役員会　奥本道夫宅於

2004年（平成16年）3月30日　懐かしいふるさとめぐり　川田友の会

2004年（平成16年）3月20日　特別養護老人施設「やんばるの家」訪問　川田友の会

2001年（平成13年）8月5日　郷友会玉辻登山ピクニック　福地ダム下

2001年（平成13年）8月5日　自然体験とバーベキュー大会

2001年（平成13年）8月3日　郷友会　福地川バーベキュー大会

2003年（平成15年）　川田郷友会主催の合同祝賀会　北中城リージョンクラブ

2002年（平成14年）1月3日　川田区生年合同祝賀会　川田公民館於

三、活動の事例（新聞記事から）

■人情も深く心ふれ合う　郷里忘れず緊密に

［琉球新報・一九八〇・一・十九］

今日のゆかる日に
八十五の御祝い
なし子引きちりて百歳願ら　（奥本道夫作）

毎年一月に川田郷友会が催している高齢者の合同生年祝い及び敬老会は、ことしはさる十三日夜浦添市民会館で約二百人が出席して盛大に行われた。舞台にかかげられた冒頭の琉歌に会員の気持ちが託されていた。ことしのサル年生まれは、山内ツル、渡嘉敷マツ、吉本静の三人だった。郷里・東村川田では戦後一貫して生年祝いは合同で催すなわらしになっており、郷友会でもそれを踏襲している。

川田郷友会の結成は、いまから十三年前の一九六七年。沿革によると「同年七月沖縄最高学府である琉球大学第七代目学長に同郷の池原貞雄氏就任の快報に我々は欣喜雀躍、その感激は最高潮に到し学長に続けの合言葉に早速就任大祝賀会が計画された。その喜びを契機に川田郷友会が正式に結成発足す」とある。池原学長就任の感激と誇りをそのまま精神的バックボーンにしたところがいかにも郷友会らしい。

初代会長は比嘉好吉氏。以下、故浦崎直次、比嘉貞男、池原吉茂の各氏が会を引っぱってきた。現会長は五代目の吉本好助氏（元東村農協長）。会員は、那覇、浦添を中心に広く中北部にまたがり、現在百二十世帯約五百人。「東村出身の郷友会は川田だけです。各部落とも集める〝役者〟というか、熱意のある人がいなくて活動していない。実は東村全体の郷友会もあけぼの会の名称であったのですが、三年ぐらい続いて自然消滅した」（吉本会長の話）。川田郷友会は、いまでは東村出身の郷友会活動では唯一のものになっている。

活動は、先にあげた敬老会及び七十三歳以上の合同生年祝賀会（一月）をはじめ学事奨励会及びレクリエーション（四月）、総会（四―五月）、区民運動会参加（八月）を年中行事にしている。さらにその都度、各員の各種激励会を催している。また〝カワタンチュ〟として、郷里を忘れないために川田との連携は緊密にしている。区民運動会だけでなくほとんどの区年中行事に参加している。一昨年の昭和五十三年八月にはむかしの川田の写真などを入れた始めての会員名簿を発刊した。

川田は、東村を代表するパイン畑が広がる山と海に囲まれた風光明媚な土地である。ただ福地ダムの建設で、タナガーを取った福地川の清流がなくなったのを惜しむ会員は少なくない。吉本会長は「カワタンチュは人情が深く、勤労の精神にあふれている。スポーツも盛んで区民の運動会にはほとんど優勝している。郷友会がここだけあるのは、指導者がいることのあらわれだと思う。若い人材も豊富だ。

ただ郷友会の役員は、仕事に就いている人は忙しくて無理な面があるので、郷土の若い人のためにもと私が引き受けた。会の目的でもある心と心をつなぐため、恩納村あたりでピクニックを計画している。これまで行事はほとんど屋内だったので、広いところでの親睦も取り入れていきたい」と話している。

郷友会員の活躍は、教員、警察を中心に各界にわたっているが、主な人をあげるとまず池原貞雄（琉球大学教授）、比嘉貞男（丸栄商会代表）、玉村弥吉（元警察学校長）、池原吉茂（元警察官）、崎山直蔵（丸元建設専務）、玉城和信（国場組土木事業本部土木部長）、奥本道夫（浦添市議会議員）、比嘉哲弘（東物産代表）、金城晴康（玉城材木専務）、中村一夫（設計士）の各氏らがいる。

■川田の合同運動会にぎわう

［沖縄タイムス・一九七四・七・二十七］

東村川田区（比嘉博昭区長）と同区出身の名護、中、南部在住郷友会（比嘉貞男会長）の共催の運動会がこのほど東小中学校グラウンドで催された。

これは区民と郷友会との親交を深めるのと八月四日開催予定の東村陸上競技大会への派遣選手選抜をかねたもので今年で二回目。区民を東西に分け、郷友会、生徒会の四チームが参加し、一般男子百メートルをはじめ、二十九種目に炎天下で熱戦が展開された。

この日は郷友会もバスを借り切っての参観。ボール運び競走、婦人会全員による川田音唄などを踊ってにぎわった。郷友会も新しく「強く、明るく、なごやかに」をシンボルにした川田郷友会旗を制定しての参加。今後各種の部落行事に会をあげて積極的に参加することにした。

引き続き、公民館で反省会を開き、①旧六月行事のハーリーにも、郷友会が正式に参加すること②運動会にはレクリエーション的なプログラムをより多くしていくこと――などが話し合われ、相互の親交を深めた。

結果は次の通り。

①西チーム②郷友会チーム③東チーム④生徒会チーム。

■区民運動会賑わう

［沖縄タイムス・一九七三・九・四］

東村川田区（比嘉博昭区長）は、このほど東小中学校校庭で中南部在住の郷友会の後援で区民運動会を催した。

これはスポーツを通して区民と郷友会の親交を深めるのと、村大会の派遣選抜をかねたもので、区民を東西に分け、今年から始めて参加した郷友会と、生徒会の四チーム間で一般男子百メートルをはじめ、二十九種目に熱戦を展開した。

この日は郷友会からの参観者も多く、地元婦人会と郷友会婦人会がそろって川田音唄などを踊ってにぎわった。

引き続き反省会を開き①郷友会も引き続き参加する②開催期日を固定化する③レクリエーション的なプログラムも多く取り入れる④地元生徒会と郷友会生徒会の球技大会の

開催など――を決めた。

■東村川田友の会がふるさとめぐり

［沖縄タイムス・二〇〇四・三・二十六］

那覇市近隣に住む女性の模合グループ・東村川田友の会（知念絹子世話役）は二十日、村内で「ふるさと施設めぐりの旅」を行った。

一行は十四人。小型バスを借り切り、開催中のつつじ祭り会場で花見後、今春オープンした「山と水の生活博物館」を見学。大宜味村内の「特別養護施設やんばるの家」を訪れ、川田出身者を慰問した。

会員には、川田地域で山仕事を経験した人も多く、博物館見学では、生活を再現した展示物を前に、「昔の生活の様子が思い出される」と感慨深げ。比嘉オチヨさん（七六）は「若いころの生活が懐かしい。あの頃の生活をもう一度してみたい」と話していた。

一方、やんばるの家では、中村ハナさん（百）、比嘉カナさん（九九）、金城政信さん（九四）、金城晶子さん（八五）、中村清さん（八〇）らを激励。見舞金を手渡した。三十―四十年ぶりの対面もあり、車いすに乗った入所者に駆け寄り、抱き合うなど再会を喜んでいた。

世話役の知念さんは「模合を始めて十周年の節目に、故郷訪問ができた。ホームの入所者たちは幼いころにお世話になった先輩たちで、再会して感激した。こんな機会をもっと持ちたい」と話した。

■ハーリー舟建造　三十年ぶり

［沖縄タイムス・一九七三・七・十］

東村川田区（比嘉博昭区長）が昨年の六月に発注していたハーリー舟二艘がこのほど完成した。

同区では、毎年旧暦六月二十六日に恒例の海神祭を催している。この催しは、川田、平良、宮城区の歴史的な神事で、その余興としてハーリー競漕が行われている。

昭和十三年ごろまではハーリー専用の舟を備えて、盛大にハーリー競漕を行っていたが、それが老朽化して後は、個人のくり舟やテンマ船などを借用して、昨年までこの行事を続けている。

数年前から区民からこの歴史的な行事はもっと盛大に行うべきだという声が高まり、この舟の建造となった。舟の建造にあたったのは糸満市で船大工をしている大城栄徳氏。二隻の建造費は五十四万円、装飾費を含めると八十万円になるという。四十本のカイ（六万円相当）は、現在糸満市で船大工をしている同区出身の比嘉長治氏が寄贈した。このように三十年ぶりの舟の建造により、今年からは海神祭も盛大になるものと区民を始め隣区でも期待している。区の役員会でも早速この行事の進め方について検討している。

■古里を満喫　川田郷友会

［沖縄タイムス・一九九九・八・十三］

「ふるさとの自然を満喫してリフレッシュしよう」と川田

郷友会（渡嘉敷直勝会長）では五日、県内在住の会員に呼び掛けて福地ダム見学と玉辻山トレッキングを行った。

呼び掛けに応じたのは二百十二人。自家用車五十五台に分乗して参加。トレッキングは午前十時にダム事務所前をスタートし、参加者は大粒の汗を流しながら坂道を歩いた。

沖縄市から参加した渡嘉敷直定さん（六八）は、中・高生のころ木炭の運搬で通った思い出があり、「ここはクスイビラ、ここはカシギクブ、イジュグヮーシンバタだ」などと四十年前の記憶を思い起こしながら歩いていた。

玉辻山の頂上では、眼下に広がるパノラマに参加者らは「素晴らしい眺め。来てよかった」と歓声を上げていた。

一方、ダムの下流では、子供たちが水遊びを楽しみ、郷友会員らがバーベキューで旧交を温めた。浦添市議の奥本道夫さん（六二）は「玉辻山一帯は先人たちの生活の場であった。この地で多くの会員が一堂に会したことに感激した」と話していた。

平成２年度　川田協同組合役職員　平成２年７月21日

第二節　出稼ぎ・移民・移住

一、海外雄飛への機運

沖縄県の移民は明治三十二年（一八九九）のハワイ移民から始まっている。大正十二年（一九二三）、第八十二回航海までは契約移民でそれ以降は自由移民か親族の呼び寄せ移民である。

川田からの移民は大正七年（一九一八）のブラジルへの契約移民と思われる。当時の川田社会の生活基盤は農林業であったが、農家の所有する農地が狭いうえ、毎年のように台風や干魃（かんばつ）などの自然災害に見舞われ農業だけで生計を維持することは難しく生計の大半は林業によって支えられていた。しかし、唯一の現金収入である薪炭材や樽皮材（たるかわざい）の売れ行き不振等で一般家庭の困窮はその極に達していた。このような状況を打開するひとつの方策として移民が考えられた。従って、移民の目的は永住ではなく海外で稼ぎ錦を飾って故郷に帰り楽な暮らしをしたい、または親元に送金して親兄弟を喜ばせたい願いからであった。

当時のこのような状況の中で一応移民を決意しても海外への渡航には多額の旅費を要するため、その工面には難渋し、ほとんどの人が高利の金を借りて旅費にあてたものである。

しかしなかには知念三郎、知念貞徳、仲村渠オフジ、比嘉桐巧、比嘉源助、比嘉貞吉たちのように親戚の知念貞馨の好意により旅費を工面してもらった例もあった。

移民としての渡航が決まり、実際に渡航した人達のケースはつぎのように多種多様であった。

一、移民に行くために結婚する。（夫婦で行く）

一、妻子持ちは妻子を残して単身で行き、三、四年稼いでから妻だけを呼び寄せる。（子供は島の親兄弟に預ける）

一、結婚適齢前に独身で行って、五―六年稼いで妻を求めに一時帰郷して夫婦で再渡航する。

一、妻子を残し単身で行き妻を呼び寄せしていないのは四―五年で帰郷している。

言葉も通じない外国に移民した先人達は非常に勇気があったと思われる。

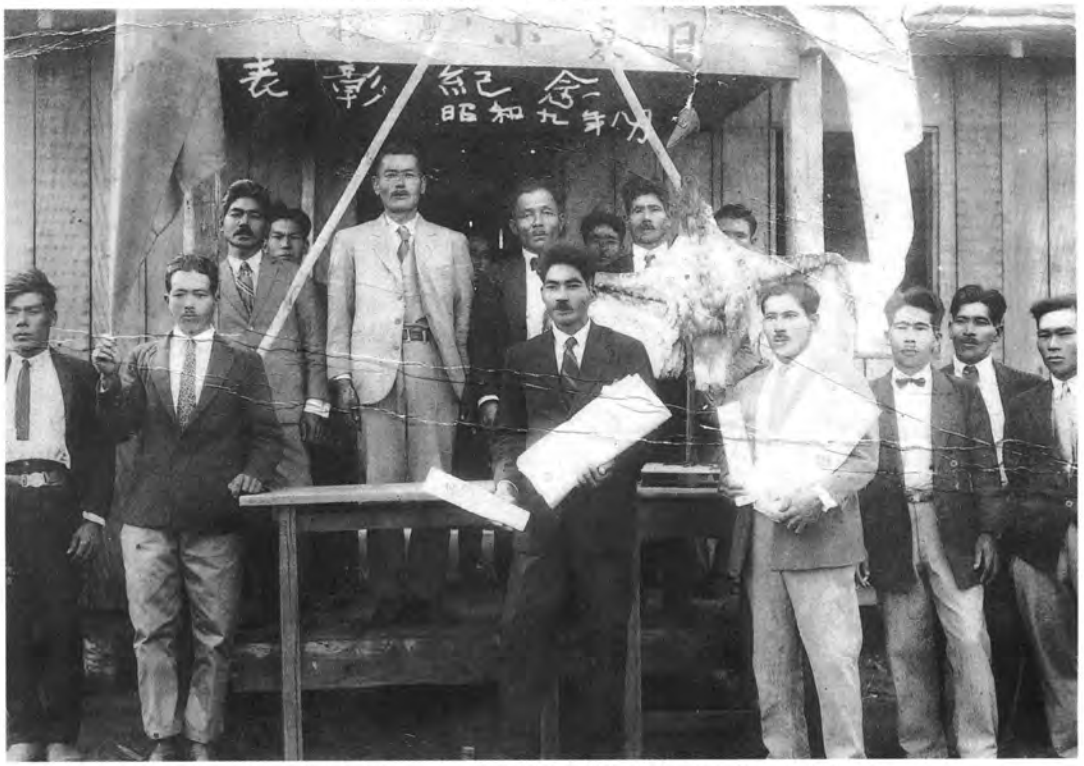
第二次大戦後は、ほとんどが家族呼び寄せ移民であり、また琉球政府の計画移民が昭和二十九年（一九五四）から昭和三十九年（一九六四）まで十九次に亘ってボリビア移民があった。

在亜東村移住五十周年記念祝賀会一九七一年七月廿五日

1971年（昭和46年）7月25日　在亜東村移住50周年記念祝賀会　沖連会館於

1938年（昭和13年）頃　関西方面出稼　川田出身知念貞馨を囲んで

1934年（昭和9年）　川田出身のブラジル移民



1934年（昭和9年）8月　日東小学校表彰記念川田出身者　ブラジル於

二、海外における川田人（チュ）の先駆者の歩み

われらの先駆者「前掟屋（メーウンチヤー）」（屋号）の比嘉弥吉、「勢頭屋（シートウヤー）小（グワー）」の比嘉源助、「東大屋（アガリウフヤー）」の比嘉桐巧、三人は最初は契約移民で第六回讃岐丸（サヌキマル）で大正七年（一九一八）ブラジル国のサントス港についた。耕地カフェー園で三カ年労務者として働いたが、当時ブラジルは、極端な不景気のため生活に困った。

そこで悲壮な決意を固め、マット、グロッソ州のカンポグランデを経て国境を越え、パラグゥイ川の下流、ラプラタ川から密航でウルグアイ国へ入国し、ウルグアイでアルゼンチン国への正式入国手続きを取得して入国した。

しかし、当時在留日本人はごくわずかで、言葉も知らず職もなく、三名は野宿して職を探したあげく、鉄工場、埠頭で労務者として働き、昭和六（一九二六）年洗染店を独立経営した。

三、海外における功労者

知念繁雄（アルゼンチン）

一九七八年　秋授章　勲六等旭日章。

知念氏は日本人会会長、沖縄連会長などを務め、法人社会に貢献した功績が認められて、今回叙勲されたもの。

（中略）

知念氏の略歴

一九〇七年、沖縄県国頭郡東村字川田で生まれる。一九二五年ブラジルに渡航。いったん一九二七年日本に帰国し、一九二九年に亜国へ自由渡航。一九三〇年に洗染店を独立経営し、現在に至っているが、その間、沖連会長、日本人会会長、亜拓理事などの公職につき、邦人社会の発展に貢献した。とくに沖縄県人間での指導者の一人としてよく知られている。

（『らぷらた報知』一九七八年四月二十九日より）

玉城福太郎（アルゼンチン）

一九八一年　秋授章　勲六等瑞宝章。

一八九七（明治三十）年、東村字川田に生まれる。

「昭和四年来亜、洗染業を経営するかたわら沖縄古典舞踊及び音楽をアルゼンチン国に導入、その紹介と普及に尽力。」

氏の舞踊はいわゆる〝素人芸〟ではなく、舞踊研究のため帰国、玉扇会家元の玉城盛義氏について舞踊を学び、教師免許を授与されている腕前の持主。文化的催しのある時は、頼まれればブエノスアイレス市はもちろんのこと、地方の遠いところへでも出かけて行くという熱心さで、日亜文化交流を通じて両国親善に貢献した功績は大きい。また「日本人共済会」の監査として公的事業にも協力している。八十三歳。沖縄県出身

（『らぷらた報知』一九八一年十一月三日より）

我如古　弥　助（アルゼンチン）

一九八六年　秋授章　勲六等瑞宝章。

一九一一（明治四十四）年、東村字川田に生まれる。

我如古弥助氏は昭和六年、同郷の知念繁雄氏の呼び寄せで来亜。ホセ・セ・パス地区の法人花卉園に就労。来亜二年目に同地区にて花卉園独立、若年ながら地域リーダーとしてホセ・セ・パス日本人共同出荷組合の設立に参画、支部長を務めた外、同地域双葉日本人学校の設立発起人、或いはプエノスアイレス日本語学校の理事として日系子弟の日本語教育に尽力。その後、洗染業に転じたが、ここでも洗染業協同消費組合の理事として同業者の親睦発展に貢献、また沖縄県人連合会の理事として、在亜東村人会会長として、在亜沖縄県人の親睦融和発展に尽くした。

その外、日亜福祉センター副会長または理事として邦人の高齢者福祉に尽くすなど社会活動に対するエネルギーは依然として尽きるところを知らない状態にある。

仲　村　信　義（アメリカ合衆国）

一八九二（明治二十五）年東村川田に生まれる。国頭農学校、盛岡高等農林学校卒業後、沖縄に帰り母校沖縄県立農学校の教諭を二年つとめた。一九一九年、畜産研究の目的で渡米、後ロサンゼルスに落ちつき、ガーデンやホテルの経営に従事する。

一九二六年、沖縄海外協会南加支部の幹事を振り出しに、一九二七年北米沖縄青年会へ入会、一九三四年在米沖縄県人会長、一九四〇年、沖縄協会の幹事となる。

またハリウッド・ガーデナー組合、南加ガーデナー聯盟、その会報『ガーデーナーの友』の発刊に参加して、総立ち退きまで活躍した。

戦中数年はニューヨークで、夫婦協力『北米新報』、「日米民主委員会」の活動を援助する。

戦後一九四六年、幸地新政氏と二人で全米を廻り、沖縄救援復興聯盟を組織し救援運動に尽力した。

日商文化センターの副理事長、民謡協会の会計、日系福祉援護会理事、北米沖縄クラブ理事、顧問で文化部長を九年間勤続、生涯の大部分を団体活動に終始し民主主義、民権擁護、平和運動に奉仕した。

文化活動功労者として一九六一年に文部大臣から木盃が贈られた。

一九七九年六月二十九日他界。

（『北米沖縄人史』一九八一年北米沖縄クラブ発行より）

久　高　将　光（ペルー）

一九八八（昭和六十三）年　春授賞　勲五等瑞宝章

一九一四（大正三）年東村川田に生まれる。

㈳海外在留邦人福祉功労者として授賞した。

㈳ペルー国カイヤオ日本人会会長。カイヤオ市サンスペニヤ街七四四番

奥本養松（ブラジル）

一九八八（昭和六十三）年　春授賞　勲六等瑞宝章。
一九〇七（明治四十）年東村川田に生まれる。
一九二七（昭和二）年一月十一日渡伯。
ブラジル国マット、グローソ州カンポグランデ市ネンテアビアドール・ペドロ街七八番。
海外在留邦人福祉功労者として授賞。
元カンポグランデ連合会評議員会会長。

当時の状況を報道した新聞記事――

■金に苦しむ毎日…移住者　将来に希望持てず

［沖縄タイムス・一九七三・七・十六］

同村では最近本土へ就職した若者が沖縄へ舞い戻るというUターン現象が多くなっている。それに加えて戦後海外に大きな希望を託して雄飛したアルゼンチンからのUターン現象も多くなりつつある。

昨年から今年にかけてアルゼンチンから三世帯の村出身者が引き揚げている。昭和二十五年から三十五年ごろまでに南米へと海外移住するのが多く見られた。

この時期に東村からは親戚の呼び寄せや青年隊終了後単身の計画移民など南米へ移住したのが十世帯、五十人になるという。

移住したものは転々と職を変えるなどして、現在はそのほとんどが洗濯業を営んでいるという。

戦後移民者は、資本力が弱く事業資金や渡航費などでそのほとんどの者が五千ドルから六千ドル相当の借金をし、それに担保力が弱く、普通の金融機関からの借り入れができないため、高利貸しや模合により資金の調達をしている状況にあるという。その金利も年利七〇％という想像を絶するほどの高金利の資金を利用し、毎週行う模合を掛金の五〇％も引き下げての資金ぐり、高金利にあえぎ台所は火の車。

さらに亜国通貨のペソの価値下落（一ドル対一千百ペソ）がインフレに拍車をかけている。

昭和三十四年に移住し今年の三月に家族そろって引き揚げて来た東村川田三八八番地、池原善尚さんは「大きな希望と夢を抱いて雄飛したが、渡亜当初から亜国の情勢が安定せず、インフレがひどく、この十三年間の毎日が金で苦しめられた。将来に希望が持てず、いつ亜国から脱出できるかを考え、沖縄に帰る準備のための十年余の生活であった。亜国在住の同胞の苦しみが脳裏に浮かんでしかたがない。政府、県は移民者への長期低利の事業資金の融資も考えるべきだ。現在東村出身者だけでも百五十人余の亜国在住者がいる。戦後移住者の殆どは旅費が準備できず、帰りたくても帰れないのが実情である」と話していた。

このような親類を再び沖縄へ呼び戻そうと送金の準備をしている人もいる。

四、出稼ぎ・移民・移住名簿

1、名簿作成について

沖縄県民の出稼ぎ先は、本土・台湾・南洋諸島に大別できる。本土出稼ぎは明治三十年代に始まり、大正中期以降に本格化する。行き先は主に京浜・中京・阪神の工業地帯に集中していた。川田の出稼ぎに関しては詳しい資料がなく、名簿作成にあたってはすべて聞き取りに頼らざるを得なかった。男性は南洋方面への出稼ぎが多く、女性は紡績工として関西方面に渡ったものが多かったようである。

移民名簿については、第二次世界大戦前（以下戦前期とする）と大戦後（戦後期とする）に分けて、下記の通り編集した。尚、東村は一九二三（大正十二）年四月一日に久志村から行政分離し、独立したために、「海外旅券下付表」には分村以前の住所は久志村、以後は東村と表記されているのが特長である。

注1　琉球政府作成の『戦後海外移住者記録カード』（国際協力事業団・沖縄国際センター所蔵）、在伯沖縄県人会編集の『ブラジル沖縄移民名簿』、『在伯沖縄県人会会員名簿』ならびに『住所録（一九八八年）』、ボリビアコロニア『沖縄入植二十五周年誌（一九八〇年）』を参考にした。

注2　引揚者名簿の作成は、太平洋戦争敗戦にともなう強制引揚者名簿の資料として『沖縄県史料』・『沖縄県史』及び『東村史』を参考にした。

注3　戦前期の移民名簿作成の資料は石川友紀氏（琉球大学教授）が収集した外務省外交史料館所蔵の「海外旅券下付表」（旅券発行の記録）の沖縄関係分を収集した資料を参考にした。

フクギ

2、出稼ぎ者名簿（上段は男性、下段は女性）

	氏名	旧姓	屋号
1	神谷勘定	比嘉	
2	神谷勘吉		後福地屋
3	神谷勘三		
4	神谷勘永		
5	仲村宜吉		比嘉
6	仲村宜三		
7	仲村宜徳		
8	仲村忠興	仲村渠	ヒガジョウ
9	比嘉正雄		サブロウヤー
10	比嘉参栄		
11	比嘉勇		東福地
12	吉本善幸		東松浜屋
13	宮平永源	比嘉	西前
14	玉村弥市	我如古	
15	中村広	仲村渠	ヒロシヤ
16	宮平義助	仲村渠	西屋
17	宮平義光		
18	金城政信	仲村渠	新門
19	金城長栄		
20	神谷勘栄	比嘉	後福地屋
21	金城良吉		良太屋
22	宮平次郎		西屋小
23	比嘉貞雄		大川端
24	吉本善幸		東浜屋
25	池原善一	仲村渠	
26	比嘉正雄		三五郎屋
27	金城長一		下新門
28	比嘉吉雄		東大屋小

	氏名	旧姓	屋号
1	大城ウト	仲村渠	前屋
2	仲本ナヘ	金城	新門
3	比嘉タケ	金城	良信屋
4	金城シズ	我如古	我如古小
5	金城ハナ	仲村渠	
6	比嘉ツル	仲村渠	
7	金城チヨ	比嘉	福地屋小
8	玉城ハル	比嘉	大屋小
9	宮平キヨ	仲村渠	仲安里
10	浦崎オタケ	浦崎	虎次郎屋
11	金城ナヘ	比嘉	神里屋小
12	平良花	奥本	天仁屋小
13	宮平スエ	比嘉	西屋
14	仲本苗	比嘉	
15	比嘉タケ	比嘉	
16	田島カマド	田島	大川端
17	新城マツ	比嘉	
18	比嘉キク	比嘉	東大屋
19	中村和	我如古	我如古小
20	神谷幸	比嘉	阪間屋
21	金城春	仲村渠	東比嘉屋
22	池原美智子	知念	仲本屋
23	井上ハツ	玉城	福地屋
24	比嘉ソノ	比嘉	大屋小
25	吉本ソノ	奥本	タダシゲヤー
26	金城信子	玉城	ヒガヤー
27	吉本美津	比嘉	東福地屋
28	久高ヨシ	比嘉	和仁屋
29	儀間佐枝	比嘉	羽地屋
30	知念枝美	吉本	東吉本小
31	金城文	比嘉	阪間屋
32	金城アキ	金城	新門

3、移民名簿

(1)アルゼンチン移民名簿（川田出身）

氏名	続柄	屋号	渡航年	居住地	家族
比嘉　桐巧㊙	主	東大屋	一九二三	アルゼンチン	ネリダ、オラシオエットル、リデア
神谷　ウト㊙	主			アルゼンチン	アダルベルト、ア
比嘉　英吉㊙	主	東大屋	一九二八	アルゼンチン	オスバルド、リベルタ、マリオ、マルタ
宮城　芳	妻	仲新里	一九三九	アルゼンチン	エルビサラ、キリスティナ、ベアトリス、フェルナンド
比嘉　源助㊙	主	勢頭屋小	一九一八 一九二三	ブラジル アルゼンチン	ファンカルロ、セリア、ミゲル、アドルフォ
比嘉カマド㊙	妻	大家小	一九二八	アルゼンチン	アルベルト、マルタ、オスカル
比嘉　弥吉㊙	主	前掟屋	一九一八 一九二三	ブラジル アルゼンチン	
比嘉善三郎㊙	主	羽地屋	一九二七	アルゼンチン	アリシア、ニカシオ、ホルヘ、アルベルト
大城　マツ㊙	妻	根路銘上東		アルゼンチン	イソリナ、エルネスト
比嘉　善孝㊙	主	羽地屋	一九二八	アルゼンチン	房子（長女在沖縄）
玉城福太郎㊙	主	前元屋	一九二九	アルゼンチン	ハツ、信子、昌伸
吉本　ウト㊙	妻	東吉本小		沖縄	
玉城　昌伸㊙	主	前元屋	一九五〇	アルゼンチン	リカルド、ノルマ、エクトル
金城　菊江	妻	吉本屋	一九五二	帰郷	二月四日　一九八八一月十二日
金城　良吉㊙	主	西新門小	一九二八	アルゼンチン	
知念　繁雄㊙	主	知念小	一九二五 一九二九	ブラジル アルゼンチン	春雄（故）、佑憲、ホルヘ、フェリサ、三男
饒平名ハル㊙	妻	饒平名	一九三一	ブラジル	弘和、洋子（メルセデス）
知念　佑憲	主	知念小	一九五〇	帰郷	万里子、えり子（グラシェラ）、裕子（シルビア）

池原　絹子	妻	仲村渠	一九五〇	帰郷	憲一（ルイスマリオ）祖母（カマド）
比嘉　馨㊙	主	鍛細工屋	一九三〇	アルゼンチン	哲弘、稔、和子（オフェリア）
金城　タケ	妻	良　真	一九三九	帰郷	エドゥアルド
比嘉　哲弘㊙	主	鍛細工屋	一九五一	帰郷	弘也、哲治グラディス、ベロニカ
宮城真知子	妻	天仁宗	一九五一	帰郷	祖母（金城カナ）
宮平　義栄㊙	主	西　屋	一九三一	アルゼンチン	カステラル、メルセデス、スレマ、ファンカルロ、ジョランダ
比嘉　マツ	妻	坂間屋		アルゼンチン	ベアトリス、テレサ、カステラル
宮平　大吉㊙	主	西屋小	一九五二	アルゼンチン	ヨシ子、隆夫、晃
比嘉　ツル㊙	妻	東大屋	一九五二	アルゼンチン	
宮平　隆夫㊙	主	西屋小	一九五二	アルゼンチン	エドアルド、クラウディオ、アデゥリアナ、パトリシヤ
島袋リディア㊙	妻	島　袋		アルゼンチン	
宮平　晃	主	西屋小	一九五二	帰郷	ダニエル、ミルタ
和仁屋知恵子㊙	妻	東又吉		アルゼンチン	
我如古弥助㊙	主	我如古	一九三一	アルゼンチン	エツトル、ネリダ、マリオ、フリオ
比嘉　豊子㊙	妻	鍛細工屋小	一九三九	アルゼンチン	
玉村　弘㊙	主	我如古	一九五九	アルゼンチン	ミゲル、サトシ
美代子㊙	妻				
大城　ユキ（再婚）	妻	実　家		アルゼンチン	
玉村　秀雄	主	我如古	一九五九	帰郷	ロベルト
真喜志節子	妻	首里真喜志	一九六五	帰郷	
玉村　弥正㊙	主	我如古		アルゼンチン	
玉村　弥市㊙	主	我如古	一九六八	アルゼンチン	和子、則子、秀雄、良子、孝子、菅子、君子、久子
金城　カメ㊙	妻	和精屋		アルゼンチン	
奥本　養弘	主	根謝味屋	一九五五	帰郷	

池原　律子	妻	仲村渠	一九五九	帰郷	
奥本　養正	主	根謝銘屋	一九六四	帰郷	
奥本　養雄	主	根謝銘屋	一九五五	ブラジル	
池原　善尚	主	仲村渠	一九五九	帰郷	加代子
山城ユキ子	妻	前新門	一九六四	帰郷	
池原　カナ㊙		金鍛工屋	一九六四	アルゼンチン	
池原　勝廣	主	仲村渠	一九五九	帰郷	
上地　清美	妻	山下		帰郷	
玉城　晃	主	鍛細工屋小		帰郷	
金城　光栄㊙	主	後新門	一九六四	アルゼンチン	克幸、久雄、一代、智秀
玉城　信子	妻	前元屋	一九六四	帰郷	学、豊子、岳
金城　克幸	主	後新門	一九六四	帰郷	
石川美智子	妻	石川小	一九五九	帰郷	
寺元　幸三	主	寺本		帰郷	リサカレン、ガブリエルユジ
金城　一代	妻	後新門	一九六四	帰郷	
中村　幸市	主	宜三屋		帰郷	哲郎、幸治、琉治、春男、みり子、ゆり
しげ子	妻	羽地屋		帰郷	

(2) ブラジル移民名簿（川田出身）

氏　名	続柄	屋　号	渡航年	居住地／家族
比嘉　善治㊙	家長	神里屋小	一九一八	ブラジル、コレゴ、リツコ
山城マカト㊙	妻	田港中屋	一九一八	ブラジル、コレゴ、リツコ
吉本　真進㊙	従兄	浜松屋小	一九一八	ブラジル、コレゴ、リツコ

吉本　真平㊞	従兄	浜松屋小	一九一八	ブラジル、コレゴ、リツコ
比嘉　弥吉㊞		前掟内屋	一九一八	ブラジル、コレゴ、リツコ
比嘉　蒲太㊞	家長	仲本屋	一九一八	ブラジル、コレゴ、リツコ
ウシ㊞	妻		一九一八	ブラジル、コレゴ、リツコ
比嘉　貞吉㊞	従兄	坂間屋	一九一八	ブラジル、コレゴ、リツコ
知念　三郎㊞	従兄	知念小	一九一八	ブラジル、コレゴ、リツコ
知念　貞徳㊞	従弟	知念小	一九一八	ブラジル、コレゴ、リツコ
比嘉　源助㊞	従弟	勢頭屋小	一九一八	ブラジル、コレゴ、リツコ
仲村渠宜作㊞	家長	比嘉屋小	一九一九	ブラジル、パルメイラス
奥本　マツ㊞	妻	天仁屋小	一九一九	ブラジル、パルメイラス
吉本　善助㊞	従兄	東松浜屋	一九一九	ブラジル、パルメイラス
奥本　養志㊞	妻弟	天仁屋小	一九一九	ブラジル、パルメイラス
仲村渠八之一㊞	家長	前　屋	一九一九	ブラジル、パルメイラス
知念オフジ㊞	妻	実家知念小	一九一九	ブラジル、パルメイラス
比嘉　桐巧㊞	妻甥	東大屋	一九一九	ブラジル、パルメイラス
金城　良惣㊞	主	新門小	一九二六	ブラジル、イタリリー
吉本　仙吉㊞		松浜屋	一九二六	ブラジル
比嘉　カマ㊞		板間屋	一九二六	ブラジル、コレゴリコ
比嘉　貞喜㊞		板間屋	一九二六	ブラジル、コレゴリオ
奥本　養吉㊞	主	根謝銘屋	一九二六	ブラジル、イタリリー
吉本　カネ㊞	妻	神里屋小	一九二六	ブラジル、イタリリー
比嘉　太郎㊞	主	大屋小	一九二七	ブラジル、イタリリー
吉本　仁吉㊞			一九二七	ブラジル、イタリリー
吉本オハナ㊞			一九三二	ブラジル、ジョゼテオドロ

吉本　真正㊙		松浜屋小	一九二二	ブラジル、ジョゼテオドロ
知念　良馨㊙	家長	知念小	一九二二	ブラジル、ジョゼフェードロ
比嘉　ノシ㊙	妻	勢頭屋小	一九二二	ブラジル、ジョゼフェドーロ
比嘉　ウト㊙	母	大屋	一九二二	ブラジル、ジョゼフェドーロ
金城　来善㊙		後新門	一九二二	ブラジル
吉本　カナ㊙	仙吉妻	松浜屋	一九四〇	ブラジルパストス
吉本　良子㊙	仙吉長女	松浜屋	一九四〇	ブラジルパストス
金城　ナベ㊙	良惣妻	新門小	一九四〇	ブラジル、プレシデンテプルデンテ
金城　武治	良惣長男	新門小	一九四〇	帰郷
奥本　養松㊙	主	天仁屋小	一九二七	ブラジル、マトグロソ
金城　衛	主	福地屋小	一九五七	帰郷
吉本　保敏㊙	家長	松浜屋	一九五七	ブラジルセーリア／健一㊙、保行㊙、あさみ、均、まり子、ヒデキ、マリオ
富子	妻			帰郷
健一㊙	長男			長女サユリ、次女キヨミ
保行㊙	二男			長男幸男、長女みどり
あさみ	長女			ヒロミ、ヤスオ、ユウジ
均	三男			ネサ、ニニヤ、ケリ
まり子	二女			栄次、みゆき、タケシ
ヒデアキ	四男			ヒデオ、アキラ、キミオ
マリオ	五男			キミオ、ミキオ、トミ

(3) ペルー移民名簿

氏名	続柄	屋号	渡航年	居住地／家族
久高　将光㊙	主	古島久高	一九三〇	ペルー・カリャオ

上地　ナヘ㊙	妻	東上地		ペルー・カリャオ
トマス・トシオ㊙	長男		二世	ペルー・カリャオ　長女セシリア、次女パトリシア
佐野テルミ	妻			
ミゲル・トシフブ	次男		二世	ペルー・カリャオ　長男ミゲル、長女ベアトリス、次女リリアナ、三女カリ
渡辺ミチ子	妻			
ファン・ツトム	三男		二世	ペルー・カリャオ　長男ファン、長女ウエンディ
奥間ケイ子	妻			
久高　将徳㊙	主	古島久高	一九六四	帰郷
久高　ヨシ	妻	利仁屋		帰郷
金城　勇仁㊙	主	金　城	一九一九	ペルー・カニエテ　第六五回静洋丸
金城　松房	主	新門小	一九一九	ペルー・カニエテ　第六五回静洋丸

4、南方・満州方面からの川田引揚者氏名

引揚者氏名	外地に於ける住所
大宜味　直仁	トラック島
金城　長栄	ポナペ島マタラニームレイタオ
ツル	
君子	
常子	
城間　栄一	ポナペ島マタラニームレイタオ
大宜味　直栄	トラック諸島水曜島オリップ

奥本　ヨシ	コロール町六丁目六区三班
大宜味　朝三郎	ポナペ島マタラニームレイタオ
マツ	
マツ子	
好子	
比嘉　貞次	満州
渡嘉敷　直信	満州
中村　廣	ポナペ島マタラニームレイタオ

比嘉善吉	ポナペ島マタラニームレイタオ
與儀実守	ポナペ島マタラニームレイタオ
儀間光徳	ポナペ島マタラニームレイタオ
和	
幸子	
中村ユキ	パラオ諸島コロール町

5、関連新聞記事

■南米移民者の歓迎会

［沖縄タイムス・一九七五・十・二］

東村川田区（比嘉博昭区長）はこのほど同公民館で南米から郷土訪問した同区出身者の歓迎会を開いた。大正七年から昭和初期にかけて移民した人たちで年をとり、生活が安定すると幼少のころ育った郷里を思い、郷愁の念はつのるばかり、海洋博を期に郷土訪問という夢を実現したもの。

同区出身者の訪問者はアルゼンチンから四人、ブラジル六人、東京から一人の計十一人で、古里を出てから長い人で五十七年、短い人で二十五年振り。古里の変わりように目をみはっていた。

歓迎会には訪問者全員と、区民多数が出席、二十年ぶりに復活した豊年祭もかねて、青年会、婦人会、成人会員などの郷土芸能を観賞しながらくつろいだ。

訪問者から記念としてアルゼンチン国旗と記念盾が川田区へ送られ、川田区から記念写真が一人一人に送られた。この度の訪問者は比嘉善次（八四歳）五七年前渡伯、與本養吉（七四歳）五〇年前渡伯、知念ウサ（七三歳）五一年前渡伯、與本養松（六九歳）四四年前渡伯、比嘉三郎（七一歳）五一年前渡伯、比嘉タケ（六四歳）五〇年前渡伯。我如古弥助（六三歳）四五年前渡亜、金城ノブ（五三歳）十一年前渡亜、知念佑憲（四六歳）二五年前渡亜、知念絹（四六歳）二五年前渡亜、與本養善（七六歳）五〇年前上京。

第六章　人　物

第一節　人物一覧表

川田は創設から現在まで幾多の先人達によって築かれ、代々引き継がれて来たが、その歴史の流れの中で明治の中期頃までは、自治は無く、中央からの統治（役人による）を受けていたために、歴史に名を残すような川田出身の人物は出ていない。しかし、一八八七（明治二十一）年、字平良に学校が開設され、学校教育が始まると、そこに学んだ人達を中心に社会の開化が進み、その中から社会的なリーダーとして名を成し語り継がれる人々が出るようになった。

このリーダー達の啓蒙によって、大正の末期から昭和の初期（一九二五年頃）にかけて区民の教育熱も高まり、社会の各方面で活躍する人物が多く出るようになった。

このような教育への関心、人材育成への関心は、最近少し低調傾向にはあるが、川田の社会的気風として現在も保たれ引き継がれ、有能な人材を多く輩出している。これら川田の人物を公務に携わった（過去並びに現在も）人物を中心に、第一節で人物一覧にまとめ（勤務年数一年未満の臨時職員を除く）、第二節でその中の主だった人々やユニークな人々の略歴を紹介した。

一覧表は次の分野にまとめた。

村役場　村議会議員　東村農業協同組合　村農業委員会　村農業協同組合理事・幹事　教職員　教育委員会所属職員　医療関係　警察関係　消防関係　水道公社（業局）関係　国・県関係　川田区伝統芸能継承関係（八月踊り、エイサー）　村政功労被表彰者、川田共同店専務

池原貞雄博士

第二節　人物略歴

略歴を紹介する人物は原則として次の事項を目安とした。

①その人の活動や役割が国や県に及び、社会の進展に貢献し、県民に知名度の高い人物。

（池原　貞雄・吉本　久也・玉城　幸男
比嘉　貞男・奥本　健・金城美智子）

②社会的権威の高い賞（村政功労賞以上）を授賞している人物。

③各分野における長、管理者

ア、官庁、村役場、（村三役、課長以上）
イ、村会議員は全員
ウ、村農業協同組合は村役場に準ずる
エ、各種団体の長、または経験者（村以上の）
オ、教職員は校長
カ、警察官は警部以上

池原貞雄

一九一六（大正5）年八月三日生
一九三〇（昭和5）年、沖縄立第三中学校入学
一九三五年、沖縄県立師範学校本科第二部入学
一九四〇年、東京高等師範学校理科第三部入学
一九四三（昭和18）年九月、同校同部卒業同年九月三十日
　沖縄師範学校助教授就任
一九四四年十月～一九四五年七月二日、沖縄戦。護郷隊へ
　召集、北部山岳地帯を転戦後終戦
一九四六（昭和21）年三月、辺土名高等学校創立に参画
　（田井等高等学校辺土名分校主事）
一九四七年（昭和22）年、辺土名分校が辺土名高等学校と
　なる（教頭）
一九五一（昭和26）年五月、琉球大学助教授就任。同年九
　月ミシガン大学人事交流で渡米
一九五八（昭和33）年、教授に昇任
一九六一（昭和36）年、東北大学より「理学博士」の学位
　を受ける
一九六一（昭和36）年、琉球大学文理学部長

一九六七（昭和42）年、琉球大学第七代学長就任
一九八二（昭和57）年四月、琉球大学定年退職、琉球大学名誉教授の称号を受け現在に至る

実績と功績の概略

同氏は大学教授としてその任に専念すると共に、学者として五十年に亘り琉球列島の自然に棲息する生物の調査研究を続け、五十件余の学術論文を発表、著書、編著、単行本各種研究冊子等への寄稿も多数に及んでいる。又、その専門性から行動する学究として、沖縄県における「自然環境保護」に関する多くの審議会、協会の委員長、理事長、会長を務め、「自然環境の保護・保全」に尽力すると共に、県文化財保護審議会々長、県文化協会々長等も務め、県の文化振興にも力を尽した。その他、県の知的リーダーとして幅広く県政上の各種審議会や諮問委員会に参与、参画し、県政発展のために多大な貢献をした。

受賞歴　（多数につき、一部省略）

叙勲、勲二等瑞宝賞〔一九八八（昭和63）年十一月〕
環境庁長宮感謝状（自然保護への貢献）〔一九八一（昭和56）年〕
第十七回沖縄タイムス賞（自然保護に関する学術調査・啓発の功績）〔一九七三（昭和48）年七月〕
琉球大学学長賞（琉球大学への貢献）〔一九八二（昭和57）年四月〕
第十九回琉球新報賞（学術研究と教育に尽した功績）〔一九八三（昭和58）年九月〕
一九九一年度県功労賞〔一九九一（平成3）年十一月三日〕
那覇市長表彰（那覇市政功労賞）〔一九九三（平成5）年五月〕
東村村長表彰（村教育振興功労賞）〔一九九八（平成10）年四月〕
那覇市文化協会長表彰（市、文化振興功労賞）〔二〇〇二（平成14）年五月〕
沖縄県知事表彰（環境保全行政の推進への貢献）〔二〇〇二（平成14）年八月〕
—多数につき、以下省略—

吉本久也

一九七三年五月二十九日生。
ウェイトリフティング一〇五K超級日本記録保持者。
アトランタオリンピック（一九九六年九月アメリカにて開催）、シドニーオリンピック（二〇〇〇年九月オーストラリアにて開催）に、連続出場。
東村名誉村民（第二号）二〇〇〇年九月認定。
如何に天性の能力に恵まれているとはいえ、日本一を極め、それを十年余も保持し、二度もオリンピックに出場するということは並大抵のことではできない。
久也は父久昭、母光子の四人兄妹の二男として川田に生

まれ、東小中学校、那覇西高等学校を経て、二〇〇〇年三月法政大学を卒業、東村教育委員会に勤務している。

小学校五年生のとき、児童オリンピックに出場、これを機に足腰を鍛える目的で、兄弟や従兄弟達と共に川田東の砂浜での走り込みが行われた。これを見守り、励まし、長年に亘り継続させたのは叔父に当たる吉本勲氏である。

その成果は翌年の児童オリンピックで、小六の砲丸投げ一位として顕れた。

この中学校卒業まで続いた砂浜での走り込みによって、足腰はもとより、体全体が鍛えられ、またそれを継続する苦しさに堪える気力・根性が養われ、心身共にその後の競技力の基になっていると、本人も振り返っている。

那覇西高等学校在学中は、陸上競技部に所属し、主に砲丸投げに集中した。高校二年のとき、幸運にも当時奥武山運動公園を管理していた元オリンピック選手の平良朝治先生の眼に止まりウェイトリフティングを勧められ、競技部の砲丸投げと平良先生の指導の元にウェイトリフティングと、二足のワラジで練習に励んだ。

その結果、一九九一年の高校三年のとき、インターハイで砲丸二位、同年十一月の石川国体でウェイトリフティング初優勝した。

大学進学後は、大学のウェイトリフティング部で小平紀生監督と平良朝順（朝治先生の兄）コーチ二人の指導を受ける幸運に恵まれ、どんどん成績を上げていった。

その間、

一、国内大学選手権（インカレ）四連覇

一、一九九一年石川国体から二〇〇三年の国体まで十二回出場し、全て優勝

一、一九九四年のアジア大会（五位）、一九九六年のアジア選手権（三位）へ出場

一、一九九二年五月、世界ジュニアウェイトリフティング出場以来、世界選手権六回出場（ブルガリア、チェコ、フィンランド、中国、タイ、韓国）

等の実績を積み、日本ウェイトリフティング一〇五K超級に十二年余に亘り、不動の地位を築いた。現在は二〇〇四年のアテネオリンピックを目指し特訓中である。

玉城幸男

一九一九（大正8）年二月二十四日生

一九三〇（昭和5）年、沖縄県立第二中学入学

一九三六（昭和11）年、沖縄師範学校入学

一九三八（昭和13）年、同校本科卒業、同年同校専攻科入学

一九三九（昭和14）年、同校専攻科卒業。卒業と同時に浦添村仲西尋常高等小学校訓導

一九四三（昭和18）年、召集を受け鹿児島海軍航空隊予科練体育教官拝命
一九四五（昭和20）年、沖縄へ派遣され終戦
一九四六（昭和21）年、高江初等学校教頭
一九四七（昭和22）年から一九五一年までの六ケ年間東初等学校教頭
　その間川田区東村辺土名地区の陸上競技の普及指導に尽力地区や県大会への出場選手を多数育成スポーツによる郷土再建に貢献した
一九五一（昭和26）年、沖縄工業高等学校へ転出、その後仲西中学校を経て
一九六〇（昭和35）年、琉球政府文教局保健体育課指導主事
一九六八（昭和43）年、琉球政府東京事務所渉外官
一九七六（昭和51）年、秩父宮賞（陸上競技の功績）受賞
一九六九（昭和44）年、調査計画課長
一九七四（昭和49）年、県立那覇養護学校長を経て浦添中学校長、仲西中学校長を歴任。
一九七九（昭和54）年、仲西小学校で定年。その間一九七二（昭和47）年から一九九二（平成4）年までの二十年間は沖縄女子短期大学非常勤講師も兼任。
　以上の様に広い立場で教育に専念すると共に多くの体育協会、体育連盟、体育研究会等の指導者、推進者として沖縄県の体育教育、スポーツの振興に貢献した。（スポーツ欄を参照）

比嘉貞男

一九一七（大正6）年十一月十五日生。
　スポーツ万能で特に跳躍に秀で、戦前から村や郡の選手として活躍し、戦後は辺土名高等学校で奉職の傍ら、地域の選手、指導者としてスポーツの振興に努めると共に川田区や村の再建復興に尽力した。
　一九五二（昭和27）年十二月、コザ市へ転出して丸栄商会を創立（タイル地、建築資材全般を扱う）。
　コザ市へ転出後も本業の傍ら、アンテロープ陸上クラブや、ランナーズクラブ等のスポーツクラブを通して青少年や後進の指導に当たり、地域の競技力の向上に努めると共に、社会体育（歩け歩け運動や健康マラソン等）の普及にも尽力した。又、沖縄県体協役員として全県的な立場からもスポーツの振興に寄与した。
　更にスポーツ以外にも社会環境、教育・福祉の面でも幅広い活動を行い、多くの表彰を受けている。

受賞歴

琉球政府感謝状（全琉緑化推進功労）
〔一九六〇（昭和35）年八月〕
琉球政府行政主席表彰（第一回全琉緑化大会）
〔一九七〇（昭和45）年七月〕
沖縄県知事表彰（復帰記念植樹功労）
〔一九七二（昭和47）年十一月〕
コザ市長表彰（沖縄こどもの国建設功労）
〔一九七三（昭和48）年十月〕
沖縄県教育委員会表彰（社会体育普及振興）
〔一九八一（昭和56）年十月〕
文部大臣表彰（コザ走友会代表スポーツ振興）
〔一九八一（昭和56）年十月〕
文部大臣表彰（体育の普及振興）
〔一九八四（昭和59）年十月〕
沖縄県知事表彰（グレイシャスクリーン運動功労）
〔一九八六（昭和61）年十月〕
沖縄タイムス賞（健康マラソン普及）
〔一九八七（昭和62）年十一月〕
日本赤十字社銀色有功賞〔一九九八（平成10）年一月〕
東村功労賞（スポーツ振興功労）〔一九九八（平成10）年四月〕
その他、沖縄県・沖縄市体育協会、沖縄アンテロープ陸上クラブ、ランナーズクラブ、沖縄国税事務所等々、多数につき詳細は省略。

知念貞馨

一八八六（明治19）年三月八日生。

久志村の時代、現在の東村は上方（ういほう）と呼ばれる避遠の地で、道らしい道もなく瀬嵩にあった役場へ行くにも、殆んど西海岸の塩屋、名護を経由して二日がかり（往復）という苦労と不便をかこっていた。又、村議会の開催時には、議員は十日余も瀬嵩に泊り込まなければならなかった。このような苦労、不便さ、経済的負担を背景に分村運動が起り、同氏は分村運動のリーダーとしてその先頭に立ち東奔西走、私財を投げ打って、交通の便が極端に悪い時代に何回となく上京し、当時の内務省と粘り強い折衝を重ねた。その努力が実り、一九二三（大正12）年四月一日、遂に念願の分村が認められ東村が誕生した。

東村誕生と共に一九二三（大正12）年四月～一九二七（昭和2）年、初代村長に就任。更に一九三七（昭和12）年三月～一九三九（昭和14）年九月、第五代村長を務める。

東村の誕生と村政の基盤を築いた功労者である。農林業振興のための基盤整備に力を注ぎ、古島から峠（エーラ下り口）までの林道や福地への農道、平良橋から福地橋に至

る九十間道路の建設、整備等を行ない、新生東村の発展に多大な功献をした。

一九四四（昭和19）年七月没。

注・戦前（一九四五年まで）は村長が議長を兼務した。

奥本　健

一九七九（昭和54）年十二月十七日生。

奥本健の属する歌い踊るダンシングチーム「ダ・パンプ」は現在、テレビや舞台活動で広く全国に知れ渡り、特に若者達にとっては、アイドル的存在になっている。

ケンの父は、川田区出身の奥本勝巳氏で、ケンは奥本養幸氏の孫に当たる。ケンは父親の職務の都合で浦添市で育ち、幼少の頃から歌唱、ダンスに特別の興味があった。浦添市の宮城小学校、浦添中学校を経て、一九九四年四月県立那覇工業高等学校入学と同時にアクターズスクール入学。一九九六年その才を認められ上京。同年に同じアクターズスクール出身のイッサ、シノブ、ユキナリの四人で「ダ・パンプ」を結成。同じ沖縄出身の歌手安室奈美恵の所属する「大平芸能社」に所属し、一九九七年六月、オリコンチャートに初登場し、これを機に芸能活動を開始。

以後「ダ・パンプ」の一員として

一、テレビレギュラー番組出演（ＴＢＳ系）

一、毎年各県の主要都市で数多くのイベント、ライブへ出演

一、東京武道館、沖縄コンベンション等での数多くの記念イベント出演

一、二〇〇一年七月、沖縄サミット一周年記念音楽祭に安室奈美恵等と共に出演

一、アジアフェスティバル（タイ・バンコック）、日蘭文化交流四百年記念イベント、アジア音楽フェスティバル（マレーシア・クワラルンプール）等に日本代表として出演

一、一九九八年のＮＨＫ紅白歌合戦初出場以来、連続五回の出演

又、その間に

一、第三十一回日本有線大賞を受賞（一九九八年）

一、第四十回輝く日本レコード大賞出演優秀作品賞を受賞（一九九八年）

金城　美智子

墨絵作家。両親は東村川田出身。東京のファッション業界で活躍中発病（メラノーマ）、二十年ぶりに故郷沖縄に戻り、墨絵の世界に入る。

一九八四年「城野宏画集」を独学。失われつつある沖縄の原風景を求めて沖縄の島々を描き続ける。一九九九年には、地中海マルタ共和国に移り住み、三年間地中海の島々の光と影を求めて素描、創作をした。

一九八五年、日輝会　全日本墨絵展で銀賞受賞。同年日

輝展（東京都立美術館）で特選受賞。一九八八年　日輝会会長賞など数々の賞に輝く。

一九八六年、沖縄国際物画廊での個展を皮切りに、那覇市民ギャラリー（一九八八年）、京都市立美術館（一九九一年）、ムディナ大聖堂カティドラル美術館（一九九七年）、中国美術館（一九九八年）、浦添美術館（二〇〇二年）などで個展、企画展を開催。金城美智子がとらえた「光と影の世界」は、その精神性の深さが観る人に大きな感動を与えている。著書に墨絵集「光と影の世界」（vol.1～vol.6）、首里城正殿の鐘と墨絵「光と影の世界」（共著）がある。

池原善通

一八八九（明治22）年六月八日生。

戦前の川田共同店（産業組合）の設立と運営に参画区民の生活の安定・向上を図り区の発展に寄与する。

第三代助役〔一九三一（昭和6）年～一九三五年の四ヶ年〕、第六・七代村長〔一九三九（昭和14）年～一九四五年〕を務め、太平洋戦争、沖縄戦の厳しい時代を乗り切る。

一九四五（昭和20）年十二月五日没。

比嘉幸一

一八七六（明治9）年生。

一、分村当初・初代収入役〔一九二三（大正12）年～一九二七年〕

二、第二代収入役〔一九二七（昭和2）年～一九三一年〕

川田区にとって杣山払下げの功労者（詳細は別冊三六二頁参照）

比嘉好吉

一、戦前の川田共同店設立とその運営に参画売店主任等を務める

二、第六代東村収入役〔一九三九（昭和14）年～一九四一年〕

三、第七代東村助役〔一九四六（昭和21年）～一九四七年〕

平良平助

一九〇六（明治39）年四月五日生。

第六代川田区長〔一九五〇（昭和25）年～一九五三年〕

第三代東村議会議員〔一九五三（昭和28）年～一九五四年〕

第十代・十一代東村村長

〔一九五四（昭和29）年～一九六二年（二期八年）〕

従来の山依存の生活からの脱却を図るため村有林を住民（村民）へ払下げ譲渡（有償）し、村特産品のパイン生産の基を築く。

奥本養幸

一九二四（大正13）年二月二十日生。

東村が山依存の厳しい生活からパインを中心とする山地農業への転換期に三期十二年に亘り村収入役の要職に在り、村政を支え村の振興発展に尽した。

略　歴

一、東村書記〔一九四六年五月〕
二、郡島政府農林食糧調査官
〔一九五〇年七月～一九五一年四月〕
三、東村戸籍調査員〔一九五五年三月～一九五六年九月〕
四、東村書記〔一九六〇年七月～一九六三年三月〕
五、東村林業課長〔一九六三年四月～一九六五年八月〕
六、東村庶務課長〔一九六五年七月～一九六八年十二月〕
七、東村収入役（三期）第十六代・第十七代・第十八代
〔一九六八年一月～一九八〇年一月〕
八、北部市町村収入役会会長（初代・二代）
〔一九七二（昭和47）年四月～一九七四年三月〕
○川田区々長（第二十二代）〔一九八四年四月～一九八九年三月〕
○川田区ダム対策委員会事務局長
〔一九七九年四月～一九九六年十二月〕
十六年間に亘りダム問題解決のため尽力
○川田区旧盆八月踊り舞踊指導者
○字誌編集委員

受賞歴

東村村政功労表彰〔一九八四（昭和59）年十一月〕
沖縄県市町村職員互助会功労賞〔一九八〇（昭和55）年七月〕

平　良　昇　康

一九四一（昭和16）年六月二十三日生。
一九六〇（昭和35）年九月東村役場入所。
財務課長、税務課長、総務課長（九年）を歴任。
第十七代助役〔一九八四（昭和59）年～一九八七（昭和62）年〕
第十九代、第二十代村長
〔一九八七（昭和62）年～一九九五（平成7）年（二期八年）〕
一、パイン自由化によるパイン産業の衰退を防ぎ、その安定化のための諸施策の推進を図る。
一、村内養豚場による環境汚染防止対策として畜産団地を造成し、村内養豚場の移転・集約に尽力
一、養豚場移転に伴う補助金支出の件で、提訴を受け、その案件処理に尽力、解決を図る。

平　良　尚　道

一九四五（昭和20）年十月十一日生。
東村役場入所（建設課）〔一九七四（昭和49）年五月一日〕
企画課長就任〔一九八〇（昭和55）年四月一日〕
建設課長就任〔一九八四（昭和59）年十一月十日〕
経済課長就任〔一九九二（平成4）年七月一日〕
第二十代助役〔一九九五（平成7）年～一九九九（平成11）年〕
第二十一代助役
〔一九九九（平成11）年～二〇〇三（平成15）年〕
一、パイン等第一次産業の振興、水道・電気・道路等ライフラインの整備。
一、交流型農村の振興を目指す施策を積極的に推進、村政

の活性化を図る。

受賞歴

東村村政功労賞（行政功労）〔二〇〇二（平成16）年十月三十日〕

比嘉秀和

一九五四（昭和29）年八月三日生。

一九七五（昭和50）年五月初任以来、経済課、建設課等を歴任。

一九九七（平成9）年農業委員会事務局長、一九九九（平成11）年建設課長を経て、二〇〇三（平成15）年七月、第二十二代助役に就任。「開かれた交流型農村」を目指しその基礎作りに尽力している。

吉本健夫

一九四九（昭和24）年九月七日生。

一九七三（昭和48）年東村役場入所。

民生課長、住民課長、建設課長、総務課を経て、総務課長を歴任。二〇〇四（平成16）年現在、東村教育委員会教育課長勤務歴三十一年。

役場入所以前、一九七〇（昭和45）年から二年間、米国派遣農業研修生として渡米（琉球政府）、一九七二（昭和47）年帰国、翌年役場へ入所した。

一九七三（昭和48）年四月から、一九七五年までの二年間、東村青年団協議会の会長として村青年会の育成とその活動推進に尽力すると共に国頭郡青年団協議会の役員としてその発展に貢献した。

受賞歴

沖縄県国民健康保険団体連合会長表彰〔一九八二（昭和57）年十月〕

国民健康保険中央会長表彰〔一九八八（昭和63）年十月〕

金城孝

一九二六（大正15）年八月二日生まれ

沖縄県立農林学校林科卒業。一九四三（昭和18）年十二月卒業と共に熊本営林局沖縄営林署へ入署。

一九四五年沖縄戦により同署を退職。

一九四七（昭和22）年、東初等学校教員を経て東村役場入所。

一九五六（昭和31）年～一九六六（昭和41）年産業課長

一九六六（昭和41）年、琉球政府農林局へ転出。

一九八六（昭和61）年三月、沖縄県農林局北部生改普及所次長で退職。

金城政信

一九一一（明治44）年四月二十五日生。

戦前から区の有志として区の行政・共同店の運営等に深く関わり更に村議（一期）として村政にも参与した。戦後も区長や、代議員を長期間務め、区の共同店や村農協の設立に参画し、更に村民のリーダーとして村議会議員や議長

として戦後の区や村の復興やその発展に尽力した。

職　歴

一、第十四代区長〔一九四七（昭和22）年四月～一九四八年三月〕
一、村議会議員〔一九五四（昭和29）年～一九六二年十月〕
一、第五代副議長〔一九六二（昭和37）年十月～一九六三年五月〕
一、第十五代・十六代・十七代議長
〔一九六三（昭和38）年五月～一九七四年九月〕
議員歴、五期二十年

受賞歴

沖縄県市町村議会議長会表彰
〔一九六三（昭和38）年五月三十一日〕
沖縄県市町村議会議長表彰
〔一九七一（昭和46）年五月二十八日〕
全国町村議会議長表彰〔一九七一（昭和46）年二月四日〕
東村功労表彰〔一九七八（昭和53）年四月一日〕
自治大臣表彰（地方自治功労）
〔一九九二（平成4）年八月二十一日〕
叙勲　勲五等瑞宝賞（地方自治功労）
〔一九八四（昭和59）年十一月三日〕
東村農業協同組合理事　第一期・二期・三期
〔一九五九（昭和34）年七月～一九六四年九月〕

吉本好助

戦前から有志として区の行政、共同店の運営等に深く関わり、戦後も区長や代議員として区の行政に関わると共に、共同店の設立、運営に参画し区の復興発展に尽くした。

又、東村農業協同組合設立の発起人として同組合を設立し、初代から三代までの組合長を歴任しその基礎固めを行うと共に、村議会議員として村政の発展に尽力した。

職　歴

一、第十三代川田区長（戦後第一代）
〔一九四六（昭和21）年四月～一九四七年三月〕
一、第二～七代村議会議員（六期連続二十カ年）
〔一九五〇（昭和25）年～一九七〇年九月〕
一、第二、四代副議長
〔一九五二（昭和27）年九月～一九六二年十月〕
一、東村農業協同組合設立（発起人代表）
〔一九五九（昭和34）年四月〕
一、東村農業協同組合長（初代～三期）
〔一九五九（昭和34）年七月～一九六四年八月〕
一、東村農業協同組合第四期理事
〔一九八四（昭和59）年九月～一九六六年八月〕

受賞歴

沖縄県市町村議会議長会表彰
〔一九六三（昭和38）年五月三十一日〕
全国町村議会議長表彰〔一九七一（昭和46）年二月四日〕
東村功労表彰〔一九七八（昭和53）年四月一日〕
叙勲　勲五等瑞宝章（地方自治功労）

〔一九八四（昭和59）年十月三十日〕

吉本清正

一九二八（昭和3）年十一月三十日生。

五期二十年に亘り、村議会議員を務め、村政に尽くすと共に長年に亘り、区の代議員として区制の発展に寄与した。

村議員暦

一、第八代　〔一九七〇（昭和45）年九月～一九七四年九月〕
一、第九代　〔一九七四（昭和49）年九月～一九七八年九月〕
一、第十一代〔一九八二（昭和57）年九月～一九七六年九月〕
一、第十二代〔一九八六（昭和61）年九月～一九九〇年九月〕
一、第十三代〔一九九〇（平成2）年九月～一九九六年九月〕
一、第十三代村議会副議長を務める

受賞歴

東村功労賞（村政功労）〔一九七八（昭和53）年十一月三日〕

中村巽

一九二九（昭和4）年八月二十日生。

四期連続十六年村議会議員を務めて村政に尽くすと共に、長年に亘り区長、区代議員を務め、区政の発展に関与した。

村議員歴

一、第八代〔一九七〇（昭和45）年九月～一九七四年九月〕
一、第九代〔一九七四（昭和49）年九月～一九七八年九月〕
一、第十代〔一九七八（昭和53）年九月～一九八二年九月〕
一、第十一代〔一九八二（昭和57）年九月～一九八六年九月〕

受賞歴

東村功労賞（村政功労）〔一九八六年（昭和61）年十二月十二日〕

神谷清孝

一九三二（昭和7）年四月二日生。

第六、七、八期農協理事、三期連続十二年村議会議員を務め、村農協村政に尽くすと共に長年に亘り区代議員を務め、区政の発展に寄与した。

村議員歴

一、第十代〔一九七八（昭和53）年九月～一九八二年九月〕
一、第十一代〔一九八二（昭和57）年九月～一九八六年九月〕
一、第十二代〔一九八六（昭和61）年九月～一九九〇年九月〕
一、第十二代村議会副議長を務める

受賞歴

東村功労賞（村政功労）〔一九九〇（平成2）年十一月三日〕

新城哲夫

一九三〇（昭和5）年十一月二十日生。

村農業委員四期（一九七二年～一九八四年）を務め、内一期会長（一九八一年～一九八四年）、更に三期十二年村議会議員として村政に尽くすと共に長年に亘り区代議員として区政の発展に寄与した。

村議員歴

一、第十三代〔一九九〇（平成2）年九月～一九九四年九月〕
一、第十四代〔一九九四（平成6）年九月～一九九八年九月〕
一、第十五代〔一九九八（平成10）年九月～二〇〇二年九月〕
一、第十五代副議長を務める

受賞歴

東村村功労賞（農業委員功労）〔一九八四（昭和59）年十一月〕

金城良武

一九五二（昭和27）年七月二十日生。

連続二期八年村議会議員として村政に尽くすと共に、長年に亘り区共同売店専務（第二十九、三十、三十一代）として、又区代議員として区の運営、発展に寄与した。

村議員歴

一、第十四代〔一九九四（平成6）年九月～一九九八年九月〕
一、第十五代〔一九九八（平成10）年九月～二〇〇二年九月〕

金城允士

一九四九（昭和24）年十二月二十一日生まれ。

村議会議員三期連続当選。現在三期目在任中で村政に参画。村議会議員の傍ら長年に亘り区代議員として区政の運営に参与。（現在総務委員長）

村議員歴

一、第十四代〔一九九四（平成6）年九月～一九九八年九月〕
一、第十五代〔一九九八（平成10）年九月～二〇〇二年九月〕
一、第十六代〔二〇〇二（平成14）年九月～在任中〕

奥本道夫

一九三八（昭和13）年、四月十八日生。

一九五七（昭和32）年、沖縄工業高校電気科卒。学生時代から中距離の名走者として地区や県大会へ数多く出場、名を馳せたスポーツマンである。

一九五七（昭和32）年、沖縄電力株式会社へ入社。

一九九八（平成10）年、同社退職（社歴四十二年間、無遅刻無欠勤）。

一九七七（昭和52）年、浦添市議会議員初当選。以来現在まで七期連続当選（二十四年八ケ月）。議会活動では、常任特別委員会や審議会において常に主要なポストで活躍。

一九九一（平成3）年、副議長、一九九九（平成11）年に議長を勤める。現在は那覇港湾管理組合の委員を勤める。

郷里への想いは人一倍強く、郷友会や村、区の行事には殆ど欠かすことなく参加し、区民や村民との交流を通して一体感を深めている。

受賞歴

一九八五（昭和60）年～二〇〇二年の間に、県議長会から五回、全国議長会から四回、計九回の表彰を受ける。

藍綬褒章（地方自治功績）（二〇〇二年秋の褒章）
〔二〇〇二（平成14）年十一月三日〕

池原善尚

一九三五（昭和10）年三月十七日生。
高校卒業後、一九五九（昭和34）年、亜国へ移住。
一九七三（昭和48）年、帰国（在亜十四年）。
帰国後、川田共同組合専務（六ケ月）を経て、一九七六年「やんばる東農協」参事就任。
一九九四（平成6）年四月、国頭郡の農協が合併し、「本島北部広域ＪＡやんばる」東支所長就任。
一九九四（平成6）年、「本島北部ＪＡやんばる」東支所長就任。
一九九八（平成10）年、東支所長退任。
農協勤務通算二十二年。（参事十八年、支所長四年）
二〇〇〇（平成12）年、川田区々長就任、区民の信任厚く、現在三期目。（五年目）
二〇〇一年四月、区誌編集員会を組織発足させ、委員として編集に参画。

吉本　勲

一九三四（昭和9）年十二月二十六日生。
一九五七（昭和32）年から一九五九年六月まで、東中学校助教諭。
一九六〇（昭和35）年十月から十二月までの二ケ月間、日本政府派遣の日本青年海外派遣団員として、印度、パキスタン（西パキスタン）、バングラディッシュ（東パキスタン）、スリランカ（セイロン）を親善訪問。
一九六〇（昭和35）年、東村農協へ勤務。営農指導員、営農指導部長としてパインの生産指導に携わる。
一九六二（昭和37）年から一九六六年、農協勤務と平行して第六代東村議会議員として議会活動を行う。
一九七二（昭和47）年、沖縄タイムス東村通信員を委嘱され村内のニュースを広く紹介報道し、東村の知名度を高めた。
又、地域の社会事象に強い関心を持ち、問題点に関わり地域の発展に貢献した（特に教育、産業の振興）。
一九八六（昭和61）年、ＪＡ、山原東農協退職。
字誌編集員。
一九九三（平成5）年十二月二十六日、著作「東村のパイン作りの歩み　副題～見習おう先人の開拓魂」を発行。

受賞歴

東村村政功労（社会文化功労）受賞〔二〇〇三（平成15）年〕

渡嘉敷　直　勇

一九一五（大正4）年三月五日生。
一九四九（昭和24）年、太平洋戦争の終戦で、ソビエト連邦によるシベリアでの四年間に及ぶ抑留を経て帰還。以来川田共同店専務（第四、五期）、又農業を営みながら東小中学校ＰＴＡ会長〔一九五九（昭和34）年～一九六二年〕、東

村農業協同組合理事〔一九六四（昭和39）年～一九六二年〕、東村役場監査委員〔一九六七（昭和42）年～一九六九年〕などを務める。

一九七〇年、福地川の氾濫で畑を流失し、沖縄市へ転出。建築・土木業を営みながら、那覇家庭裁判所沖縄支部家事調停員を務める。

受賞歴

叙勲　勲七等瑞宝章〔一九四四（昭和19）年五月十七日〕
感謝状内閣総理大臣〔一九九四（平成6年）十一月九日〕
表彰状（家裁調停功労）福岡高等裁判所長官
〔一九八四（昭和59）年十一月九日〕

中村宜栄

一九一六（大正5）年九月六日生。

一九五九（昭和34）年頃から、人力で原野を開墾してパイン栽培を始めたパイン導入の先駆者の一人である。

栽培を始めた当初から栽培についてその経過や試行、結果等を克明に記録継続し、それをもとに栽培技術の向上を図り増産に努めた。この記録は、村や北部改良普及所等の有用な指導資料として活用され、琉球大学農学部からも貴重な研究資料として注目された。

受賞歴

東村政功労（産業振興功労）表彰
〔一九七九（昭和54）年十一月三日〕

玉城福吉

一八九四（明治27）年十二月十八日生。

一九一五（大正4）年、沖縄県師範学校卒業。

卒業と同時に川田尋常小学校に赴任。爾来二十一年学校長として国頭村・東村に勤務。学校教育に専念すると共に、地域の社会教育にも意を用い尽力して地域社会の振興に貢献した。特に、自らの得意とするスポーツ（陸上競技、相撲）を通して、地域の青年のスポーツ指導に当たり、多くの選手を育て、当時の国頭郡で名選手、名指導者と讃えられた。又、文、筆をよくし、東村歌（東天高く……）の作詞作曲者として広く村民に知られている。

一九三六（昭和11）年、東尋常小学校長を退職。
一九三九（昭和14）年三月二日没。

金城珍徳

一九〇七（明治40）年十月五日生。

一九二七年沖縄師範学校を卒業、爾来四十五年間、教育一筋に歩み、児童生徒の教育に専念した。その間、一九四八年から五十年までの二年間、新設の東中学校長として、学校作りに奔走するのみならず、村議会議長も務め村の再建に参与した。又社会教育にも意を注ぎ、特に婦人会の結成に参画し、組織を通して新しい時代の婦人、母親の在り方を啓発し、婦人の地位向上に努め、戦後の新しい「村づ

くり」に貢献した。

略　歴

一、東・有銘・稲嶺・尋常高等小学校教頭（戦前）
〔一九二七（昭和2）年～一九四五（昭和20）年〕
一、東実業高等学校創設・校長〔一九四七年四月〕
一、東中学校校長（六・三・三制により新設）
〔一九四八（昭和23）年～〕
一、以後・国頭中学校長・大宜味中学校長を経て
一、金武小学校校長（退職）〔一九七二（昭和47）年〕

受賞歴

東村教育功労者表彰〔一九七八年（昭和53）年四月〕
叙勲　勲五等隻光旭日賞〔一九八六（昭和61）年十一月〕

奥本養善

一八九九（明治32）年八月二十七日生。
一九二〇（大正9）年三月、沖縄県立第二中学校卒業。
一九二二（大正11）年、沖縄師範学校卒業。卒業と同時に名護尋常高等小学校訓導拝命。
一九二六（昭和1）年、長野県岡谷平野小学校訓導。
一九二七（昭和2）年一月二十六日、天底尋常高等小学校を経て、
一九二八（昭和3）年、東京落合第二小学校訓導拝命。
一九三〇（昭和5）年、法政大学高等師範部入学（夜間）。
一九三三（昭和8）年、日大学卒業、国語、漢文中等免許状取得。
一九四四（昭和19）年、落合第三小学校転任。
一九四七（昭和22）年、新宿区立戸塚第一中学校以後、同区落合第二中学校転任後。
一九六一（昭和36）年、同校で退職。

新城利男

一九一七（大正6）年八月十九日生。
一九三六（昭和11）年、沖縄県立第二中学校卒業。
一九三八（昭和13）年～一九四〇（昭和15）年、兵役。
一九四一（昭和16）年、高江国民学校赴任以来、小中学校教諭、教頭を歴任。
伊平屋・国頭中学校校長を経て一九七八（昭和53）年、瀬喜田小学校校長退職。
教職歴三十七年。
若い時から陸上競技（短距離走）に優れ、選手として活躍。一九四一（昭和16）年以降は、教職に在り、学校教育に専念する傍ら、地区・県大会と数々の大会に出場し常に上位（一、二位）の成績を挙げ、沖縄県のスポーツ界で名を馳せた。
又、地域の指導者として、戦後社会の復興、再建に尽力し、その振興発展に貢献した。

受賞歴

沖縄体育協会表彰〔一九五七年、一九六七年（二回）〕

辺戸名地区体育協会表彰〔一九六二（昭和37）年〕
叙勲従六位勲五等瑞宝章〔一九九七（平成9）年八月二日〕

金城　昻

一九二八（昭和3）年十月十日生。
一九四五（昭和20）年八月十五日、終戦のため、沖縄師範学校本科一年中退。
一九四六（昭和21）年二月、沖縄文教学校師範部卒業。
一九四六（昭和21）年、塩屋初等学校赴任。以来小中学校教諭、教頭を歴任。その間。
一九五八（昭和33）年から一九六二年三月まで東村社会教育主事。
安田・有銘、小中学校・金武中学校長を経て、一九八九（平成元）年東小中学校校長を定年退職。教職歴三十八年六ケ月、社会教育主事三年六ケ月。
一九九七（平成9）年四月、東村社会福祉協議会会長就任。現在四期目（七年）。
現在字誌編集委員長。

受賞歴

東村村政功労（教育功労）〔一九九八（平成10）年〕

池原幸男

一九三〇（昭和5）年三月五日生。
一九五〇（昭和25）年、東小学校赴任。以来東村、沖縄市、浦添市、那覇市で教諭、教頭を歴任。
一九九〇（平成2）年浦添市浦城小学校長を定年退職。その間勤務地や県の造形教育研究会のリーダーとして活躍。又、新聞社や各種団体による幼・小・中校の図画や版画コンクール等の審査員をつとめ、沖縄県の造形教育の振興に貢献した。教職歴四十年。

受賞歴

沖縄タイムス教育賞〔一九八一（昭和56）年度〕
沖造連二十五回大会記念表彰〔一九八四（昭和59）年度〕
沖幼協会二十五回大会記念表彰〔一九九〇（平成2）年度〕

金城珍諒

一九三一（昭和6）年九月一日生。
一九五一（昭和26）年、東中学赴任。以来那覇市において教諭、教頭を歴任。
一九八六（昭和61）年～一九八九年那覇教育事務所主任指導主事。
一九九一（平成3）年、那覇市小禄小学校校長を定年退職。教職歴四十年。
書道の大家（書遊会師範）で、那覇市や沖縄県の書写、書道教育研究会の推進者、リーダーとして活躍。又、新聞社や各種教育団体の書道コンクールの審査員をつとめ、書写、書道教育の普及、向上発展に尽くした。

受賞歴

琉球新報社より感謝状〔一九九二（平成4）年二月二十二日〕
全日本書写書道教育研究会より感謝状
〔一九九二（平成4）年十月八日〕

比嘉宗幸

一九三一（昭和6）年十月三十日生。
一九五一（昭和26）年、東中学赴任、以来中学校教諭、教頭を歴任。その間、一九六二（昭和37）年から一九六五年まで社会教育主事（三年）。
一九九二（平成4）年三月、上本部小学校校長を定年退職。教職歴三十八年、社会教育主事三年。
一九九五（平成7）年から二〇〇三年まで、東村教育委員会委員長（八年）。
一九九六（平成8）年から二〇〇一年まで、東村児童委員（五年）。
現在字誌編集委員。

受賞歴

村教育功労賞受賞〔二〇〇三（平成15）年十一月三十日〕

玉城勝郎

一九三八（昭和13）年十月三十日生。
一九六二（昭和37）年、琉球大学卒業。西原町西原中学校へ赴任。五年後の一九六七（昭和42）年、東村高江小中学校へ転任。以来二十一年間北部地区の中学校で教諭、教頭を歴任。主に生徒会活動、生徒指導を研究。成果をあげる。その間、一九八三（昭和58）年から三年間、国頭教育事務所派遣東村社会教育主事として学力向上対策に取り組む。
一九九〇（平成2）年、県教育庁義務教育課副参事
一九九一（平成3）年、大宮小学校校長。
一九九三（平成5）年、国頭教育事務所長。
一九九六（平成8）年、有銘小中学校長。
一九九七（平成9）年、有銘小中学校長を勧奨退職。
一九九七年東村教育長就任、「学力向上対策」を推進。
二〇〇一（平成13）年三月、同職を退任。
字誌編集委員。

受賞歴

文部大臣表彰（教育功労）〔一九九七（平成9）年十二月一日〕
体育功労表彰東村体育協会〔一九七四（昭和49）年〕

玉村靖

一九三八（昭和13）年六月二十一日生。
一九六四（昭和39）年三月、琉球大学卒業、同年四月那覇市上山中学校へ赴任。
一九六五（昭和40年）年七月一日、現職在職のままで米国インディアナ大学留学（一年）。
一九六七（昭和42）年七月一日、上山中学校へ復帰、以来二四・九年間、那覇市、浦添市の中学で教諭を歴任
一九八九（平成元）年教頭職で那覇教育事務所へ出向

（主任指導主事）。
一九九四（平成6）年四月、沖縄市島袋小学校校長。
一九九七（平成9）年、浦添市浦添小学校長。
一九九九（平成11）年、同校定年退職。

渡嘉敷　直　勝

一九三八（昭和13）年九月二十七日生。
一九六三（昭和38）年三月、琉球大学教育学部卒業。
同年四月、宜野湾市普天間中学校へ赴任。以来沖縄市美東中、美里中、北谷町の北谷中等、各中学校教諭を歴任後、次のような役職に就任。
一九八二（昭和57）年四月、県教育庁、中頭教育事務所指導主事。
一九八七（昭和62）年、沖縄市美里中学校教頭。
一九九〇（平成2）年、八重山大原中学校校長就任。
一九九二（平成4）年、沖縄市コザ中学校長。
一九九五（平成7）年十一月、沖縄市東中学校長（新設）。
一九九九（平成11）年三月、同校を定年退職。
二〇〇二（平成14）年四月、沖縄市教育長就任（現在）。

受賞歴

文部大臣表彰（学校保健功労）〔一九九四（平成6）年十一月十日〕

その他

沖縄県中学校校長会副会長〔一九九七（平成9）年～一九九九年〕
沖縄県小中学校体育連盟副会長〔一九九三（平成4）年～一九九七年〕
沖縄県中学校文化連盟会長〔一九九七（平成9）年～一九九九年〕
東村川田郷友会会長〔二〇〇〇（平成12）年～二〇〇四年五月〕

伊　集　道　男

一九四〇（昭和15）年二月八日生。
一九六三（昭和38）年、琉球大学教育学部卒業。
同年本部町瀬底中学校へ就任以来、屋我地、羽地、塩屋、本部、有銘、東中を歴任。
一九八八（昭和63）年、教頭昇任と共に、主任専門員として県立名護青年の家へ出向。
一九九一（平成3）年、今帰仁中学校教頭。
一九九五（平成7）年、野甫小中学校長。
一九九八（平成10）年、名護市大宮中学校長。
二〇〇〇（平成12）年、同校定年退職。
二〇〇二（平成14）年、東村教育委員会教育相談員就任。
字誌編集委員。

玉　城　仁

一九四七（昭和22）年六月一日生。
一九七〇（昭和45）年、琉球大学教育学部卒業。
同年県立名護高等学校へ赴任。以来、県立首里・首里東の良好同学校を歴任後、県教育庁へスポレク祭事務局係長として出向。

県立石川少年自然の家主任専門員。
県教育庁保健体育科指導主事。
県立浦添高等学校教頭。
二〇〇四（平成16）年真和志高等学校長就任。

その他

沖縄県バレーボール協会理事〔一九六九年～現在〕
〃　審判委員長〔一九八一年～一九九三年〕
県立学校保健会会長〔二〇〇〇年～現在〕
沖縄県性教育研究会会長〔二〇〇四年～〕

仲村　恒

一九〇五（明治38）年生。
一九二四（大正13）年、沖縄県立女子師範学校卒業。
同年東村東尋常高等小学校へ赴任。
一九四一（昭和16）年、大宜味村塩屋国民学校へ転勤。
一九四四（昭和19）年、同校を退職。（恩給定年）
一九四六（昭和21）年、東村東初等学校へ復職。
一九六三（昭和38）年、同校を退職。教職歴三十七年。
また、一九四六年、終戦直後の混乱期に、金城珍徳氏等と共に東村婦人会を結成。初代会長となり、会の組織拡大を図ると共に、婦人の地位の向上、生活の安定向上、家庭、社会の教育環境の整備等、社会活動にも尽力した。
没後の一九六七（昭和42）年に東小学校において、東村主催（宮里松次村長）による追悼式が挙行され、長年にわたる教育活動と社会活動が顕彰された。

久高フジ

一九〇六（明治39）年生。
一九四六（昭和21）年、高江初等学校へ就任。
一九四七（昭和22）年、東初等学校へ転勤。
一九六六（昭和41）年、東小学校退職。
その間村婦人会書記（一期）等を務める。

受賞歴

東村村政功労賞（教育功労）〔一九七八（昭和53）年四月一日〕

比嘉敬子

一九二一（昭和6）年七月十五日生。
長期に亘り東村婦人会のリーダーとして村婦人会の運営、活動に参画。
一九七四（昭和49）年から一九七八年まで、五期五年間東村婦人会長を務めるその傍ら、十一年余民生委員として社会的な弱者と言われている方々の相談役、世話役を努める。
一九九一年から東村社会福祉協議会理事。

受賞歴

東村村政功労（社会教育功労）〔一九七九（昭和54年十一月三日〕

平良安子

一九四一（昭和17）年九月二十七日生。

一九六三（昭和38）年から一九八八（昭和63）年三月まで二十四年間東村役場、教育委員会主事として勤務、その間一九七一年から二年間、一九七四年から五年間計七年間東村婦人会の書記会を努め、会運営活動の基を支えた。

受賞歴

東村村政功労（行政功労）表彰〔一九八八（昭和63）年四月一日〕

玉村彌吉

一九一四（大正3）年十一月二日生。

一九四二（昭和17）年三月、沖縄県巡査拝命、八重山警察署初任。

八重山で終戦、一九四六年九月八重山から引揚げる。

一九四七（昭和22）年塩屋警察署勤務を振出しに名護署、県警本部那覇署を歴任。

一九六六（昭和41）年三月、琉球警察学校教頭（警視）。

一九六八（昭和43）年、八重山警察署長（二年）。

一九七〇（昭和45）年、琉球警察学校校長（二年）県警本部を経て

一九七五（昭和50）年四月四日退職（警視正）。

在職中は職掌柄ふる里や郷友会との交流もなかなか思う通りに行えなかったが退職後は郷友会やふる里との交流を積極的に行い郷友会やふる里のために尽くした。特にダム問題では郷友会代表のダム対策委員として関係機関や団体との折衝に積極的に参加した。

受賞歴

警察本部長賞詞　沖縄県警察本部長〔一九七三（昭和48）年七月一六日〕

警察功績賞　九州管区警察局長〔一九七五（昭和50）年四月二日〕

叙勲　勲五等瑞宝章（警察功労）〔一九九四（平成6）年十一月三日〕

受賞多数につき警察本部長賞詞五件・警察局長賞詞二件は省略。

池原達也

一九三五（昭和10）年三月七日生。

一九五五（昭和30）年五月、那覇地区警察署勤務（初任）。

一九八六（昭和61）年三月、嘉手納警察署署長拝命。

一九八七（昭和62）年十一月、警察本部防犯部参事官兼防犯少年課長等を歴任。

一九九〇（平成2）年三月、宜野湾警察署署長拝命。

一九九三（平成5）年四月二十三日から二十六日までの三日間、第四十四回全国植樹祭（沖縄県開催）で天皇皇后両陛下の行啓にあたり、沖縄県警察警護警備実施本部幕僚兼植樹祭現地総指揮官を拝命し大任を果たした。

一九九三（平成5）年、沖縄県警察学校長勧奨退職。

受賞歴

九州管区警察局長より「警察功績賞」を授与される

〔一九九二（平成5）年六月一日〕

新城恵俊

一九四七（昭和22）年八月二十日生

一九七〇（昭和45）年、那覇地区警察署勤務（初任）以来、那覇市、南部地区等の警察署を歴任すると共に、九州管区警察局勤務、大学等での研修を経て、県警察本部等に勤務。二〇〇四（平成16）年三月、沖縄県警察本部外事課長から八重山警察署署長へ就任。

池原吉茂

一九一六（大正5）年十月一日生。

一九四六（昭和21）年、塩屋警察署勤務。（初任）以来、辺土名署、中部地区の各警察署・本部警察署等を歴任。八重山警察署次席を経て、沖縄県警察本部勤務。一九八四（昭和59）年、同警察本部を退職。勤務歴三十八年。

退職後、沖縄県警察に初めて設置された「困りごと相談室」の室長を務める。

受賞歴

叙勲　勲六等瑞宝章〔一九八七（昭和62）年四月二十九日〕

新城利政

一九二二（大正11）年十一月十四日生。

一九四六（昭和21）年、塩屋警察署等を経て主として本部警察署を中心に勤務。

一九七七（昭和52）年、病気のため退職。勤務歴三十一年。

受賞歴

叙勲　勲七等瑞宝賞（警察功労）

〔一九八一年（昭和56）年五月二十五日〕

玉村彌源

一九二一（大正10）年十月五日生。

一九四七（昭和22）年、塩屋警察署勤務。（初任）以来、辺土名署、那覇地区、中部地区等各警察署を歴任後、一九八二（昭和57）年三月、沖縄県警察本部外事課、同通信司令室を経て、退職。勤務歴三十五年。

同年四月沖縄県消防学校教官に就任。

受賞歴

叙勲　勲六等瑞宝章〔一九九四（平成6）年十一月三日〕

吉本好善

一九一七（大正6）年七月二日生。

大戦後の一九四六（昭和21）年から一九六二（昭和37）年頃まで約四十年間、村内唯一の鍛冶屋として戦災による全く無の時代から農機具、海・山器具、大工道具、生活器具等を作り続け、戦後における村の産業復興を支え、生活文化の向上に寄与した。

社会奉仕への関心が強く、村の選挙監理委員を長期間務めると共に、老人会活動にも意を用い、区の老人会や村老人クラブ連合会の育成にも尽力した。

一九九〇（平成2）年から一九九四年まで村老人クラブ連合会会長（二期）、一九九四年以降二〇〇二（平成14）年まで同連合会顧問を務める。

受賞歴

北部地区「老人の主張大会」優秀賞〔一九九三（平成5）年十一月〕

北部地区老人クラブ連合会会長表彰（会育成への貢献）〔一九九四（平成6）年〕

東村村政功労（社会福祉功労）表彰〔一九九八（平成10）年四月十九日〕

金城幸昭

一九二九（昭和4）年七月十日生。

一九七〇（昭和45）年、水道公社（復帰後の県企業局）入社。

一九九〇（平成2）年、同局定年退職。勤務歴二〇年

一九九二（平成4）年、川田区区長（二年）。

一九九八（平成10）年、七月から二〇〇一年七月まで村民生委員。

一九九九（平成11）年以降東村土地評価委員（三期五年目）。

二〇〇二（平成14）年から村老人クラブ連合会会長（二期三年目）。

受賞歴

東村村政功労（社会功労）表彰〔二〇〇三（平成15）年十一月三十日〕

中村正一

一九三〇（昭和5）年六月十七日生。

一九八八（昭和63）年から一九九〇（平成2）年まで国頭漁業協同組合組合長。

一九七二（昭和47）年から一九七五年、東村農業協同組合代表鑑事（第七期三年）。

一九八六（昭和61）年から二〇〇二（平成14）年まで東村選挙管理委員会委員長（十六年間）。

その他川田共同店専務等。

受賞歴

東村村政功労（産業振興功労）表彰〔一九九八（平成10）年四月〕

比嘉博昭

一九二八（昭和3）年四月二十日生。

一九七三（昭和48）年、村国民健康保険委員（九年間）。

一九七三（昭和48）年、国頭漁業協同設立に参画。

一九七三（昭和48）年から一九七九年までの三期六年間と一九九四（平成6）年から二〇〇〇年までの三期六年間、合計十二年間国頭漁業協同組合理事を努める。

二〇〇〇（平成12）年から二〇〇三（平成15）年まで同組合監事（一期三年）一九七三（昭和48）年から三年間第二十八代区長、一九八三年から一年間第三十一代区長を務め、その間に勝乃宮（鎮守の杜）、漁港、プール等が建設される。

一九七八（昭和53）年から一九八七年まで村農業委員（第三～五期　九年間）

受賞歴

東村村政功労（産業振興功労）表彰〔一九九八（平成10）年四月〕

玉城和信

一九二二（大正11）年四月二日生。

一九四一（昭和16）年二月、沖縄県立農林学校林科卒業。学生時代、投てき（円盤、砲丸）と相撲の選手で県でも有名になったスポーツマンである。卒業後一年ほど東国民学校で助教師を務めた後、兵役へ服務。

一九四六年、終戦により復員。復員直後に字の青年会が組織され、戦後初代の青年会長となり「川田青年会歌」を作詞・作曲し、会員の戦災復興への士気と団結を高め、会員の相互扶助（イーマール）による荒地の開墾と食糧生産、仮設住宅の建設、青年会館の建設等々、荒廃しきった戦災からの復興に尽力した。

一九四七（昭和22）年、東実業高等学校が創設されて同校の教官となり、続いて翌年の一九四八年新学制の施行によって東中学校が新設され同校の教官となる。

一九四九年、自分の持っている測量技術を生かすため建設会社国場組へ入社、那覇へ転出した。

同社でも厚い信頼を得て将来を期待されていたが、残念なことに一九八七（昭和62）年八月十一日急病により急逝した。

受賞歴

建設功労表彰　全国建設業協会長

〔一九七九（昭和54）年五月二十四日〕

池原直吉

一九一三（大正2）年九月六日生。

村内における民具蒐集の先達。

長年に亘り、昔からの農林業始め生活全般に渡る民具を蒐集し、それを昔の茅葺き住居（家屋）に展示している。その住居も自力で作ったものである。

また大変器用な人で、趣味で高倉の模型や鳥や魚など動物の木彫等も作り展示している。今年開設された村立の「山と水の生活博物館」へこれら民具、模型等を多数寄贈した。

知念佑憲

一九二九（昭和4）年生。

一九四二（昭和17）年、沖縄県立第三中学校入学。

一九四七（昭和23）年、辺土名高等学校卒業。
一九四七年から一九五〇年まで東初等学校教官。
一九五〇（昭和25）年、アルゼンチン国へ移住。
一九九六（平成8）年、在亜四十六年を経てアルゼンチン国から帰国。
以来建物総合管理業を営みながら、那覇市在住。
字誌編集委員会事務局長。

受賞歴

沖縄県知事からの感謝状
アルゼンチン在住沖縄出身その子弟の社会的地位向上等
〔二〇〇一（平成13）年八月十九日〕

比嘉長治

一九一五（大正4）年五月十日生。
優秀伝統技能保持者。
一九三〇（昭和5）年、東村東尋常高等小学校高等科二年を卒業。卒業の年、十五歳で父の友人（糸満出身の上原氏）の紹介で船大工の棟梁玉城亀氏のもとへ弟子入りし、船大工としての技術を学ぶ。
以来一貫して伝統的なサバニ作りに従事し、戦後はエンジン搭載による船型改良など研究と努力を積む。
一九七七（昭和52）年十一月三十日、優秀技能保持者として県知事表彰を受ける。

吉本宗庫

一九三一（昭和6）年九月十日生。
辺土名高等学校卒業。
美容学校経営者

受賞歴

沖縄県知事感謝状（美容養成功労）
〔一九九三（平成5）年九月十日〕
厚生大臣表彰（美容教育功労）
〔一九九四（平成6）年十月二十五日〕

【コラム】

昭和のオジー達

昭和の七、八年頃から五十年代の終わりまでの間の、印象に残るユニークなオジー達の事を思い出してみた。

●チビシグヤー（尻叩き）オジー達

当時の川田で四、五歳から小学校低学年くらいの子供達にとって、ムラで最も怖い存在は「チビシグヤーオジー」こと大夫ウメー（中村大夫）、利仁ウメー（新城利仁）、鎌太オジー（徳森鎌太）の三人であった。夏にサーンガーやフガッタガー或いは前の海で、子供達だけで泳いだり水浴をしていると必ずタイミングよく遠くの方から大声を出して現れるオジー。捕まると細い竹のムチで尻を叩かれるので、その姿を見るとスッ裸のまま脱ぎ捨ててあった着物を抱えて一目散、小さな子は大声で泣きながら逃げたものだった。そのため、平素でもオジー達の家の前を通るのも怖く避けて通った。

親達が十分に幼児達の生活をみる余裕が無く、放任されている子供達をそれとなく見守ってくれたオジー達。奉仕の心に全く頭の下がる思いがする。「社会の子は皆自分の子と同じ」と考えた当時の社会を学びたいものだと思う。

●働き者のオジー達

夏になるといつも上半身裸で働いていた前屋の八之丞、西比嘉門の三吉オジー。夏の強い日差しのもとでも炎症を起こすほどの日焼けもせず、病気もしないあの強靭な肉体はどうして養われたのか、不思議でならない。

ハブ咬傷後遺症のため片足が不自由で、跛を引きながらもそのハンディーに負けず、杖をつきながら重い肥料や農作物を担いで働いていた中比嘉屋の実助オジー。子供にはいつも笑顔で話しかけていた。

当時の小学校で教えられていた二宮尊徳翁のイメージと重なるナーザトゥ小十助オジー、西新門小の由吉オジー。

松浜屋の仙平オジー、クミンチ屋の交盛オジー、東福地屋の芳蔵オジー、新屋小の平次オジー等々、農家としての生き方に、自分なりの信念を持った風格ある篤農家だということを子供心に感じていた。

日露戦参戦の経歴を持ち、川田で猟銃を使って猪狩りをした最初の人、仲本の政久タンメー。毎年正月三日の日にその年の干支にあたる人（主に子供）を連れてマンカーイーで年始めの試射をし、その年の猟を占い、豊猟を祈願していた。平素はいつも厳しい顔をしていたが、酒が入るとニコニコして狩猟の自慢話をしていた。

暑い夏の日、まっかな顔で頭に捩り鉢巻をし、上半身裸になって黙々とヤマクを削っていた宜吉オジー。ニコッと笑って「側へ来たら危ないよ」と注意していたのが印象に残っている。酒が入るとひとりでニコニコ悦に入って楽しんでいる風であった。

その弟の宜三オジーは、何かに集中すると前後不覚、時間も忘れる熱中癖のある人で「宜三タイム」という言葉を産んだ人である。ある日、ゴンミキの上の方の山へ「流らしタムン」を切り出しに行ったが、時の経つのも忘れ、日が暮れるのにも気づかずに熱中。ムラでは日が暮れても帰らない宜三オジーのことで大騒ぎになり、電灯や松明を灯して探しに出る始末。それを知らない本人は、平気で悠々と帰宅し、皆から散々油を絞られた。その後時間を限らないで事を進めることを川田では「宜三タイム」と云うようになった。

好奇心が旺盛でいつもニコニコ、会う人を心楽しい思いにさせる後福地屋の勘吉オジー。酒が入ると更に楽しくなり「楽しいな」を連発しながら隣の人の肩や腰を力一杯叩くので、隣の人は逃げ出し、一定の間隔を置いて用心しながら接する始末。それでも本人は至って満足。楽しい人だった。

昭和十年代は、川田の製糖、製茶、精米業が機械化操業され始めた頃である。いつもその機械を扱っていた比嘉吉二（西大屋小）、宮平義光（西屋）、比嘉吉男（東大屋小）各氏のことも強く印象に残っている。

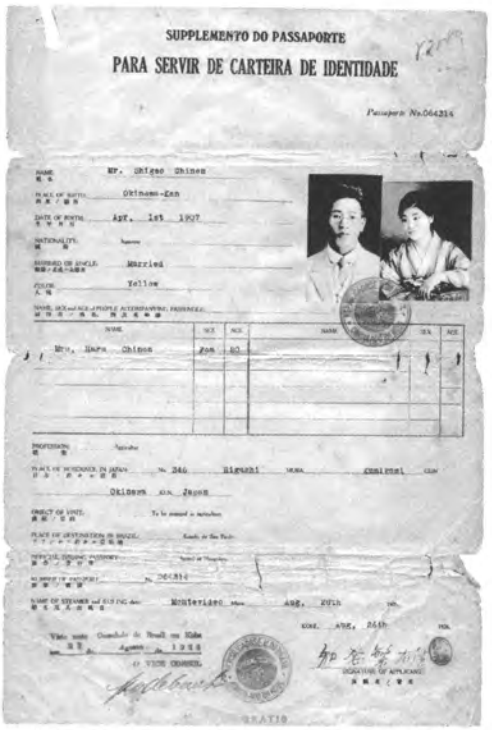
第七章　資　料

1、川田出身の東村三役経験者

■村長		
知念　貞馨	初代	大正十二年十月～昭和二年九月
知念　貞馨	第五代	昭和十二年十月～昭和十四年九月
池原　善通	第六・七代	昭和十四年十月～昭和二十年九月
		第二次世界大戦中から戦後に跨がって村長
平良　平助	第十代	昭和二十九年九月～昭和三十三年八月
平良　平助	第十一代	昭和三十三年九月～昭和三十七年八月
平良　昇康	第十九代	昭和六十二年四月～平成三年四月
平良　昇康	第二十代	平成三年四月～平成七年四月

■助役		
池原　善通	第三代	昭和六年十月～昭和十年九月
	第二次世界大戦後	
平良　昇康	第十七代	昭和五十九年十月～昭和六十二年三月
平良　尚道	第二十代	平成七年六月～平成十一年五月
平良　尚道	第二十一代	平成十一年六月～平成十五年五月

■収入役		
比嘉　幸一	初代	大正十二年十月～昭和二年九月
比嘉　幸一	第二代	昭和二年十月～昭和六年九月
比嘉　好吉	第五代	昭和十二年十月～昭和十四年九月
	第二次世界大戦後	
比嘉　好吉	第七代	昭和二十一年四月～昭和二十三年八月
奥本　養幸	第十四代	昭和四十三年九月～昭和四十七年八月
奥本　養幸	第十五代	昭和四十七年九月～昭和五十一年八月
奥本　養幸	第十六代	昭和五十一年九月～昭和五十五年八月



SUPPLEMENTO DO PASSAPORTE

PARA SERVIR DE CARTEIRA DE IDENTIDADE

Passaporte No.064314

NAME: Mr. Shigeo Chinen

PLACE OF BIRTH: Okinawa-Zen

DATE OF BIRTH: Apr. 1st 1907

NATIONALITY: Japanese

MARRIED OR SINGLE: Married

COLOR: Yellow

NAME	SEX	AGE	NAME	SEX	AGE
Mrs. Haru Chinen	FEM	20			

PROFESSION: Agriculturist

PLACE OF RESIDENCE IN JAPAN: No. 246 Higashi Machi Chinsei Gun Okinawa Ken Japan

OBJECT OF VISIT: To be employed as agriculturist

PLACE OF DESTINATION IN BRAZIL: Kasato in Sao Paulo

NAME OF ISSUING AUTHORITY: Consul at Hongkong

NUMBER OF PASSPORT: No. 064314

NAME OF STEAMER and SAILING date: Montevideo Maru Aug. 20th

KOBE, AUG. 24th

Visto neste Consulado do Brasil em Kobe

27 de Agosto de 1926

O VICE CONSUL

SIGNATURE OF APPLICANT

GRATIS

旅券の控（身分証明書）在日ブラジル領事館発行

Mr. Shigeo Chinen	20	years of age;	Mrs. Haru Chinen	20	years of age;
M		years of age;	M		years of age;
M		years of age;	M		years of age;
M		years of age;	M		years of age;

The undersigned governor of Hyogo Prefecture, hereby certify that the above named persons, the bearers of passport No. 064314 of Japanese nationality, have never been condemned any common fault nor have been under judicial authority for any fault against social order and all are of good conduct.

Date Aug. 24th 1926

GOVERNOR OF HYOGO PREFECTURE.

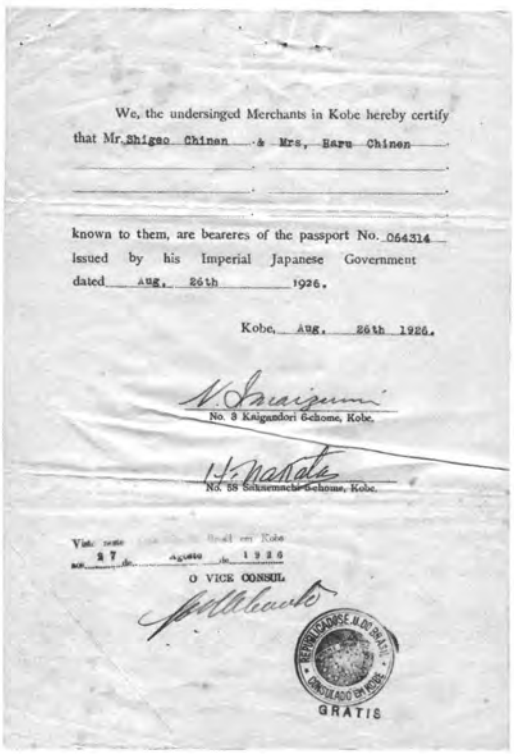
Jiro Yamagata.

Visto neste Consulado do Brasil em Kobe

27 de Agosto de 1926

O VICE CONSUL

GRATIS



We, the undersinged Merchants in Kobe hereby certify that Mr. Shigeo Chinen & Mrs. Haru Chinen

known to them, are beareres of the passport No. 064314 Issued by his Imperial Japanese Government dated Aug. 26th 1926.

Kobe, Aug. 26th 1926.

N. Iwaizumi
No. 3 Kaigandori 6chome, Kobe.

H. Nakata
No. 58 Sakaemachi 5chome, Kobe.

Visto neste Consulado do Brasil em Kobe

27 de Agosto de 1926

O VICE CONSUL

GRATIS

295

REGISTRO DEL ESTADO CIVIL Y CAPACIDAD DE LAS PERSONAS

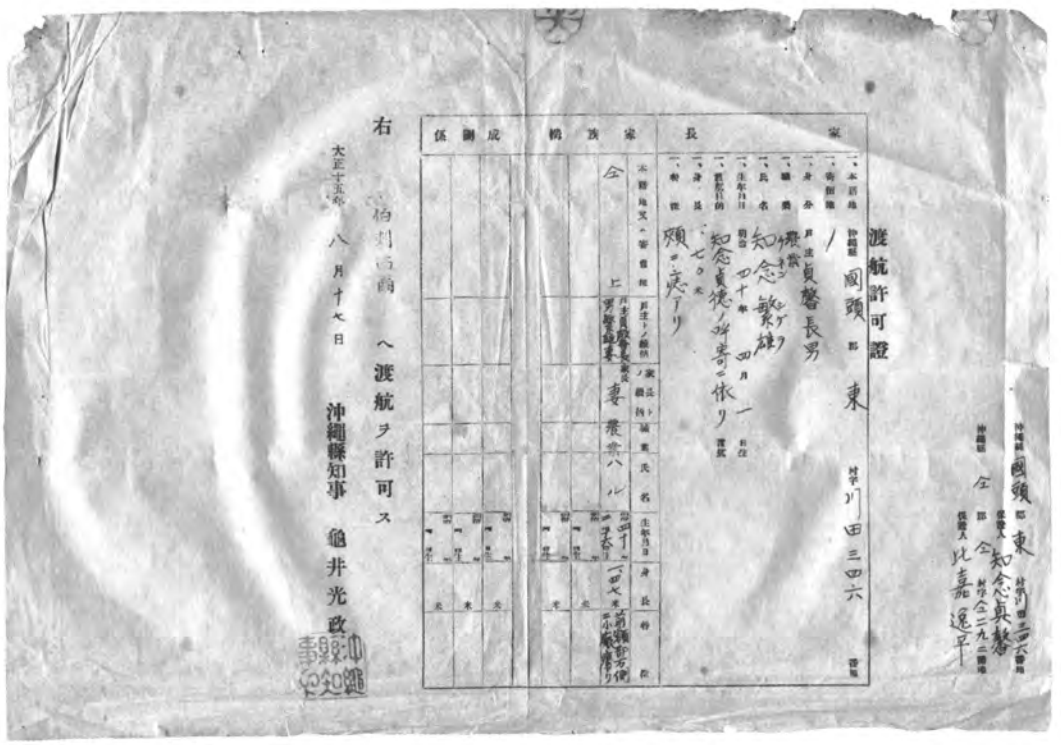
DEPARTAMENTO CENTRAL DEFUNCIONES TOMO 3C NUMERO 2190 AÑO 1983

En Buenos Aires, Capital de la República Argentina, a 11 de diciembre de 1983 Yo, Funcionario del Registro del Estado Civil y Capacidad de las Personas inscribo la DEFUNCION de Shigeo EHINEN

Sexo MASCULINO nacionalidad JAPONESA estado CASADO profesión JUBILADO Doc. Ident. 01-1543799 domicilio J. MONTEAGUDO 164 Hijo de TEIKEI EHINEN y de KAMADO OKUMOTO nacido en OKINAWA el 1º de Abril de 1906 Ocurrida en esta ciudad GRAL. URQUIZA 609 el 10 de diciembre de 1983 a las 16 horas Causa de la defunción PARO CARDIACO INSUFICIENCIA MIOCARDIO Certificado médico Angel Ruben ARTUSI Interviniente Juan Carlos HAMADA Doc. Ident. 16-7609017 Domicilio C. Lazcano 903 Obra en sumario de Ex. Adm. Antiguedad de SUKENARI EHINEN Hijo del fallecido prueba archivada.

結婚証明書（表）
在日アルゼンチン領事館発行

結婚証明書（裏）
在日アルゼンチン領事館発行



渡航許可證

一、本籍地　沖縄縣　國頭郡　東村
一、戸主　知念真馨
一、身分　戸主長男
一、職業　農業
一、氏名　知念繁雄
一、生年月日　明治四十年四月一日
一、戸籍筆頭者　知念真徳ノ戸籍ニ依リ
一、身長　七〇米
一、特徴　頭ニ疵アリ

家族

本籍地及ビ戸籍筆頭者　知念真馨
妻　知念ハル

右　伯剌西爾　ヘ渡航ヲ許可ス

大正十五年八月十七日　沖縄縣知事　亀井光政

呼寄の證明願

本籍 沖縄縣國頭郡東村字川田九百參番地

在留地 亞爾然丁國ブエノスアイレス市ベネラルガルタイサ街三六番

戸主 貞馨 長男

呼寄の人 知念繁雄

明治四拾年四月壱日生

本籍 右呼寄の人ト同じ

現住所 本籍地

戸主 貞馨

被呼寄人(妻) 知念ハル

明治四拾年弐月拾六日生

私儀前記場所ニ在留致シ渡米差支ヘ有之ヲ経営致シ居候處今般同妻ハルヲ呼寄の度候間御證明被成下度戸籍謄本相添此段願上候也

昭和五年四月拾四日

右願人 知念繁雄

在ブエノスアイレス

領事

内山岩太郎殿

右證明ス

昭和五年四月拾四日

在ブエノスアイレス

領事 内山岩太郎

本籍 沖縄縣 國頭郡東村字川田 九百參 番地

戸籍法第百二十二條第一項の戸籍の改製に関する規則により昭和四拾弐年拾壱月 日改製につき昭和四拾八年 月拾 日謄製

明治四拾年四月壱日國頭郡久志村で出生同月拾日届出入籍

大正拾五年七月弐拾弐日銃平名ハルと婚姻届出

氏名	続柄	生年月日
知念繁雄	父 亡知念貞馨 長男	明治四拾年四月壱日
	母 カマト	
	妻 ハル	明治四拾年弐月拾六日

本籍 沖縄縣 國頭郡東村字川田 九百參 番地

戸籍法第百二十二條第一項の戸籍の改製に関する規則により昭和四拾弐年拾壱月 日改製につき昭和四拾八年 月拾 日謄製

大正拾五年七月弐拾弐日知念繁雄と婚姻届出国頭郡大宜味村字謝名城八拾四番地銃平名長盛戸籍から入籍

氏名	続柄	生年月日
知念繁雄	父 銃平名長盛 長男	
	母 ナベ	
	妻 ハル	明治四拾年弐月拾六日

證明書

本籍沖縄縣國頭郡東村字川田三四六番地
知念ハル
農業
明治四十年二月十五日生
右之名品行善良ナル者ナルコトヲ證ス
大正十三年二月二日
警部長兼後任名護警察署長

證明書

本籍沖縄縣國頭郡東村字川田三四六番地
知念繁雄
農業
明治四十年四月一日生
右之名品行善良ナル者ナルコトヲ證ス
大正十三年二月二日
警部長兼後任名護警察署長

證明書

本籍　大日本帝國沖縄縣國頭郡東村字川田三四六番地
知念繁雄
農業
明治四十年四月一日生
右者從來農業ニ從事シ居タル者ニシテ分ノ生計能力ヲ有スル者ナルコトヲ證明ス
昭和四年二月十六日
大日本沖縄縣警察署長
名護警部　東善一

大

證明書

原籍　日本帝國沖縄縣國頭郡東村字川田三四六番地
農業
知念ハル
明治四十年二月十六日生
右者本證明書交付ノ日附前五年間体刑ニ相當スル一般犯罪ニ因リ處刑セラレタルコト無ク又社會ノ秩序紊亂ノ罪ニ依リ訴追セラレタルコトナキ者ナルコトヲ證明ス
昭和六年二月十三日
日本帝國沖縄縣名護警察署長
警部　糸数昌威

編集後記

川田区民及び郷友会員待望の字誌が、発刊の運びとなり、編集に携わった者として深い感慨を覚える。平成十三年四月に区長から委嘱され編集員会が組織された。また、委員は執筆にも携わることになった。繁忙の中、区長は編集委員会に参加され、内容についての提言を行うとともに執筆も担った。

当初の計画では三年間で完成させる予定であったが、資料収集に時間がかかり作業を始めて四年近くになった。大まかな骨格について意見交換後、役割分担や執筆割り当てを行い早速取材活動を始め編集作業に取り掛かった。区民が親しめるよう口絵を数多く取り入れ、平易な文章で難解な語句はできるだけ避けるように努めた。身近な新聞記事を数多く編集に取り入れるなど、できるだけ区民と密接にかかわっている内容をふくらませ手作りの字誌にすることを目指した。

ムラに関する文献や資料が戦災により殆ど消失してしまい、多くの事柄は字の長老、古老からの聞き取り調査でまとめた。史実記録もない祖先をたどるのは容易ではなく、ほとんど口碑伝承にたよることとなり、おかげで聞き取りのために多くの区民の協力を得ることができたことに感謝したい。また、郷友会、県外、海外の方々の協力も得た。口碑伝承を身近に実感するために数多くの拝所等を実地踏査した。その中でも北山城主の弟が川田部落の祖先とされていることから、その足跡を尋ねるために「今帰仁上り」の拝所を二度にわたって調査した。それに、琉球国王が国土の安泰と五穀豊穣を祈願した拝所「東御廻り」の調査も行った。始祖が北山城から川田へたどり着くまでの道順を追体験、川田根謝銘屋と兄弟関係にあるとされている田港根謝銘屋の関係も踏査した。川田根謝銘屋が確かに北山城主の末裔であることの証拠としている品として装身具の勾玉を大切に保管している。

沖縄戦中に区民や中南部からの避難民が生活していた川田集落からおよそ五キロメートル離れた奥山、通称ダキマサキの調査もした。資料不足と編集委員の力量不足で不備な点が多々あることは承知している。後代の人々がこの不十分な内容を深く研究して、より内容の豊富な字誌続刊への糸口となることを願っている。本誌の刊行に当たり、体験記等の玉稿をお寄せくださった方々、大正初期や昭和十年代の生活の様子についての座談会にご協力下さった先輩各位、聞き取り調査にご協力下さった長老の方々、郷友会のご協力、写真等の貴重な資料を提供下さった区民の皆様、その他、原稿の完成までご指導下さいました関係各位に深甚なる感謝を申し上げます。

なお、この字誌は区長の字への熱烈な情愛がなければ刊

行はなかったと言っても過言ではない。また、区書記の宮平牧子さん、奥本由紀さんには原稿の印刷や会議の準備などしてくれたことに感謝したい。

川田区民や郷友会員の方々がこの小冊子に目を通され、村のルーツを尋ねることなどでこれまで以上に信頼関係を深めるとともに故郷（川田）に愛着と誇りが持たれるものと信じている。

おわりになりましたが、本誌刊行に当たり「丸正印刷」とりわけ営業企画室室長佐伯万喜夫氏には編集の組み立てや原稿の構成等細部にわたって助言してくださいましたことに心から厚く感謝を申し上げます。

平成十六年十二月

先輩方の座談会

東御廻りの調査

今帰仁上りの調査

参考資料・参考文献

『沖縄の葬祭と先祖供養』（渡口初美著）
『沖縄の祝祭と年中行事』（渡口初美著）
『山原　その村と家と人と』（宮城真治）
『琉球芸能事典』（琉球新報社）
『沖縄・奄美の葬送・墓制』（名嘉真宜信・恵原義盛）
『沖縄の祭りと芸能』（当間一郎）
『沖縄の年中行事１００のナゾ』（比嘉朝進）
『沖縄の冠婚葬祭』（那覇出版社）
『沖縄の人生儀礼と墓』（名嘉真宜信）
『沖縄の祭りと行事』（比嘉政夫）
『沖縄の歴史』（新田重清・座安政侑・山中久司）
『沖縄の祭礼』（渡邊欣雄）
『沖縄の社会組織と世界観』）渡邊欣雄）
『東村史』（東村役場）
『沖縄縣史』（沖縄県、県教育委員会）一巻、四巻、十八巻、二十二巻
『喜如嘉誌』（喜如嘉誌刊行会）
『沖縄戦後生活史』（沖縄タイムス社）
『沖縄縣國頭郡誌』（国頭郡教育会）
『名護六百年史』（比嘉宇太郎）
『沖縄県の教育史』（浅野誠）
『創立百周年「記念誌」』（東村立東小学校）
『古琉球「三山由来記集」』（那覇出版社）
『今帰仁村史』（今帰仁村役場）
『沖縄国頭の村落』（津波高志、他）
『球陽』（桑江克英　訳注）
『琉球歴史便覧』（月刊沖縄社）
『大宜味村史』（大宜味村役場）
『国頭村史』（国頭村役場）
『沖縄歴史散歩』（大城立裕）
『沖縄資料集成』（西銘康展編集）
『沖縄タイムス』（沖縄タイムス社）
『琉球新報』（琉球新報社）
『沖縄大百科』（沖縄タイムス社）
『わが農協の歩み』（東村農業協同組合）
『東村のパイン作りの歩み』（吉本勲）
『沖縄の鍛冶屋』（福地曠昭）
『古きを温ねて』（平安座自治会館新築記念）
『社会学第一号』（沖国大研究クラブ編）
『川田共同店の歩み』（川田共同組合）
『沖縄の民族資料第一集』（琉球政府文化財保護委員会監修）
『山原の大地に刻まれた決意』（高崎哲郎）
『自分史』（玉村弥吉、吉本好善）
『沖縄県につたわる　こどもの遊び』
（株式会社光文書院、沖縄県小学校体育研究会編著）
『東御廻い』（琉球出版社　玉城村役場、知念村役場、佐敷町役場）
『高校生のための　沖縄の歴史』（沖縄県教育委員会）
『沖縄の聖地　拝所と御願』（むぎ社　湧上元雄、大城秀子）
『沖縄民族』（第一書房　琉球大学民族研究クラブ）

編集委員会

〈顧問〉池原貞雄
〈顧問〉奥本養幸
〈委員長〉金城昂
〈事務局長〉知念佑憲
〈委員〉比嘉宗幸
〈委員〉吉本勲
〈委員〉玉城勝郎
〈委員〉伊集道男
〈区長〉池原善尚
〈書記〉宮平牧子
〈書記〉奥本由紀

川　田　誌

発行年月	平成16年12月31日
編　集	字誌編集委員会
発　行	川田区 沖縄県東村字川田788番地
電　話	(0980)43－2546
印　刷	(協)丸正印刷 西原町小那覇1215番地
電　話	(098)835－8181